3 D A Y S

来生尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
３ＤＡＹＳ

【Ｎコード】
Ｎ８８９８Ｅ

【作者名】
来生尚

【あらすじ】
小さな村のパン屋の娘、ササ。彼女には幼馴染で恋人のルアがいた。しかし彼は徴兵により王都へ行ってしまう。そしてササにも転機が訪れる。人ならざるモノ水竜（すいりゅう）の声を聴くことが出来るただ一人の存在である「水竜の巫女」に選ばれた。彼女は恋人と巫女、どちらを選ぶのか？

1DAY・1

序

「ササ、王都に行くことになったんだ」

いつも通り店番をしていると、幼馴染のルアがパンを買いながらそんなことを口にした。

大体、この小さな村で適齢の長男じゃない男の人なんて数えるほどしかいないから、ルアが徴兵されることも決して想像できなかったことではない。

むしろ思っていた通りだ。別に、驚くことでもない。

「そう。よかったじゃない。なかなか王都に行く機会なんてないんだから。お土産よろしくね」

出来る限り、そっけなく突き放すように答えた。

言いながらお金を受け取り、袋の中にパンを詰め込む。

「他に何かいうことは無いわけ、だ」

パンの袋を手渡して、極力顔を見ないように席を立つ。ルアの顔を見たら余計なことを言ってしまいそうなので、顔は見たくない。

「無いわ。あたしがルアに何を言うって言うの。いいじゃない、この小さな村で燻っていたくないって言っていたのは自分じゃない」

「それはそうだけど」

「じゃあ、あたしは何も言う事ないでしょ」

そこまで言うと、お店に他のお客さんが入ってきた。ルアはそれ以上何も言わずに店を出て行った。

姿が見えなくなる自然と溜息が出てくる。

余計なことを言わないですんだ、とりあえずまだ冷静でいられる。そのことに安心した。
行かないでって言ったって、絶対行くに違いない。ルアはそういう人だ。
なのに引き止めて欲しいなんて虫が良すぎる。だから、引き止めない。

パンを袋に詰めながら、そんなことを考えているともう一人の幼馴染のカラがお店に入ってくる。
陳列されているパンを見ている振りをしているけれど、明らかに例の件で話があるに決まっている。
大体、カラが店にきてどのパンを買おうか悩んでいる姿なんて見たことがない。
「ありがとうございました。またお願いします」
そう言ってお客さんにパンの袋を渡すと、案の定カラがレジの前にやってきた。

「ねぇササ、聞いた？　ルアが王都に行くって」
やっぱり。そう聞いてくると思った。
「うん、さっき本人が言ってた。いいんじゃないの。本人は村を出たがっていたんだし」
「ちょっと。あんたさぁそれでいいの？　ルアが王都に行っちゃったらあんたたち離れ離れになっちゃうんだよ」
「別に、たいしたことじゃないよ。騒いだからってルアが徴兵されることには変わりないし、あたしが何か言ったらルアが徴兵されなくなるって訳でもないでしょ」
ちょっと頬を膨らませて、カラが赤い顔になる。
「それであんたはいいの？　その程度だったの？　あんたルアのこと好きだったんじゃなかったの？」
まくし立てるように言うカラが少し疎ましい。正直放っておいて

欲しい。
「じゃあ泣いて取り乱して、ルアに行かないでって縋り付けばいいの？　それで何かが変わるとでも言うの。ばかばかしい。あたしはそんなみっともないことしたくないの」
火に油を注ぐだけだとわかっていても、そういう言い方になってしまう。
「みっともないって何よ。みっともないのが嫌なの？　あんたその程度にしかルアのこと想ってない訳ね」
一度溜息をついてから、カラの顔を見た。どうしてそんなにむきになるんだろうと思うくらい、真っ赤な顔をしている。

「カラ、ちょっと冷静になって。あたしが引きとめてもルアは絶対に行くって言ったら行くの。それに村長が決めたことをあたしたちが何か言ったからってひっくり返せるわけないじゃない。だから、何を言ったってしょうがないのよ」
「ササ……」
「行かないでって言うのは簡単だと思う。あたしは言えば楽になるかもしれない。でもルアは絶対に困ると思う。それだったら、突き放したほうがいいじゃない」
「それでも、行って欲しくないならそう言えばいいじゃない」
少し困ったような顔をしてカラが言う。
「言わないわ。だってそう決めたんだもの」
そう言ってカラに笑いかけると、泣きそうな顔でカラが笑った。
「あんた、損な性格だよね」
そんなことないよという言葉を飲み込み、ただ笑った。今はそうするしか心の平静を保つ方法がない気がしたから。

数日たって、ずっと顔をあわせていなかったルアがふらっとまた店番をしているときにやってきた。

ちょうどママと交代する時間を見計らったように来たので、内心「しまった」と思った。
隣の家に住んでいても、案外顔を合せないように出来るもんだと思っていたのに、向こうから来てしまうと逃げようがない。
「おばちゃん、ササ借りてもいい？」
何か言おうとする前に先手を打たれてしまって、ますますもって逃げようがなくなってしまった。
「ああ、丁度交代する時間だから構わないよ。晩御飯の仕度の時間まで返してくれよ。今日はササが食事当番なんだ」
「うん、わかった。んじゃササ、ちょっと用があるんだけど」
先に、借りるってママに言っておいて、あとから本人に断りいれるっていうのはどういった了見だ。
これじゃ適当な理由もつけられない。
「……わかった。ママ、エプロンここに置いてくね」
少し考えてみたけれど、今更断る口実も見つけられないので、しぶしぶ付き合うことにした。
ここ数日会わないようにしていたのが水の泡じゃない。

店を出て、ルアと並んで歩いていても楽しくない。というよりも、何で何も言わないのだろう。
人に用があるとか言っておいて、その態度は何なんだ。とちょっと腹が立ってきた。
何だって黙っているんだろう。言いたいことがあるならはっきり言えばいいのに。

村のはずれの水竜の祠の前に来て、初めてルアが口を開いた。
「こないだカラと話をしたんだ。ササがどう思っているか、聞いた」
余計なことを話したな、とカラのことを思い出してまた腹がたった。
「それで、カラは何て言ってたの」

どうしても、口調がきつくなる。
余計な事を言ったカラにも、わざわざ問いただしにきたルアにも腹がたった。大体、カラにとって他人事なんだから放っておけばいいのに。
「ササは、俺に行って欲しくないって言えないって」
返答に困っていると、畳み掛けるように言葉を繋ぐ。
「俺、気付かなくてごめん。ササがそんな風に思っているなんて知らなかった。行って欲しくないと思ってないのかと思ってたから、俺もむかついて、お前のこと避けたりしてたし」
え、何言っているの。
こっちが避けていたつもりなんだけれど、私ルアに避けられていたの？
しかも「行って欲しくないと思ってないから」という理由で？
そう、口まで言葉が出そうになったけれど、更に言葉が続いて何も言えなくなってしまった。
「本当にゴメンな。俺もお前にちゃんと話をしなかったのがいけないんだよな。ちゃんと話し合う機会が必要じゃないかと思ったんだ。お前の気持ちもちゃんと聞いてないし」
あたしの気持ち？
また欲しい答えと違う答えを言ったらむかついて、ずっと避けるのかな。
ふと意識が自分に向いている間に、耳から言葉は入ってくるけれど、聞き流すようになっていた。
欲しい答えって何だろう。

「なぁ、ササ。お前、俺に行って欲しくないんだろう？」
急に言葉が意識の中に入ってきた。その言葉の意味を理解するのに、一瞬の間が必要になったけれど、次の瞬間には頭に血がのぼってきた。
行って欲しくないんだろうって。

仮に行って欲しくないと思っていて、王都には行かないでって言ったって、絶対に行くことをやめたりしないくせに。
なのに「行かないで」って縋り付いて欲しいなんて、虫が良すぎる。そういえば惨めになるのは、あたしじゃない。
「どうしてそんなこと聞くの。聞いて何かが変わるの」
「え。お前が言えないっていうから聞いているんだけれど」
イライラする。癇に障る。
「言わせれば、ルアが満足するだけでしょ」
何なんだよと声を少し荒げながら、ルアが腕をつかむ。その手を振り払うと、自然に両手のこぶしに力が入る。声も自然と大きくなっていく。
「行かないでって言えば、あんた行かないの？　そうじゃないでしょう。そう言われたって行くんでしょう」
何か口を挟もうとするのがわかったけれど、そんなことはどうでもよかった。
「前にキナ兄ちゃんが徴兵されたときだって、あんなに行きたいって大騒ぎしたくせに。絶対行くくせに引き止めて欲しいなんて、何で言うのよ」
ルアの目に苛立ちが浮かんできたのが判った。
「勝手なこと言わないで。放っておいて」
そう言い切ると、もうルアの顔さえ見たくなかった。
目を逸らして水竜の祠に目をやった。それはもう何も話すことはないというアピール。
それに気がつくかどうかは判らないけれど。
「何なんだよ。お前にとって俺はその程度なのかよ。わかったよ。俺は王都に行くよ」
頭の中で何かが弾ける音がした。
「判断を人に求めないで。自分で決めることでしょう。あたしが行くなって言ったってどうせ行くくせに、人のせいにしないでよ。あんた勝手なのよ。人の罪悪感を煽って、自分が悪くないって正当化

して、何もかも人のせいにしないでよ。行くなら勝手に行けばいいわ。」
一気にまくし立てて、言い終えたら肩で息をしていた。
何か弁解しようと口を開こうとしたのか、それとも抗議しようと口を開いたのかわからないけれど、言葉を紡ぐことなく、ルアはその場から立ち去っていった。

これでよかった。惨めになるのはイヤだったから。
大きく深呼吸してから水竜の祠に入る。
水竜の祠の中には、水竜の住まう神殿に繋がると言われている水脈があり、滾々と水が湧き出している。きっと、今までもこれからもずっと変わらずここに沸き続けているのだろう。
湧き水を両手で掬って顔を洗う。
冷たくて気持ちがいい。高ぶった感情を落ち着かせてくれるような気がしてくる。
ポタポタと顔から落ちていく水滴の中に涙が混じって落ちていく。
下から湧き上がる水に涙の波紋が広がっていく。
その涙を消そうと、何度も何度も冷たい水で顔を冷やした。でも涙が止め処なく流れてくる。
それが悔しかった。どうしようもなく悔しかった。
ポタン。ポタン・・と涙が落ちる音が祠の中に響いていた。

1DAY・2

1DAY

夢？

顔を上げるとそこは見慣れた部屋で、目の前の窓からは水竜の神殿の最深部である奥殿が見える。

鬱蒼とした緑の木々の奥に、水に浮かぶかのように佇んでいる水竜の住まう神殿。

手元には読みかけの書物が広がっていて、開け放たれた窓から入ってくる風に本がカサカサと音を立ててページがめくれていくのを見、とたんに現実に戻される。

昨夜、書庫から持ってきた書物を読んでいて眠くなって、机に突っ伏したまま寝てしまったらしい。

水竜の神殿に巫女候補として呼ばれて半年。

ルアが村を出てから三年以上が経ち、ルアのことを夢に見るなんて事もなかったのに、一体どうしてこんな夢を見たんだろう。

あの時の気持ちも今はもう忘れていたのに、なぜか顔には涙の跡がある。

結局、あっさりと村を出ることにしたルアは、旅立ちの日に二年経ったら迎えに行く、とだけ言い残し村を出た。

その後何の便りもなく、約束の日を過ぎてもルアは戻ってくることはなかった。

心の波が収まって、毎日を穏やかに過ごせるようになった頃、次代の水竜の巫女に選ばれたと、この神殿から使者がやってきた。

その日のことは今も鮮明に覚えている。

いつものように自宅の一回のパン屋で店番をしていると、見たこともない人たち（それは水竜の神殿の神官たちだったのだが）がお店に入ってきて、躊躇わず額づいた。
「次代の巫女サーシャ様。お迎えに上がりました」
それが一体どういう意味なのか理解することも出来ず立ち尽くしていると、ママが店の奥から気配を感じたのか顔を出した。
「あんたたちは一体なんなんだい」
呆れたような声で腕組みをして、神官たちを見下ろした。
神官たちはゆっくりと顔を上げ、服の汚れも気にせずママと向かい合った。
「サーシャ様のお母様でいらっしゃいますね。我々は水竜の神殿の神官でございます。今巫女様のご神託により、次代の巫女であらせられるサーシャ様をお迎えに上がりました」
その言葉の意味を、ママも、自分自身も理解することがなかなか出来なかった。

水竜。神官。巫女。神託。

全ての言葉の点と点が結びつくまではそれなりの時間が必要だった。

この国の守り神であり、水を統べる竜。
国王さえも水竜の意向を伺い、この国を統治しているという。
そして、人ならざるものである水竜の声を人々に伝えるのが水竜の巫女と呼ばれる女性である。
その「巫女」に神託により選ばれた、と言われてもにわかには信じられなかった。

先に口を開いたのはママだった。

「うちのササ、いや、サーシャが巫女。何かの間違いじゃありませんか。うちの家系からは当然ですが、この村からも巫女が出たなんてことはありませんよ」
さっきのまくし立てるような言葉遣いからは一変して、ママの中では精一杯丁重に話しているのがおかしかった。

「水竜の巫女のご神託に間違いはありません」
一番年配と思われる神官が口を開いた。
確信と信念に満ちた声だった。
「私共は水竜様のお言葉に従い、サーシャ様をお迎えに参ったのです。先例など必要ではないのです。水竜様が必要とされているのがサーシャ様なのです」
水竜に必要とされている。
その時の神官の言葉は、今の自分をどれだけ支えているのか計り知れない。
でも、その時は疑っていたわけではないけれど、信じることが出来ないでいた。
それはママも変わらなかったようだ。
「そう言われてもねぇ」
ママもそれ以上の言葉が出てこないようで、口を閉ざしてしまった。
かといって、私も何か上手い言葉が出てくるわけでもなく、神官たちも一様に黙ったままで、重たい空気が場を支配した。
誰も動くことは出来ず、ママと私は立ち尽くしたままで、神官たちは決して綺麗とはいい難い、店の床に額づいたままだった。

自分が巫女だと言われて、はいそうですかと言える人間がいるだろうか。
自分が特別だと言われ、すぐにホイホイと喜んで笑える人間がいるだろうか。

それがまして、水竜の言葉を聞き、国さえ動かす巫女だと言われ、信じられる人がいるだろうか。
信じる信じないというよりも、今は自分よりも明らかに立派な服を着ている神官たちの服が汚れることが気になってしまった。
「あの、立って下さい」
その状況に居たたまれなくなって、思わず出てきた言葉がそれだった。
「仮にあたしが次代の巫女だとしても、今はただのパン屋の娘です。そうやって頭を下げられると、どうしたらいいのか判らなくなります。だから立って下さい」
その言葉で神官たちはいっせいに立ち上がった。

「サーシャ様、私は幾度となく水竜の巫女を神殿にお連れする役目を頂きました。サーシャ様が信じることが出来ないでいらっしゃるのも、無理の無いことだと思っております」
一番年配の神官が優しい口調でそう告げた。
その言葉に黙って頷くと、更にゆっくりと言葉を続けた。
「ですので、一度今巫女様にお会いしていただけませんか。お答えを出されるのはその後で構いません。今巫女様より承ったのは、サーシャ様に一度水竜の神殿にいらして頂くために、お母様や村長殿のご了承を頂くことでございます。」
その言葉に頷くと、神官は人のよさそうな笑みを浮かべた。そして目線をママにと移した。
「私共の言葉を信じることは難しいかと思いますので、出来ましたらお母様にも神殿までご一緒頂ければと思っております」
少し悩んでからママは重たい口を開いた。
「あんたたちが、たちの悪い人攫いじゃないとは思うけれど、さすがに大事な娘を一人で知らない人に預けるわけにもいかないからね」
非常に遠まわしな了承であった。

その後はとんとん拍子で話が進み、数日後、村長とママと私の三人は水竜の神殿に連れて行かれ、水竜の巫女に会い、巫女本人から神託を聴くことになり、それから半年間、私は一度も村に戻ることはなかった。

ママと村長はご神託を聴くと、私を残して村に帰っていた。

残された私はというと、巫女としての立ち居振舞いを身に付けるために神殿で暮らすことになった。

半年前のあの日、自分が巫女になるということをこれっぽっちも信じることが出来なかったというのに、今ではこの神殿の暮らしにも慣れ、神殿の風景も見慣れたものになった。

それでも、今でもなお、この国でただ一人の巫女になるということが、自分のことではないような気がしてならない。

「ササ」

やわらかい、耳に心地よい声がドアの向こうから聞こえてきて、過去に飛んでいた頭を現実に戻す。

「今巫女様」

言葉を発するのと同時に体がシャンとするのがわかる。

めったにお会いすることも無いけれど、その声は初めて聴いたときから忘れることの出来ない声になっていた。

急いで寝癖のついた髪を撫で付け、小走りでドアに駆け寄る。

「今走りましたね？　マイナス十点」

笑いながら指を立てて、巫女様は言う。

それは毎日神官たちがするしぐさだ。

毎日百点満点から「巫女らしくない行動」をすると神官たちに減点されているのを巫女様もご覧になっていたようで、気恥ずかしくなる。

「はい。すみません」

思わずペコリと頭を下げるのを見、クスクスと巫女様は笑い、後

ろ手でドアを閉める。
「あ……」
後ろ手でドアを閉めるのを見て、思わず声をあげてから、慌てて口を覆う。
「ほら、これで私もマイナス十点」
気を使わなくていいのよ、というように巫女様は笑いかけてくださる。
そんな優しい巫女様を見ていると、自分が恥ずかしくなる。

ここにきて思ったのは、自分が本当に田舎のパン屋の娘だということ。
綺麗に歩くこと、綺麗にお辞儀をすること、それさえも出来ない、育ちの悪い村娘でしかなかった。
だから、いつまでも減点されて一日を満点で過ごせることも無く、むしろマイナスの日々。
マイナスになればなるほど、巫女として相応しくないといわれているようで、神殿から逃げ出したくなったこともあった。

巫女様はゆっくりと部屋の中に入り、窓の外に見える奥殿に目を向け、そして小さく頷くのがわかった。
その後、部屋の窓を閉め、奥殿が見えないベッドに腰掛ける。
そして手招きをし、ベッドの横に座るように促す。
「あの、巫女様？」
「ササ、ここに座って」
普段はサーシャと正式な名前でお呼びになるのに、「ササ」と声をかけられ、やわらかい言葉だったが、拒絶を許さないような言葉に少し戸惑う。
その言葉に促され、少し間を空けてベッドに腰掛ける。
横に座ったものの、こんなに至近距離で巫女様を見たことが無く、目を合わせるのも気恥ずかしくなる。

物腰がやわらかくて、気品のある巫女様と自分が違いすぎて、そばにいることが怖い。
「迷っているのね」
何をですか、と言いかけ口を開きかけたところに、巫女様が手を握ってきたので固まってしまう。
「水竜が心配しています」

――――――――!!
その言葉に絶句する。
水、竜が、心配。
全身の血が引いていくのが判る。
神官たちの減点の時も「水竜があなたを必要としています」と、村にきた神官の言葉を頼りになんとかやってきた。
でも、やっぱり水竜に「必要なのはお前じゃない」と言われたような気がして、目の前がフラフラと廻っているような錯覚を覚える。

震える手を離さず、淡々と巫女様は言葉を紡いでいく。
「私たち巫女は人生の中の数年間を水竜の言葉を聴くためにのみ使います」
わかりますね？と言う巫女さまの声に小さく頷いた。でも、その後その顔を上げることが出来ないでいる。
「では、なぜ巫女が数年でその仕事を次の巫女に引き継ぐかわかりますか」
一生を水竜に捧げることによって、水竜の声を聴く能力をもつものを絶やしてしまわないように、水竜の声を聴く能力を次代に繋ぐために、子を残すために数年で次の巫女にその仕事を譲り渡すと、初めて神殿に来たときに神官長さまから聞いたのを思い出し、それをそのまま巫女様に伝える。
その言葉に巫女様は首を横に振る。

違う理由があるという意味で。
数年で巫女が変わる理由なんて、村にいたときには考えたこともなかった。
それが普通だと思っていたから。
自分とは関係のない世界のことだったから。
「ササ、顔を上げて私の言葉を聞いて」
その言葉に促され、重たい心と同じように重たくなっている頭を上げる。
迷いの無い、確信に満ちた巫女様の表情に、理想の「巫女」を見た気がする。
握っていた手に更に力がこもる。
「全ては水竜の優しさなのです」
言葉は耳を通り過ぎるだけで、言葉の意味することがわからない。
「一人の人として女性として、最も輝いている時を、巫女として神殿の最深部で、外部の誰にも会わず、ただただ水竜のために捧げることに、水竜は心を痛めていらっしゃるのです」

――優しさ。
――心を痛める。

伝えようとすることの真意が全く掴めない。
どうして優しいと、数年で巫女を変えるのだろう。
どうして心を痛めると、次の巫女を選ぶのだろう。
どうしてそれでも水竜は巫女を探すのだろう。
水竜はなぜ巫女が必要なのだろう。

「水竜は巫女たちに対しても、この国の国民の全てを思うのと同じように、人としての幸せを掴んで欲しいと願っていらっしゃいます。それでも、人に伝える言葉をもたない己の言葉を伝えるためには、どうしても巫女が必要なのです。その矛盾が水竜の心を痛め、長い

間手元に一人の巫女を置かないようにとご配慮なさるのです」
「……はい」
「水竜の声を聴くことが出来るという稀有なる能力を持つが故に、巫女は巫女になると思いますか」
その言葉に何も返せない。
水竜の声をただ一人聴くことが出来るのが巫女だと聞いている。だから、巫女は水竜の声を聴く能力があるから巫女になるのだと思う。
でも、私は水竜の声なんて聴いたこともない。
ではどうして巫女候補に選ばれたのだろう。
それはどんなに考えてもわからない。

あの日。
「お迎えに参りました」と言われた日から、何度となく考えてきたことで、その答えはいまだ見つけられずにいる。
聞き方は違うものの、巫女様の問い掛けと、半年間悩んできたことは本質的には同じことだと思う。
今、その答えを出せと言われても、出せるはずも無い。
出せるのならば、もっと早くその答えを見つけだしているはずだから。
「そうだと聞いていますが、でも、わかりません」
それが半年間悩み抜いた挙句に言えることなのが恥ずかしい。
でも、それでも他の言葉を言えば全てが嘘になると思う。

「巫女には、特別な能力なんてないのです」
「でも巫女様は水竜の声を聴くことが出来ます」
特別な能力なんて無い、というのは嘘だと思い、咄嗟にそう言ってしまう。
それは私が持ち得ない特別な能力に他ならない。
「いいえ。私はほんの少し水竜のお力をお借りしているだけ。本当

は私に特別な能力があるわけではなく、特別なのは水竜ただお一人なのです」
余計にわからなくなってくる。
では巫女とはなんなのか。
「お力をお借りするといっても、誰もが水竜のお力をお借りできるわけではありません」
それならば、やはり特別な力があるってことになる。
そう思ったことが顔に出たのか、巫女様は少し渋い顔をされる。
「友達でも気が合う人合わない人がいるでしょう」
「は、はい」
話が違うところに飛んだので、咄嗟にそう答える。
村にいたとき、年の近い子は何人かいても、その全員といつも遊んでいたかというとそうでもない。
思い返してみれば、幼馴染と呼ばれる中でも一番仲がいいのがカラだった。
カラとは面白いと思ったりすることが同じで、一緒にいるのが楽しかった。
確かに気が合う、合わないというのはある。
「簡単に言うなら、水竜も気の合う人にしか、そのお力をお貸しになることが出来ないのです」
理解できるようで理解できない。
「それはあなたが巫女になったときに理解できるでしょう」
そういうと巫女様は笑って、手を離して立ち上がる。
「あなただけではなく、私も歴代の巫女たちも特別な能力なんて持っていません。それでも水竜は巫女を選びます。ほかならぬ、水竜自身がお選びになるのです。そのことは忘れないで」
目の前に立ち、巫女様は窓の外の奥殿を見つめ、大きく深呼吸をしてからゆったりと、でも強い意志のある声で言う。
「水竜からのお言葉を伝えます」

雷が走ったかのような錯覚を覚える。
目の前にまるで水竜がいるかのような感覚。
それは初めて神殿で、今巫女様からご神託を聴いた時と同じ感覚。
「迷うこともあるでしょう。でも私はあなたがここに戻ってくると信じています。もしも迷うことがあれば、あなたの思うとおり、気持ちに正直に生きなさい。私は誰よりもあなた自身の幸せを願っています」
巫女様の口から出る言葉の全てが、水竜自身が語りかけているように聞こえてくる。
そう、自らが水竜の声が聞こえるかのように。
「もし巫女以外の道を選びたいと思ったならば、あなたの思うとおりになさい。誰に言われたからというのではなく、あなた自身が悩み、選び、自分自身の道を切り開きなさい。あなたが仮に巫女にならなかったとしても誰もあなたを責めることはしません」
その言葉の真意はわからない。暗に巫女を辞めても構わないと言われているのは判る。
そして、それが突き放す意味ではないことも。
「私の手元を離れている間、あなたに様々なことが訪れるでしょう。しかし、自分自身で考え、そして選びなさい。一度しかないあなた自身の人生なのだから」
そこまで言うと、巫女様はにっこりと笑う。
それは、水竜の神託が終わった証拠のように。
「ササ、二日後にまた会えるのを楽しみにしているわ」

そういい残し、巫女様は部屋から出て行ってしまう。

一人部屋に残され、水竜の言葉に思いを馳せる。

今日、これから生まれ育った村に帰る。「巫女になるための儀式」は村を出るところからはじまり、そのためには一度村に帰らなくてはならないから。

まるで、今ここに行儀見習のために来ているということはなかったかのように、神殿からの使者を迎えるための儀式や、今巫女さまからのご神託を使者から承る儀式など、実は村で行わなくてはいけない儀式が山のようにある。

年に一度の、水竜の大祭の日にあわせ、全ての儀式が執り行われるため、水竜の大祭の前夜祭に村で儀式を行い、本祭の日に巫女になるための儀式を行うということになっている。

前夜祭といっても、朝から儀式があるため、今日中に村に戻らないと儀式が間に合わない。

幸いにして、村が神殿から半日の距離なので、今日村に戻ることになった。

何代か前の巫女さまは、国境近くの出身だったそうで、半月前に村に戻り、大祭にあわせて神殿に戻ってきたそうだ。

それに比べれば、距離がない分だけ楽だなと思う。

いや、そんなことは実はどうでもいい。

水竜は、巫女になるかならないかは自分で考えて決めればいい、そうおっしゃったのだ。

必然的に二日後には巫女になるんだろうと思っていたので、なぜそんなことを言われたのかが判らない。

「迷うこともあるでしょう。でも私はあなたがここに戻ってくると信じています」という言葉がなぜか心に引っかかる。

全てを見通す力がある水竜にとっても見えない未来があるとでも

いうのだろうか。
ただ、この三日間が一生を左右する三日になるのだろうと、漠然と感じることしか出来ずにいた。
しばらく考え事をしていると、神官の「お時間です」という声がドアの向こうから聞こえてくる。
その後はバタバタと追い立てられるように支度をし、神殿の使者役の神官と共に村へと向かった。

2DAY・1

2DAY

昨夜村に着くと村中上げての大騒ぎで、布団に入ったのが遅い時間だったというのに、夜明けと共に目が覚めてしまった。
殆ど寝ていないのにも関わらず、頭も体もすっきりとしていて、寝直すような気になれない。
体を起こし、窓から外を見ると、遠くに日が昇りつつあるのが見える。
目線を近くに戻すと、誰一人歩いていない路地が見える。
みんなが起きだしたら、もうゆっくりと村の中を歩くことなんて出来ないだろう。
そう思うと、急いで出かけなくてはいけない気がして、急いで服を引っ張り出す。

そっと足音を立てないように階段を降りて家の外に出ると、路地にはうっすらと靄がかかっている。
その靄の中、どこに行くという目的もなく歩いてみる。
あそこは魚屋さん、あそこは酒屋さん。
そんな風に一軒一軒指差しながら歩いていると、目の前から人が歩いてくるのが見える。
靄の向こうにうっすらと人影が見えるだけなので、誰なのかはわからない。
立ち止まって、徐々に近づいてくる人影を見ていると、その人影もあるところまで来ると立ち止まる。
もしも神官なら怒られそうな気もするし、村の誰かだと大騒ぎになりそうな気がするので、気が付かない振りをして家に戻ろうか、

それともこのまま進もうかどうか悩んでいると、その影はゆっくりと近づいてくる。

「この村の人？」

聞いたことの無い声で、見覚えのない人だ。

「はい。あなたは？」

はっきりと顔が見える距離までくると、またその人物は足を止める。近づいて見てみると、同じ年くらいの青年で、ちょっと気まずそうな顔をしているのがわかる。

「ああ、俺？　祭りの手伝いで呼ばれた。こんな朝早くでも歩いてる人いるんだな」

独り言のように呟いて、周りを見回している。

「普段はこのくらいの時間でも歩いている人もいるんですよ。お店の準備や朝ご飯の準備で。さすがに昨日は大騒ぎだったので、起きられないんでしょうけれど」

そう言うと、青年はクスクスと笑う。

「確かにそうだな。昨日はすごかった」

何かを思い出したかのように、プっとふきだす。

「ああ、ごめん。連れが飲みすぎて大変なことになって、思い出したらおかしくって」

その後もクスクスと笑い続ける。

「そうなんですか。それでは私はこれで」

さして興味も無いので、そういって頭を下げて横を通り抜けようとすると「待って」と声をかけられる。

「初めて会った人にお願いするのも悪いかなって思うんだけれど、この村を案内して欲しいんだ。巫女が生まれ育った村というのを、見てみたいから」

「はぁ……」

生返事をし、どうしたものかと考える。

まず最初に馴れ馴れしい人だな、というのが頭に浮かぶ。
祭りの手伝いに呼ばれたって言うくらいだから、きっとこの近くの村から来たんだろう。
小さな村だから案内するといっても大したところもないし、誰かに途中であって昨日みたいな騒ぎになっても面倒くさい。
「やっぱり迷惑？」
迷惑というわけではないけれど。
「普通、早朝に見ず知らずの男に村を案内しろなんていわれたら、警戒するよな」
「いえ、そういうのではなくて」
そういう部分がないわけではないけれど、素直にそう伝えることも出来ず、何て言えばいいのかわからず考え込んでしまう。
「ああ、じゃあ少しの間だけ立ち話なら平気？」
にっこりと人懐っこい笑顔を見せ「それならいいでしょ」と続けるので、しばらく考えてから頷く。
「ほんの少しの間なら」
「それは良かった。ありがとう」
そういうとやんわりと微笑む。

その笑い方をどこかで見たことがあるような気がして気になったけれど、どうしても思い出せそうにない。
話し方がぶっきらぼう、というかストレートに話してくる割に、粗野なところがなく、むしろその笑みは優雅ささえあるような気がする。

「ところで、この村の水竜の祠はどこにあるの」
「この先の路地を右に曲がって、丁度村の東端にありますよ」
「ふーん。この村の人はそこにはよく行く？」
「いいえ。村の端にあるせいもあるのかもしれないですけれど、水竜の大祭がある時以外はあまり。どうしてですか？」

考え込むような仕草をしてから、青年は独り言のように小さな声で呟く。
「巫女を育んだ地だから、水竜との縁も深いのかと思ったけれど。そうか、違うのか」
最後は完全に独り言になっている。何が違うのかよくわからないけれど、なんとなくムカっとして言い返す。
「今までこの村から巫女が出たことはありませんから。ですから、別に水竜との縁が深いとか特別に信仰心が強いというのはないと思いますよ。それに……」
「それに？」
「水竜が何を基準で巫女を選ぶかなんて、ただの人でしかない私たちにわかるはずがありません」
そう、わかるなら教えて欲しいくらい。明確な答えがあるなら教えて欲しい。
誰にでもわかる答えがあれば、もっと素直に水竜の巫女になるということを受け入れられるのかもしれない。
こんなに不安にならないかもしれない。

不安？
そう、ずっと抱えていたのは不安だ。
自分が選ばれた特別な理由がわからないゆえの不安。

「全ては水竜の御心のままに、だな。凡人の俺らにはわかるはずもない。それでも知りたいと思う。どうして水竜がこの村から巫女を選んだのかを」
水竜の御心のままに。
なんて都合のいい言葉だろう。その一言で全てが片付いてしまうのだから。
視線をぐるりと巡らせ、そしてもう一度青年は真剣な目で訴えかけてくる。

「色々自分なりに考えてみたんだ。興味があってさ。水竜がどうやって巫女を選ぶのか。この村のどこかにその答えのヒントがあるのかと思っていたんだけれど。でも特別な何かがこの村にあるわけではないんだね」
もう一度確認するように言うので、確信をこめて頷く。
「ないと思います。逆に特別な何かがなければ水竜には選ばれないんでしょうか」
きょとんとした顔で、青年は首を傾げる。何でそんなことを聞くのだろうという風に。
「だって、この国でただ一人水竜の声を聴く者だよ。特別な何かがなければ選ばれないでしょ。そうは思わない？」
そう聞かれても、何て答えたらいいのかわからない。
「わかりません」
それが素直な感想。それ以外にはなんとも答えようがない。

「なら水竜に直接聴いてみる？」
にっこりと笑い、青年はそう切り出す。
その言葉の真意は掴みようがない。
水竜の言葉を聴けるのはこの世でただ一人、水竜の巫女だけなのだから。
「何言っているんだって顔してる。確かに今の話と矛盾してるよね」
そういって、青年は水竜の祠のある方角を指差す。
「水竜の祠。あそこに沸き出でる水は、水竜の神殿に通じていると言われているんだって。だから祠でお祈りしたら、答えてくれるかもしれないよ。水竜が」
「そうなんですか？」
勢いよく問い返すと、青年はくすりと笑う。
「確かに只人の俺たちには明確な言葉はわからないけれどね。何か伝わってくるものはあると思うよ。まして、水竜の大祭を控え、次の巫女の生誕地となれば、その可能性は高いだろうな」

もう一度青年がにっこりと笑って、行ってみる？　と聞いてくる。
水竜なら答えをくれるかもしれない。いや、水竜しか知らない。
どうして私を水竜の巫女に選んだのか。
「そうですね。私も水竜に聴いてみたい事がありますから」

そう答えると、青年はさっき教えた道順通り、水竜の祠へと歩き出す。
水竜の祠につくまでの間、これといって話すこともないので、沈黙が続いてしまって、どうも居心地が悪い。
よくよく考えてみると、なんで初対面の人といきなり水竜の祠に行かなければならないんだろう。
あとから一人でこっそり行ってみてもいいような。
でも、それは無理。
きっと村人が起きだしたら、祭りの準備で水竜の祠に一人で行くことは無理だろうし、水竜にお祈りをするなんて余裕はないに違いない。
それに、午前中から村長のところで、王都からきているという祭事を司る宮さまにお会いして、最初の儀式のである水竜のご神託をお受けしなくてはいけない。
なんでも、今の国王陛下の甥にあたるそうで、国王の代理として水竜の神殿までご一緒することになるらしい。
きっと、村長の家にいったら、その後はゆっくり外に出ることもできないだろう。
悔しいけれど、水竜の祠に行きたければ今しかない。

「名前、聞いてもいい？」
突然沈黙を破るようにそう言われて、また返答に困る。
今はなんとなく自分が次代の水竜の巫女だということを、目の前の青年に伝えたくはないから。
水竜の巫女になる理由がわからないのに、自信がないのに、自分

が水竜の巫女になるということがわかるような事は言いたくない。
昨晩のお祭り騒ぎで「巫女様、巫女様」と囃し立てられたのが苦痛で、出来ることなら自分を知らない人の前では、自分から「次代の巫女です」と言うような真似はしたくない。
直接的に言わなくても、名前でバレてしまう気がする。
そう思うと、なんて返答したらいいのかわからなくなってしまって、言葉に詰まる。

「名前を名乗るときは、まず自分からだよね」
何を思ったのか青年はそう話し出す。
別に先に名前を名乗れとか思ったというわけではないのに。
「本当はちょっと長い名前だけれど、人にはウィズと呼ばれているから、ウィズって呼んで。俺はあなたを何って呼べばいい？」
拒否は出来ないような言い方に、思わず恨めしそうに青年、ウィズを睨みつける。
ウィズはそんなことを気にせず、相変わらず前を向いたまま歩いている。
これで答えなければ、逆に名前を言いたくない何かがあると思われてしまうかもしれない。
「ササ、です。友達や親にはササって呼ばれています。だからササって呼んで下さい」
それだけしか答えなければ、私が水竜の巫女だということに辿り着くとは思えなかったから。
「名前がわからないと、なんとなく話しにくいよね。ササも、今日はやっぱり祭りのお手伝いをするの」
とりあえずは自分が次代の巫女だとはわからなかったようで、安心した。
でもまた話が祭りのことに及びそうなので、少し話を逸らすことにする。
「あの、ウィズさんって呼べばいいですか？」

なかなか初対面の人をさん付けなしで呼ぶのは抵抗がある。
ウィズはまるで昔からの知り合いのように話しかけてくるけれど。
「ウィズでいいよ。俺もササって呼ぶから」
「でも初めて会った人と、いきなりそういう風に話すのって苦手なんです」
「ササ真面目なんだね。でも本当に気にしないで普通に話して。歳もそんなに変わらないでしょ」
何を言っても聞き入れてくれそうな気配もないので、とりあえず頷いて、また口を閉じる。
それからしばらくまた沈黙が続くと、既にお祭り用に飾り立てられた水竜の祠が見えてくる。

「ウィズさん、あれが水竜の祠です」
そういうと、ウィズは目を細めて水竜の祠を見つめ、足を止める。
「ホントに畏まらないでくれるかな。俺、そういうの苦手だし」
「はあ……」
生返事を返すと、そんなことはどうでもいいとばかりに水竜の神殿を指差す。
「飾りつけしてあるけれど、入っても大丈夫かな」
「大丈夫」
「じゃあ、ササ。行ってみようよ」
そういうと、ウィズは真っ直ぐに祠に向かって歩き出す。
さっきまで歩いた速度よりも早足で歩き出すので、少し後ろを遅れて歩く形になる。

先に水竜の祠に入ると、ひょこっと顔を出し、手招きをする。
「ササ、ほら早く」
急かすように手招きをして、それからウィズはまた祠の中に姿を消す。
その手招きに誘われるように、水竜の祠の中に入ると、ひんやり

と冷たい空気に満ちている。
まるで水竜の神殿の前殿にいるかのような錯覚に襲われる。
その独特な空気の中にいると、たった半年とはいえ水竜の神殿で学んだ祈りの言葉が心の中に溢れてくる。
水竜に祈りたい気持ちに駆られ、膝を付き心の中で祈りの言葉を唱える。
両手を湧き出す水に浸すと、清涼な水が心の中まで入ってくるような気がする。

今は声を聴くことは出来ないですけれど、私は水竜の声を聴くことが出来ますか。私はあなたのお役に立てますか。

心の中で水竜に問い掛けてみたけれど、答える声が聴こえることはない。それでも心のどこかが満たされた気がしてくる。
今まで心にあった不安という氷が静かに溶け出していく気がする。
水が暗い気持ち全てを流してくれるような気がして、長い長い祈りの言葉を心で唱えつづける。
「ササの疑問に、水竜は答えてくれた？」
しばらくすると、静かにウィズが問い掛けてくる。
明確な答えは何も聴こえてはこないけれど、この心が満たされる感覚に、今は満足している自分がいる。
「声は聴こえないけれど、心のどこかが軽くなった気がする」
今は素直にそう言える。
あの時神官が言ってくれた「水竜があなたを必要としています」という言葉を、今なら素直に信じられるような気がするから。
「そう、良かったね」
人懐っこい笑顔を浮かべ、ウィズはしゃがみこみ、祠の水に手を沈める。
決して大きくはない祠の中に、ウィズの手が水をかき回す音が響

く。
そして、静かにウィズが目を閉じ、口の中で何かを唱えている。
その横顔が、今巫女様に似ているような気がしてくる。
最初に見た整った綺麗な笑顔も、今巫女様が微笑んだ時の表情に似ている気がする。
でも、どことなく雰囲気が似ているという感じがするだけで、気のせいなのかもしれない。
こんなところに、あの今巫女様に似ている人なんかがいるわけがない。

しばらくするとウィズは顔を上げ、おもむろに立ち上がる。
「ウィズの疑問に、水竜は答えてくれた？」
そう問い掛けると「さあ」と微妙な答えをして笑う。
「信仰心が足りないか、明確な答えを欲しがりすぎているのかもしれないな」
その言葉に、望んだ結果が得られなかったということがわかる。
水竜がなぜこの村から次代の巫女を選んだのかを知りたかったのか、それとも別のことを知りたかったのかはわからないけれど、でも答えが見つけ出せなかったのは確かのよう。
「戻る？」
不満そうな顔をしているウィズに、どんな風に言葉を掛けたらいいのかわからなくて、ここを出ることを提案する。
このままここにいても、ウィズの顔が曇る一方のような気がするから。
「そうだね。あまり長居しても、ササの家の方も心配するだろうし」
言われてから気が付いたけれど、起きてベッドがもぬけの殻では、一騒動起きる可能性は否めない。
それにみんなが起き出して歩いているのを見つけられたら、大騒ぎになる。
出来れば誰かに会う前に家に帰りたい。

水竜の祠から顔を出すと、日がさっきよりも高く上がっている。
近くには人の気配はしないけれど、きっとそろそろ起きだしている人もいるかもしれない。
そう思うと、いてもたってもいられない気持ちになって、一秒でも早く家に帰りたくなってくる。
「ごめんなさい。私、急ぐのでさよなら」
頭を下げ、家に向かって走り出す。
背中からウィズの声がした気がしたけれど聞き取ることはできない。
それよりも何よりもいち早く家に帰りたいから。
ウィズが気付いてくれたおかげで、家に帰る途中も誰にも会わずにすんだし、家の中もまだ寝静まっているようでほっとする。
それが嵐の前の静けさにも似ている感じがするのは気のせいではないと思う。

2DAY・2

日が昇り、外は祭りの準備をしている音がするけれど、村長からの使者到着を知らせる迎えが来ない限り、特にすることもないのでボーっとしているしかない。

祭りの準備を何か手伝ったりできればいいけれど、外に出て知り合いに会った瞬間、大騒ぎになるのは目に見えている。

騒ぎになるのは昨日の夜で、もう懲りた。

何も今は聴く事が出来ないと言うのに「巫女様」と呼ばれ、生まれたときからの付き合いの知り合いにまで、あれこれ言われるのだから、たまらない。

村を出る前はそんなことはなかったのに、半年の間に、自分を取り巻く環境が大きく変わってしまったような気がする。

誰も「ササ」とも呼んでくれないし、なんとなく自分が自分じゃなくなったような錯覚さえしてしまう。

ササという入れ物を通して、巫女を、水竜を見ている気がしたし、その期待に満ちた目に応えられない自分に嫌気がした。

だから外に出ないで家でおとなしく村長の迎えがくるのを待っているほうがいいんだろうけれど、かといって何もやることがないので、退屈でしょうがなくなってくる。

いっそ寝てしまおうかと思うけれど、せっかく身だしなみを整えたというのに、これで寝癖がまたついたら笑い事じゃすまなくなる。

国王陛下の甥にあたるという王族で、祭事を司る宮様にお会いするというのに、そんな失礼なことは出来ない。

しょうがないので、どうせ誰もこないだろうけれどお店で店番しながら、神殿から拝借してきた書物でも読むことにする。

店番していれば、迎えが来たのがすぐにわかるだろうから、丁度

いい。

明日神殿で行う儀式について書かれた書物を手に取り、階段を降りると店の中にはやっぱり誰もいない。

店番をしているはずのママもいないので、今日はお休みをしてお祭りの準備をしにいったんだろうと思う。

そうならそうと、声をかけてくれてもいいのに。

わざわざ下に降りてきて損した気分。

でも上にいると誰か来たときにわからないと困るので、店番をしている時のようにレジの前に座って、本を読み始める。

読み始めてしばらくして、カランとドアについたベルの鳴る音がしたので顔を上げる。

てっきり村長の迎えがきたのだろうと思って笑顔で顔をあげたものの、入ってきた人物の顔を見て、言葉を失ってしまう。

あまりにも思いがけない人物で、何を言ったらいいのかわからなくなり、頭はパニック状態に陥る。

パニック状態の自分と、それを冷静に見ている自分が心の中にいるようで「別にそんなに焦るようなことでもないじゃない」と頭の片隅で声がする。

その声で、はっとして現実に戻る。

「ルア。久しぶり」

振り絞って出たのは、そんなありきたりの挨拶。

「ああ。久しぶり、ササ」

よく見ると、村を出たときよりも背が伸び、体つきもがっしりとして、大人っぽくなったような気がする。

「村に戻ってきていたの？　知らなかった」
村を離れている半年の間に、ルアは村に戻ってきたのだろうと思い、そう尋ねる。
「ああ。祭宮（まつりのみや）様の護衛でね。昨日村に来た」
ということは、相変わらず王都にいるということか。
村に戻ってきたわけじゃないとわかると、どうしても声が冷たくなる。
「そう。宮様の護衛はいいの？」
手にしていた書物を閉じ、その本を小さな袋にしまいながら聞く。
なるべくルアの顔を見ないように。
「無理を言って時間を貰ったんだ。ササに会いたくて」
「ふーん、そう。お仕事忙しいんだったら、別にいいのに」
出来る限りそっけなく言う。
心のどこかがささくれ立っているようで痛い。
「怒っているよな。俺、ササに二年経ったら迎えに行くなんて言っておいて、それから一度も王都から戻れなかったし。ササが怒るのも当然だよな」
チクリ、と心にトゲが刺さる。
「俺さ、今回宮様がこの村に行くって言ったから、宮様に無理を言って護衛の役目を貰ったんだ」
熱っぽく語り始めるルアを見ていても、どこか冷めた気持ちになってしまって、言葉が耳から入ってきても、心には全く届かない。
でも、声がやけに大きく聞こえる。
別に大きな声で話しているわけでもないのに。
「どうしてもササに会って、ちゃんとあやまりたかった。あの時は本当にごめん」
「別に改まってあやまられるようなことじゃないわ」
少し間を置いてから、やっと言葉が出てくる。
本当はそんなことを言いたいわけじゃないのに、どうしても冷たい言葉しか出てこない。

でも何をどう伝えたらいいのかわからなくて、どうしても突き放してしまう。
「それでも、ちゃんとあやまりたかったんだ」
苦笑しながらルアが呟く。
なるべく目を合わせないように、顔を見ないようにしているので、本当にルアが苦笑しているのかはわからないけれど。

あやまりたいと言われても、今更、だ。
じゃあどうして、手紙の一通もくれなかったの。
もう、あのときのような想いは心から消えてしまったというのに。
ルアのことを思い出さなくなってからだいぶ経つし、ましてや次代の巫女に選ばれてからは、そんなことを考えている暇もなかった。
ただ、懐かしいと思う。
その声、その話し方、何もかもが懐かしい。
心の中のささくれが抉られるのは、その甘ったるいような懐かしい感じのせいかもしれない。
辛い思い出は浄化され、残った甘い記憶だけが、心に広がっていく。

「ササ。多分俺はもうこの村に戻らないと思う。だから、一緒に王都に行かないか」
一緒に王都に？
「言っている意味がよくわからないんだけれど」
どんな意図があって言っているのかわからない。
今日と明日の儀式が終われば水竜の巫女になるのに、どうして王都に一緒に行かないか、になるんだろう。
行けるわけもないのに。
「村を離れる時から思っていたんだ、結婚しよう、ササ」

結婚！？

「突然のことだから、戸惑うと思うけれど、俺はずっと考えてたんだ。一緒に王都で暮らせたらって」

「そう……」

生返事しか出てこない。

そう言われて咄嗟に思ったのは、この人は私が水竜の巫女候補だって知ってるのかなっていうことで、結婚するとか、そういうことはあんまり頭に入ってこない。

「すぐには返事出せないと思うから、考えて。俺、明日にはこの村を出ないといけないから、それまで考えて欲しい」

「あの、私が王都にいけるわけがないでしょう」

「ああ。おばちゃんのこと？　一人にするわけにはいかないってことだろ」

その言葉で確信した。

この人。本当に知らないんだ！

その後も何か話しているのはわかったけれども、耳にも入ってこない。

なんて答えたらいいのか、言葉が見つからない。

私は水竜の巫女になるから、あなたとの結婚は出来ませんって言えばいいのに、なぜか喉の奥に言葉がつかえているような感じがして、言葉が出てこない。

そうやって言って断るのが一番いいのに。

心のどこかで、もしかしたらルアが迎えに来る日をずっと待っていたのかもしれない。

突然会って、甘ったるい過去に気持ちが引きずられているのかも。

何をどう言ったらいいのかわからなくて、答えることが出来ない。

「それじゃあ、ササ。明日の朝まで考えておいて」

「あ。うん」

その言葉に、意識が現実に戻される。
でもどっちにしても行かないって言うだけなのに。
それなら今言えばいいのに。
なのに、どうしても言葉が出てこない。
何も考えたくない。
そう思いながら読んでいた書物に目を移すけれど、頭に入ってこない。
明日、大事な儀式があるのに。

カランとドアについたベルの鳴る音がしたので、ルアが帰ったのだろうと思い顔をあげるとルアは相変わらず目の前にいて、誰か別の人が入ってきたということがわかる。
だけれどドアが丁度ルアで影になっていて、誰が入ってきたのかわからない。

「ササ。村長がお呼びだ。村長の家に行くよ」
その言葉で、ママが村長からの使者役だったことを知る。
「ああ、ルア。帰ってきてたのかい。悪いんだけれど、用事なら後にしてくれないか」
そういうと、ママはルアの横から顔を出し手招きをする。
そんなピリピリしたママの様子に、ルアは気付く気配もない。
「おばちゃん、久しぶりに会ったのに素っ気無いなあ」
おどけるルアを見ても、ママは相変わらず強張った表情を変えないままで、冷たくルアをあしらう。
「後にしてくれって言ってるだろ。ササ、用意は出来てるのかい」
もうこれ以上ルアと話す気はないというように、畳み掛けてくる。
ルアが肩をすくめるような動作をするのが視界に映るが、確かにルアと今話し込んでいる時間はない。

頷いて、手元にある小さな袋に書物を入れて持ち、ママのほうへ歩み寄る。

「それじゃあ、ルア。また」

本当に、また会う時があるのかどうかはわからないけれど。

2DAY・3

村長の家につき、執務室と仰々しく掲げられている部屋の中で村長と話していると、コンコンとドアを叩く音がする。
「宮様がいらっしゃいましたが、どうなさいますか」
使用人の声がドアの向こうから聞こえてくる。
「すぐに参りますとお伝えてしてくれ」
そうドアの向こうに通る声で話し掛け、座っていたソファーから腰をあげる。
「ササ。しばらくしたら、神殿からお見えになった使者様と、王都からいらっしゃられた祭宮様をお迎えする儀式が始まる。それまでここでゆっくりしていなさい」
そう言い残して、村長は部屋を出る。

さっきまで村長と話していた時にも思ったけれど、村長は決して「巫女様」とは言わない。
半年前と同じように「ササ」と呼ぶ。
まだ巫女に選ばれただけで、儀式をこなさない限りは巫女にはなっていないので、その呼び方が正しい。
そして村長と村娘という立場も、崩さないように接しているように思える。
そんなことを漠然と考えてみたけれど、別にどうでもいいことなので考えるのにも飽きてしまう。
儀式が始まるまでゆっくりしていなさいと言われても、一人残されて何をしたらいいのかわからない。
あんまり部屋の中をじろじろ見ているのも、お行儀が悪いように思う。
あれこれ考えていても妙案が出てこなくて首を捻ってみると、間接がきしむ音がする。緊張で体が強張っているのかもしれない。

ゆっくりしていなさいって言われても何かしていないと落ち着かないのは、今更ながらに緊張しているせいだと気が付く。

だめだ。緊張しすぎて体が痛くなってきた。

慣れないソファーに座って背筋を伸ばしたままでいるのに疲れ、両腕を頭の上に伸ばし、体を左右にひっぱってみる。

固まっていた体に血が流れだすようで、気持ちがいい。

この半年の間、気が休まるという時がなかったような気がする。

ずっと体中が緊張していて、いつも一人になると、こうやって体を伸ばしていた。

人が見ていないところでこうやって息抜きをしないと、体だけじゃなく心も疲れる気がして。

しばらく腕を伸ばしたり背中を伸ばしたりしていると、ドアを叩く音が聞こえる。中途半端に捻っていた体を戻し、背筋を伸ばす。

「ササ。使者殿と宮様の準備が整った。広間に来なさい」

その言葉に、胸がどきりと跳ねる。

心臓の音が耳の奥に鳴り響く。

そういった動揺を隠すように、村長には見えないように、一度大きく深呼吸をする。

立ち上がり、ドアのほうに顔を向けると、やはり緊張した面持ちで、村長様が立っている。

「準備はいいかい」

村長のその言葉に、コクリと喉が鳴る。

「はい」

神殿で習ってきたように、ただ学んだことを繰り返すだけだ。

そう自分に言い聞かせ、村長に続いて部屋を出る。

歩き始めると、そんなに長くない廊下なのに、なぜか永遠に続いているように思えてくる。
廊下に響く足音と心臓の音と合わさって、耳にはその音がやけに大きく聞こえる。

コンコンというドアを叩く音に、はっと我に返る。
この奥に神官と宮様がいる。
パニックが起きそうな心を辛うじて押さえ込んで、村長様のあとに続く。
部屋を入った正面に恐らく、王都から来た宮様だろう。
豪奢な服に身を包んだ青年が座っている。
逆光になるので顔はよく見えない。
見たこともないような装飾がされている服が、印象的だ。
その服から右手に目を移すと、見慣れた神官の服が目に入り、なぜかほっとしてしまう。

部屋に入り、村長に勧められるがままに、宮様と神官の正面にある席に腰をおろす。
村長は右手側に予め用意されていた椅子に腰を掛ける。その傍に緊張しきったママがいる。
ママが呼ばれていたなんて知らなかった。

「次代の巫女サーシャ様。お迎えに上がりました」
ママに目を奪われていると、神官が立ち上がり目の前に額づく。
この村に最初に訪れた神官と同じように、躊躇いなく額づくのを見てうろたえる。
神官がちらりと目をあげ、次の言葉を促すように訴えかけてくる。
神殿で学んだように。
神殿で練習したように。

「水竜の神殿からいらしたと、伺っております」

白々しいな、ともう一人の自分が冷めた声で呟く。

一緒にこの村にきたのに、よく言うな、と続けざまに冷たい声が耳元で囁く。

その声のおかげで、ずっと痛いくらい耳の奥でなり続けていた心臓の音がゆっくりと遠のいていく。

「水竜の巫女様より、水竜のご神託を預かりました」

神官は淡々と、決められた言葉を続ける。

「次代の水竜の巫女として、水竜はサーシャ様をお選びになられました。どうか私と共に水竜の神殿にお越しください」

しばらく言葉が喉につかえて出てこなくて、神官はいぶかしむような顔をし、目をあげる。

神官が言った言葉に返す言葉もわかっている。

もう一度念をおすように、神官が口を開く。

「次代様。ぜひ私と共に神殿へお越し下さい」

「わかりました。ただ、色々と準備もありますし、使者様もこちらに来られるのにお疲れになられたと思いますので、今日はごゆっくりお休み下さい」

ほっとした顔をして、神官が顔を上げる。

その顔を見て、ちゃんと言うべき言葉が言えたんだと安心する。

「ご承諾いただけて、嬉しく思います。水竜様もお喜びになることでしょう」

神官が決められていたとおりの言葉を言い、村長様のほうに目を向ける。

その視線に慌てたように立ち上がる。

「使者様、こちらのサーシャが申しましたように、どうか今日はこの村でお寛ぎ下さい。何もない村ですが」

村長は額の汗を拭い、神官を元いた席へと促す。
「村長殿にもご迷惑をおかけ致しますが、よろしくお願い致します」
神官は一礼をし、宮様の近くの席に座る。

微動だにせず儀式を見守り続けていた宮様に、自然と部屋の中の視線が集中する。
そういった視線を気にすることなく、宮様は近くに控えていた兵士の一人に何か耳打ちする。
兵士たちは一斉に跪き、これから起こる何かを想像させる。
神官とのやり取りは、嫌っていうほど神殿で教わったけれども、宮様とどのような遣り取りをするのかは習っていない。
落ち着いていた心臓の音が、また耳元で聞こえる。
宮様は椅子から立ち上がる。

「水竜のご神託、確かに承った。王家は次代の巫女として、サーシャを認めよう」

よく通る声が部屋中に響く。
その声には聞き覚えがある。
一歩一歩、宮様が近づいてくる。
顔の輪郭がはっきり見えてくると、声の持ち主が思ったとおりの人物であったことを確信する。

お祭りの手伝いに来たと言った。

この村から巫女を選んだ理由を知りたいと言った。

巫女を育んだ何かが、この村にはあるのかと、聞いてきた。

畏まったことは嫌いだと言っていた。

ウィズ。

間違いなくウィズが目の前に、宮様として歩み寄ってくる。
豪奢な服を身に着けて、まるで初めて会った人のように。

「私は祭宮カイ・ウィズラール。全てを見届けるために、この村にきました」
手を伸ばせば届きそうな場所にいるのに、ものすごく距離があるように感じる。
「全てを見届けるために、ですか？　カイ・ウィズラール殿下」
失礼のないように、ゆっくりと噛まないように丁寧に話すように心がける。

ウィズは立っているのに、このまま自分は座ったまま話していていいのだろうか。
完全に立ち上がるタイミングを逸した。
ウィズはそんなことは気にしていないようだし、周囲の誰も口を挟もうとしない。
「サーシャ殿。あなたは次代の巫女に選ばれました。私も王家の人間として、あなたを次代の巫女と認めます。しかし、あなたにはあなたの人生を選ぶ権利がある」
その言葉の意図することがよくわからない。

人生を選ぶ権利？

「申し訳ありません。私にはおっしゃっていることの意味がわかりません」

しばらく考えてから、そう疑問を投げかけると、顔色一つ変えずにウィズは淡々と話し出す。

「王家も水竜も巫女になることを強制しません。あなたが、もし巫女になりたくないとお思いになるのでしたら、巫女になることを辞退されても結構です」

辞退されても結構ですと聞いた瞬間、体に震えが走る。

その部分を非常に強調して言っていたような気がしたから。

その小さな変化を、ウィズは見逃さなかった。

「決してあなたが巫女に不向きだと言っているわけではありませんよ。私は、あなたが巫女に相応しいと思っています」

肯定することも否定することも出来ず、ウィズの目を見つめると、ウィズは作り物のような笑顔で微笑みかけてくる。

その笑顔が、やっぱり今巫女様に似ているような気がする。

「水竜の巫女に選ばれた人が、どういう決断をするのかを見届けるのが、私の役目です。そして、サーシャ殿が望んだ人生を歩めるよう、お手伝いさせて頂きます。私の言っていることの意味がわかりますね」

巫女になるのは必然ではなく、決断なのだとウィズは伝えようとしている。

「はい。カイ・ウィズラール殿下」

理解したことが伝わると、ウィズは背を向け、部屋にいる全ての者に向かって話し掛ける。

「明日、サーシャ殿が最後の決断を下すその時まで、あらゆる者がサーシャ殿に接する事を禁じる。サーシャ殿と面会をしたい者は、

必ずこの私の承諾を得るように」
しん、と打たれたように部屋の中が静まりかえる。
ウィズが村長のほうに目を向け、その傍で小さくなっているママの姿を見つける。
「サーシャ殿のお母様ですね？」
ママは突然声をかけられ、言葉を失い、ただ首を縦に振る。
「久しぶりにお会いになられたというのに、サーシャ殿とゆっくり話す時間さえ設けられず、大変申し訳ありません」
そう、心底申し訳なさそうにウィズが言い、優雅に頭を下げるので、ママは慌てて顔の前で手を振る。
「い、いいんですよ。気にしないで下さい」
そして今度はぎこちない笑顔を浮かべる。
明らかに恐縮しきっているのが見てわかる。
「村長殿、この屋敷の一室をサーシャ殿に貸して頂けますか。サーシャ殿。不自由な思いをさせますが、この屋敷より出ないようお願い致します」
静かな言葉だけれど、否とは言わせない強い力がある。
「はい。祭宮様」
そう、告げるしか出来ない。何か疑問を投げかけようと思っても、うまくこの状況で話せる自信がない。
ウィズはそんな心中はどうでもいいようで、元いた椅子に腰掛け、兵士たちも立ち上がる。
それが儀式の終わりを示すかのように、村長が立ち上がり近付いてくる。
「ササ。行こうか」
村長に促され立ち上がると、逆光の向こう側のウィズの視線を感じる。
その視線の主に向かって一礼すると、ウィズの口元が少し動いた気がした。

2DAY・4

儀式が終わって部屋に案内され、誰かが来るかもしれないから緊張して椅子に座っていたものの、廊下を人が通る気配すらない。
食事です、と使用人と思われる女性が食事を持ってきてくれたきりだった。

一人っきりでいる時間が長くなると、どうしても意識は自分へと向かっていく。
ちゃんと、祭宮のウィズとは話せていただろうか。作法はあれで間違っていなかったのだろうか。
いくら考えても答えが出てくるはずもないのに、そればっかりが気になる。
いっそ誰かがダメなところを教えてくれたら、どんなに楽なことだろう。
ああ、神殿でもっと色んな事を聞いておけばよかった。
今更ながらに、そんな後悔で一杯になる。
神殿にいる時は、何でこんなに怒られなきゃいけないんだろうって、最初から出来るわけもないのにって、教えてくれている神官たちに腹を立てたりしたけれど、全部自分自身のためだったんだって身にしみてわかる。

いつも、そうだ。
わかるのは後になってから。
その時は感情に流されて、大事なことがわからない。

でも、あと2日しかない。

水竜も祭宮のウィズも、自分の道は自分で選べと言っていた。

水竜の巫女になるのが当然だと思っていたのに。
なることに対する不安はあるけれど、ならなきゃいけないと思っていたのに。
今巫女様から水竜の言葉を聴いた時には深く考えたりしなかったけれど、ウィズの言葉を聞いて、自分できちんと考えて結論を出さないといけないんだって思った。

後になってから、後悔しないように。
自分でちゃんと決めなきゃいけない。
感情に流されず、冷静に。

祭宮のウィズの「辞退して結構です」と言い切った言葉は重たくて、お前なんかいらないって言われているような気さえしてきて、やっぱり自分じゃだめなんだって自己嫌悪した。
最初神殿に呼ばれたときの高揚感は一瞬だけで、その後はずっと自分の至らなさに情けなくって、どうしたらいいのかわからなくって逃げ出したくなる時もあった。

あなたは特別なんですって言われて、すぐに信じられる人間がいるのだろうか。
少なくとも私は信じられない。

自分の中の何が、他の人より優れているというのか。
人よりちょっと自信があるのは、パンを作ることくらい。
だけれど、それも物心ついた時からお店を手伝っていただけのこと。

自分が特別だと、信じられるものが欲しい。

それが努力して得られるものじゃない場合には、どうしたらいい

んだろう。

「またいつものところに戻ってる」

いつも神殿で考えていたことと、全く同じことを考えている自分に気が付いて呟いてみる。

言葉にしてみると、妙に気持ちが冷めてくる。

大きく溜息をつき、左に大きくとられた窓から外を見ると、外の景色はまるで別世界のように静かに穏やかに木々が揺れている。

風に揺れる木の葉に目を奪われていると、少しずつ気持ちが落ち着いてくる。

2DAY・5

「ササ。ちょっといい？」

ドアを叩く音と共に、ウィズの声がドアの向こうから聞こえてくる。

誰にも会うことは出来ないはずなのに。

ウィズは例外なのかな、と思いながらドアを開く。

儀式の時に着ていた服と違って、簡素な装飾の服を着ている。でも生地がしっかりしていて、やっぱり王族なんだなと改めて思う。

「祭宮様。どうぞ」

今のウィズが朝会ったウィズと同一人物だとしても、その立場を知ってしまった以上、朝のように接することは出来ない。

「ササ、俺の事忘れてないよな？　朝、会ったこと忘れてないよな」

「ええ。忘れていません。水竜の祠にご一緒させて頂きました」

顔を曇らせて、ウィズは大きく溜息をつく。

「俺が王族だから、そうやって話すの？」

溜息交じりの言葉は、まるで責めるような強ささえ持っている。

「……ウィズしか知らなければ、違うかもしれません。でも私は祭宮のカイ・ウィズラール殿下にもお会いしました」

「それは、やっぱり俺が王族だからって事だよな」

ドアを後ろ手で閉め、ウィズは窓際にあるソファに腰掛ける。

それを目で追い、ウィズの前のソファに座る。

「俺はね、ササとちゃんと向き合いたいんだ。ササと同じ高さで、ササの決断の手伝いがしたい」

真剣な目に、胸の鼓動が早くなる。
深い意味はないのかもしれないけれど、その真摯な瞳に心が騒ぐ。
でも、その言葉に即答は出来なかった。
祭宮じゃない、ウィズとして、決断の手伝いをしてくれるというのは、どういう意味なんだろう。
「全てを見届けるのが祭宮様の役目、じゃないの……ですか」
役目じゃないの？と聞き返しそうになって、慌てて言葉を付け加える。
「そうだね。祭宮は見届けるのが役目だよ。決断の手伝いなんて、しないな、普通」
不意に浮かべた笑みが、嘲笑されたかのように見え、顔が熱くなる。
ウィズから見て、決断の手伝いをしてあげなくてはならないように見えるっていうように聞こえる。

「俺は祭宮になって、初めて巫女候補に会うから、何が正しいかなんてわからない。でも、俺はササの手伝いをしたいって思った」
嘲笑は、ウィズ自身に向けられたものだと、その言葉で気がつく。
ウィズもまた、模索している最中なのかもしれない。
「どうして、そう思ったんですか」
「ササ。何度も言って悪いけれど、本当にそういう畏まったの、やめてくれないか。次にそういう話し方したら怒るよ」
茶目っ気たっぷりの笑顔を見せて、ウィズが笑う。
きっとウィズには敵わない。いくら言ったって聞いてくれないに違いない。

「サーシャじゃない、ササに会った時、ササは水竜に聴いてみたいことがあるって言っただろ。水竜の巫女候補が、あの時のササだと儀式の時に会ってわかって、ササは何かを迷っているような気がしたんだ」

何事もなかったかのように、先ほどの疑問に答えるウィズの顔は、また真剣なものに変わっていた。

ウィズには迷っているように見えるのだろうか。

でも迷いなんかない。むしろ、選べと言われたことに戸惑いがあるだけ。

「迷ってなんか、ない」

決して迷っているわけじゃないから。

少し考えてから、ウィズがゆっくりと口を開く。

「ならどうして、辞退してもいいって言った時に、あんなに辛そうな顔をしたの。本当に決めている人間なら、ああいう顔はしないはずだろ」

返す言葉が見つからず、視線が宙をさまよう。

図星だから、何も言い返せない。

「本当はさ、この村の中を色々散策してみたかったんだけれど、部下が出してくれないんだよな。俺の部下って頭硬くってさ。外に出るなって言うんだよな」

突然話題を変えて、ウィズは窓の外に目を向ける。

そういえば「巫女が生まれた村」を見たいと言っていたのを思い出す。

思わず苦笑してしまう。

祭宮が村をあちこち歩き回ったら警備も大変だろうし、色々周りも気を使うからしょうがないだろう。

そういう意味ではウィズの祭宮という立場と、巫女候補としての自分の立場が似ているような気がする。

「せっかくこの村に詳しい部下まで連れてきたのに、全然意味がない」

「この村に詳しい？」

咄嗟にルアのことが頭に浮かぶ。

「この村の出身の者が、近衛の中にいたんだ。本人も行きたいというから、わざわざ連れて来たのに、昨日はそいつが酔いつぶれるし、俺の目論見台無しだよ」

「そう」

頭の中はルアのことに捕らわれていて、条件反射のように答えるが、ウィズはそれには気が付いてはいないらしい。

「年齢も同じくらいだから、ササも知っているかもしれないね。あとでここに来るように伝えるよ。ずっと一人でいても、息が詰まるでしょ」

「もし、時間があれば」

努めて冷静に答えるが、心臓の鼓動はどんどん早くなる。でもウィズには気が付かれないように細心の注意を払う。

「そうだね。ササも色々立てこんでるしね」

その言葉に、ほっとする。

ルアに会いたくない。会ったら自分の中にある何かが崩れてしまいそうな気がするから。

ルアの事が好きかって聞かれても、わからないとしか言えない。

でも確かに三年前、ルアがこの村を出た時には、ルアの事が好きだった。

「ササ、何を考えてるの」
目の前にウィズがいたのを忘れ、ルアのことを考えていたことを見透かされて、咄嗟に言葉が出てこない。
でも、これはウィズに言うようなことじゃない。
なんて言ってごまかそうかと思ってウィズを見ると、少し首を傾げて優しそうな笑みを浮かべる。
その笑い方や雰囲気はやっぱり今巫女様に似ている気がするから、このことを聞いてみよう。
そうすればルアのことを話さなくて済む。

「ウィズが誰かに似ているような気がして、考えてたの」
本当に機会があれば聞いてみようと思っていた。
でも、それをストレートに伝えていいかわからないので、遠まわしに聞いてみる。
「ウィズの笑った顔、誰かに似ているというか、どこかで見たことがあるような気がして」

「ああ、それなら簡単だよ。今巫女様だろ、きっと」

あまりにもあっさりと、考えていなかったわけではないけれど、思いがけない答えを出すので、なんて答えたらいいか戸惑う。
「詳しくは教えられないけれど、俺と今巫女様は比較的近い血縁関係にあるからね。だからだと思うよ」
言われてみれば確かに、どの部分がというわけではないけれど、全体的な顔の作りが似ている気がしてくる。
今巫女様の上品な笑顔と、ウィズが浮かべる祭宮としての作り物みたいな笑顔。
その両方を思い浮かべてみると、血が繋がってるんだなってわかる気がする。

「あまり驚かないのな、つまらない」
「そんなことないよ。結構驚いてるって」
「そんな風には見えないけど」
「そうかな。でも、どこかで見たことがある気がするって、初めて会ったときから思っていたから」
くすくすとウィズは笑い、そしてちょっと残念そうな顔をする。
「これで驚かせられるかなと思っていたのにな」
「十分驚いているけど、納得したの。色々」
「色々？」
間髪いれずにウィズが聞き返してきたので、どうしようかと一瞬ためらうけれど、きっと隠そうとしたって、この人には暴かれてしまうだろうと思って、素直に話すことにする。
「今巫女様がご立派なのは、やっぱりそういう環境で育ったからなんだなって」
少し身を乗り出すように、膝の上に両肘を置き、頬杖をつきながらウィズが「どういうこと？」と聞き返してくる。

「どうしたら今巫女様みたいに、巫女らしくなれるのかなってずっと思っていたの。半年前、神殿に呼ばれてから巫女らしい立ち居振舞いを神官たちから教わったけど、今巫女様みたいになれないのはどうしてだろうって、悩んでいたの」
「それが儀式のときに、あんな顔をした理由の一つ？」
小さく頷いて、更に言葉を続ける。

「どうしてこんなに違うんだろうって考えてた。今巫女様は話し方も立ち方も歩き方も全て、自分が思い描いていた巫女様の姿、そのものだから」
今巫女様のお姿を思い出し、自分の現状と比較して、心が重たくなる。

「ただのパン屋の娘の私と、王族だった今巫女様。その育ちの違いが、巫女としての振る舞いに繋がっているんだなって、自分なりに納得したの」
ウィズを見返すけれど、ウィズは何も答えない。
「人が思い描く巫女像を具現することができない私は、巫女に相応しくないような気がする」
心の中に抱え込んでいて、誰にも言えなかった言葉を口に出してしまう。
「俺は相応しくないとは思わないよ。でも、そうは思えない？」
余計なことを言ってしまったと後悔する。
そんなこと、誰にも話すつもりはなかったのに。
ウィズの顔が曇っていくのを見て、「祭宮」を失望させてしまったんだと気がつき、更にどうしようもない気持ちに駆られる。
ウィズが相応しいと言ってくれても、それを信じることが出来ない自分が悲しい。
だから、ウィズの疑問に素直に返事が出来ない。
信じられない。と突き放すことも出来ないから。
「どうして、ウィズは私が巫女に相応しいと思うの？」
「勘」
踏ん反り返って、偉そうにそう言うと、窓の外に目を移してしま

う。
どっと体の力が抜ける。
もっともらしい答えが返ってくるのかと思っていたのに。
それを、ただ一言で言い切るウィズが憎たらしく思えてくる。

こんなに人が悩んでいて、それもわかっているのに「勘」って何。
しかも何でこの人、いつもこんなに自信満々なんだろう。
こんな風に自信に満ち溢れた人なら、あなたは特別な人ですって言われたら信じるんだろうな。
ちょっとウィズがうらやましい。
それは出自がそうさせているのか、それとも育ち方がそうさせたのか、どちらにしても私の持っていない、確固たる自分を持っているんだろう。

憎たらしいし、うらやましい。

2DAY・6

「それにさ、やってみなきゃわかんないだろ。向いているか向いてないかなんて」

ウィズは立ち上がり、水差しからグラスに水を注ぐ。
水がグラスに流れ落ちる音が、妙に耳につく。

「俺だって自分が祭宮に向いてるか、わかんないよ。大体血筋だけでなった祭宮だしな」
二つ手にしていたグラスの一つを手渡してくれ、そのままウィズは立ったまま話し続ける。
「こういう性格だしさ、俺は気ままな三男だったっていうのもあるんだけれど、俺も、周りの誰もが、お飾り将軍にでもなるんじゃないかって思ってたわけだ。別に戦で死んでも、お家断絶なんてのはありえないしな」

窓際の壁に寄りかかりながら、グラスの水をくいっと飲み干す。
ウィズが水を飲むのを横目に見ながら、少し乾いた喉を潤す。
飲み干したグラスを窓枠に置くと腕組みをして、ウィズが苦虫をつぶしたような顔をする。

「それがさ、いきなり俺を祭宮に強制指名のご神託だよ。親父も乗り気になるし、名誉あることだとか言いやがって」
苦々しいわけではなくて、腹立たしいの間違いだったらしい。
声は段々大きくなっていくし、いつ怒りの大爆発がくるのかとハラハラする。
でもウィズの怒りはすごく身近なものに感じる。多分、村に帰ってきた時に感じた違和感というか、イライラと同じような気がする。

「この国の守護者である水竜のお言葉をお聴きになられる、唯一無二の存在である巫女様の言葉を、物知らぬ民に伝えることが出来る、ただ一人しか出来ないの名誉ある仕事だから、だと。そんなの伝書鳩にでもやらせておけってんだ」

吐き捨てるように言うなんて、よっぽど祭宮が気に入らないらしい。

祭宮といえば、水竜の神殿から出ることの出来ない巫女の代わりに国王陛下にご神託を伝えるのが役目だと、神官から習った記憶がある。

巫女とは違って、確か死ぬまでが任期だったはず。

ということは、ウィズの前の祭宮様がお亡くなりになって、ウィズがここ数年の間にご神託を受け祭宮になったということだろう。

でも、ご神託を伝えるのだけがお役目ではなくて、この国で行われる全ての祭事を取り仕切るのが祭宮の役目であるはず。

ウィズが言うように、伝書鳩でもやれる仕事ではないだろうに。

「ご神託だからしょうがなく了承したけれど、俺が祭宮に向いてると思うか」

「え？」

怒りで沸騰していた状態から、突然また落ち着いて話し出す温度差に、なかなかついていけない。

「私は、ウィズしか祭宮様を知らないから。向いているかって聞かれても困るよ」

前の祭宮様がどんな人だったかなんて、噂すら聞いたことがないのに比べようが無い。

神殿で色々学ぶまでは、祭宮という方がいるという程度の認識しかなかったし。

全然違う世界の事だから、興味も無かったし。

「だけれどウィズは、水竜が巫女を選ぶ理由を調べてみようとしたり、祭宮になろうとしてると思うよ」
もしも本当にどうでもいいと思っているなら、明け方に一人で村を歩いて、その辺を歩いている村娘を捕まえて、水竜の祠に行ってみたりしないだろう。
向いてるかどうかは関係なく、ちゃんと祭宮になろうとしていると思う。
やりたくないからとか、向いていないからとか、そういうことに逃げようとしない。

「ササもなろうとすればいいんじゃないのか。巫女に」

言われてハっとする。
自分から巫女になろうと、思ったことがあっただろうか。
そんな考え、したこともなかった。
ご神託だから、巫女にならなきゃいけないとしか考えなかった。
今巫女様みたいに出来ないからとか、巫女に相応しくないからとか、そういうことが頭を占めていて、自発的に巫女になろうなんて考えたこともなかった。
「そう、かもしれない」
自分自身に言い聞かすように、ゆっくりと言葉を噛みしめる。

「正直に言うと、俺は何でササがそんなに迷うのかがわからない。誰でも巫女になりたいんじゃないのか？」
「選んでいいって言わなかったっけ」
「いや、あれは決まり文句」
祭宮にも儀式で言うことは決まっていたとは。

でもきっと神殿で叩き込まれたみたいに、まず椅子に座る。次に神官が跪いて……なんて練習はしないんだろう。
「俺が聞いているのは、そういう意味じゃない。女の子って巫女に憧れて、いつか水竜の神殿からお迎えがくるって、考えたりするんじゃないのってこと」

そういうこと、ね。
てっきり巫女候補になった人は、必ず巫女になる道を選ぶけれど、選択を促すように言うのが慣例か決まり事なのかと思った。
全く巫女に憧れがないって言ったら違うけれど。

「俺の妹なんて、絶対自分が次の巫女だって、訳のわからない自信に満ち溢れてたぞ。まあ、近親に今巫女様がいるからかもしれないけれどな。絶対巫女になりたいって言って、結婚話を片っ端から断ったりしてるらしいし」
例えばこの村に、昔巫女に選ばれた人がいたとかなら、ちょっと違うのかな。
ウィズの妹は、きっと私なんかよりもずっとずっと身近なこととして、巫女というのを捉えていたのかもしれない。
「子供の頃は、お話に出てくる水竜や巫女様に憧れたりもして、いつか水竜が、なんて考えたりもしたけれど。巫女は私にとっては遠い世界の人だったから、他人事でしかなかったかな。だから、なりたいとかは、あんまり……」
考えたことなかったという言葉を、ウィズは最後まで聞いてはくれない。

「巫女になる事によって、ササの価値がどう変わるか、わかる？」
背中を向け、窓を大きく開き、そしてウィズが振り返る。
回答を促すように、じっと目を覗き込んでくる。まるで測るように。

「……水竜の声を聴くこと。国の運命に関わる人になるっていうこと」
「そうじゃない。巫女を辞めた後の、ササの価値」
巫女を辞めた後の価値って一体。

普通の人に戻るだけじゃないのかな。
巫女じゃない、普通の人。他の人と変わらない。
ただのパン屋の娘に戻るだけじゃないのかな。

「望むなら、ササは国王の妻にだってなれるんだよ。巫女の血が欲しいって奴は国中に溢れている。俺ら、王家の人間も含めてね」
巫女の血が欲しい人が多いっていうのは、確か。
巫女の血が流れているだけで、巫女が血筋から出る確立も高くなるらしいし、それに水竜の間近でお仕えしたことがある先祖がいるとかで、他の村の人が自慢げに話していたのを聞いたことがある。
だからって国王の妻にまでなれるとは思えない。
「私、巫女に選ばれていなかったら、ただのパン屋の娘なんだけれど。それなのに、国王の妻だなんて」
冗談としか思えない。
私にはそんな価値はないし、とてもとても王宮で生活するなんて出来ないもの。
それに、こんな私を欲しいなんて思う人なんて、王族にはいないんじゃないかしら。
だってあの今巫女様みたいな人たちが溢れているんでしょう。その中に私が入ったら、本当に冴えない田舎者って感じだろうし。
そんな私を敢えて選んだりするわけないよ。
「俺の中にも巫女の血が流れている。何代前の巫女だか知らないけれど。だけれど、その巫女が貴族の娘だなんて話は一回も聞いたこと無いな」

あまりにも話が急で、頭がついていかない。
そんなこと言われても。
本当に私が巫女になったら、そんな価値が生まれるというの？
絶対ありえないって思う気持ちと、ウィズの中にどこの誰だかわからない巫女だった人の血が流れているっていう事実とが、頭の中でぐちゃぐちゃに交じり合う。
私が巫女になったら。巫女を辞めたら……。
ウィズは色々な話をしてくれるけれど、頭が混乱する一方。
整理して話を組み立てないと、もう何がなんだかわからない。
「一度に色々話しすぎたな。でも俺はササに知っていて欲しかったんだ。巫女になるってことが、ササの人生を変えることだってことを。それもちゃんと踏まえた上で決断して欲しい」
苦笑いを浮かべながら窓際から離れ、ウィズがもう一度ソファに座る。

間近で見るウィズの顔は、やっぱり今巫女様に似ている。
まるで目の前に今巫女様がいるかのような、そんな錯覚さえしてしまいそう。
瓜二つ、というわけではないけれど、どこか同じ空気を持っている気がするからかもしれない。

「俺は、ササに巫女になれとは言わない。ササが自分で考えて決めることだから。だけれど、何も知らないで巫女になるのは不幸なことだと思う」
「……うん」
巫女になれって祭宮に言われたら、私にとっては命令に等しいから、言わないでくれるほうがいい。
ウィズはウィズなりの優しさで、色んなことを話してくれたっていうのもわかる。
「ササが巫女になってもならなくても、ササが思い通りの人生を歩

めるように、俺が守るから。だから周りの事は気にするな」

その言葉に涙が出そうになる。

今まで誰にもそんなこと言われたことなかったから。

思わず涙が零れ落ちそうになるのを堪えて、天井を見上げる。

二、三度瞬きをして、奥歯を噛みしめる。

「祭宮として？」

その質問には答えないで、ウィズはソファから立ち上がる。

どうするんだろう、と目で追うと、ポンポンと頭を叩かれる。

「よく考えな。自分が納得する答えを出すまで。」

それを言うと、振り返らずにドアへと歩きだす。

ウィズの背中を見つめていると、ドアノブを捻ったところで、もう一度振り返る。

「まあ、俺を納得させられる結論じゃなかったら、ダメだけれどな」

唖然としていると、ウィズは部屋から出て行ってしまう。

俺を納得させられる答えじゃなかったらなんて言えるなんて、ものすごい自信家だ。

自信があって、マイペースで、それでいてちょっと優しい。

最初、ぶっきらぼうな人だなって思ったけれど、ストレートに感情をぶつけてくるからそう思うだけなのかもしれない。

その話し方も、きっと育ちのせいなのだろう。

周囲に傅かれて育ったのだろうと、国王陛下の甥という立場から想像できる。

そのウィズが不本意な祭宮になるというのは、どれだけの決心だったんだろう。

確かにウィズが言うように、水竜のご神託は絶対で、ならざるを得なかったんだろうけれど、それでも選んだことによって何かを捨

てなきゃいけなかったり、諦めたりしたんじゃないのだろうか。
何かを選ぶことは、何かを諦めることなのかもしれないって、ウィズが教えてくれた気がする。
その先に得るものもあるのだろうけれど、それが選ぶことによって諦めたものと同じではないことも。
相応しいとか、向かないとかじゃなくて、なろうとすればいい。
なりたくても誰でもが巫女になれるわけじゃない。
ウィズは、そんな風に考えることを教えてくれた。
ものすごく、自分の中では「巫女らしさ」に引っかかっていて、巫女になりたいかなんて考えることは一度も無かったのに、全然違う考え方を教えてくれた。

水竜がなぜ今まで巫女が生まれなかったこの村から、それも私を選んだのかはわからない。
特別な理由がわからない。
巫女らしい立ち居振舞いも出来ないし、相応しくもないのかもしれない。

でも、もう一度、自分が巫女になりたいのかどうか考えてみよう。
巫女に向いているかなんて、やってみなければわからない。
今は、自分がこの先の人生をどうやって生きたいのか、それだけを考えよう。
なんとなく気持ちが軽くなって、自分の中で「答え」を見つけたような気がする。

2DAY・7

私は今まで、何かになりたいとか強く願った事はない。
子供の頃、漠然と描いていた未来は、その時の自分の延長線上にあるものだった。
ずっと、パンを焼いているんだろうな。
別にパンを作るの嫌いじゃないし、それでもいいやって思ってた。
この小さな村から外へ出るという発想自体、皆無だった。
近くの村におつかいにいったり、お祭りを見に行ったりする事はあったけれど。それ以外で外に出た事はない。
ずっとこの村の中で生活するもんだって思っていたし、極端な話、死ぬまでこの村で生活するもんだと思っていた。

この村にいる限り、生まれてからずっと、自分の役割は決まっていた。

パン屋のササちゃん。

私を表すのは、この短い言葉で十分だった。
私は一生パン屋の娘。
結婚したら、結婚相手の家の仕事をするかもしれないけれど、ママの手伝いでパンを焼く事は決定事項みたいなもんだったし。
例えばカラのとこみたいなブドウ畑をやりたいとか、ルアのとこみたいに金物屋さんをやりたいとか、そういう風に何かになりたいなんて思ったこともない。

ルア……か。
ずっと意識の隅に追いやっておいた名前に、気持ちが一気に沈み

こむ。
ウィズと話していると、色々話が飛ぶから混乱するけれど、でもすごく前向きな気持ちになれた。
本当は気軽に話せるような立場の人じゃないんだけれど、そういうことを考えなくてもいいようにしてくれるし、私のこともちゃんと考えて助言してくれる。
だから、すごく前向きな気持ちになっていたのに。
ルアのことを思い出しただけで、どんよりとした気持ちになる。
何で今更結婚なんて言い出したんだろう。
そんな事思っているなら、こんなに放っておく事ないじゃない。
喧嘩別れしたみたいになって、村を出て行ったクセに。
それとも暢気に、何年でも待ち続けていると思ったのかしら。
そりゃ、確かに待ってたけれど……。
巫女に選ばれなかったら、喜んでいたと思うけれど。
でも巫女に選ばれなかったら、ルアは村に帰ってこなかったわけでしょ。
そうしたら、ずーっとこの先も何の音沙汰もないままだった可能性もあるし。
何て楽天家なんだろう、ルアって。
ずっとずっと昔のままの気持ちで、待ち続けていると思っていたのかな。

傍にいなきゃ、気持ちを持続するのは難しいよ。
だって、生まれた時からずっと一緒だったんだよ。
いるのが当たり前だったのに、あっさりいなくなって。音信不通でほったらかし。
他に好きな人ができるとか、思わなかったのかな。
確かに、今他に好きな人とか気になる人とかいないけれど、でも私の中では、半ば終わった恋なんだもん。
手紙の一つもよこさないから、もうルアにとって私はどうでもい

い存在だと思っていたのに。
何で今頃になって。
それに、どうして今なの。
もう少し早ければ、違ったのに。
例えば、約束通り一年前だったら、多分こんなに悩まなかった。
ずっとあのまま一緒にいられたら良かったのに。
私だって、心の底からルアがいなくなっても構わないなんて思っていたわけじゃない。
何でそんな事もわかってくれなかったんだろう。
一番傍にいたはずなのに。

でも、そんな事今考えていたってしょうがない。

ルアと結婚かー。
ずっと一緒で、いつの間にかお互いを好きになっていて、付き合うようになって。
今でも恋人になった日の事は、鮮明に覚えている。
思い出すと、なんだかすごく昔のようだけれど、つい昨日の事のように思えてくる。
あの日、言い出したのは私だったけれど、ルアが嬉しそうな顔をして「やった」って小さく言ったあの瞬間、ルアに好きだって思われてるんだってわかって、本当にすごく嬉しかったの。
私はなんだかんだ言っても、確かにしょっちゅう喧嘩もしていたけれど、結婚するならルアだなって思っていた。

そう、自分が思い描いていた通りの未来がやってきた。
なのに、心の底から喜べない。

ルアのこと好きかって聞かれたら、答えは「嫌いじゃない」か「わからない」かな。

どうしたらいいんだろう。
でも、今、ルアと結婚なんて無理だよ。
全部ルアのために投げ打ってしまうなんて、できないもの。
こんなに仰々しく扱われ、王族まで来て巫女になる儀式をしているのに。
ウィズの言葉を借りるなら、辞退してもいいんだろうけれど。
でも私が巫女になる為に、沢山の人が準備してくれているのに。
村のみんなも期待しているのに。
だけれど、ルアのこと、巫女になるからもういいや、なんていう風にあっさり切り捨てる事もできない。

あー。もうっ。
どうしたいのよー。

ルアと話せた時間も短かったからなのかわからないけれど、今の自分の気持ちがよくわからない。
あの時、本当は私嬉しかったの。
ああ、やっと村に帰ってきてくれて、私を迎えに来てくれたんだって思ったから。
だけれどそうじゃなくって、仕事で立ち寄っただけだって言われてムカついた。
嘘つきって思った。
でもさ、こういう風に思うのって、ルアのことが好きだからじゃないのかなーって思う。
でも、巫女を簡単には捨てられない。

周りの人のこともあるけど、やっぱり巫女は私の中で特別なんだもの。
相応しいかどうかなんてわからないけれど、巫女に対する憧れは嘘じゃないし、選ばれた時嬉しかったのも事実。

じゃあ巫女になるかって聞かれたら、また答えにつまる。
やってみなければわからないから、向いているかどうかなんて誰にもわからないし。
だけど明らかに、今巫女様に比べたら向いていない気がする。
そこを自分なりに修正して巫女らしくなれば問題ないってウィズは言うけれど、そんなの自信ないよ。
もし水竜に失望されたら、どうしよう。
神官たちが私にダメだしをするみたいに……。
考えるだけで怖くなってくる。
ウィズのあの自信を分けて欲しいよ。

この先の未来。
子供の頃の私が全く想像もしていなかった「巫女」に選ばれた事。
どうしたい。
巫女も、ルアも。
今すぐなんて、答えは出せない。
でもウィズに巫女になる事を前向きに考えるって、ちゃんと説明できるような答えを出すって約束したんだから、自分の気持ちから逃げていたら、いつまでも答えは見つけられない。
ルアに会わなければ、こんなに迷う事はなかったのに。
思い出すのは、一緒にいたあの頃の楽しい思い出ばかり。
ササって呼ぶ、ルアの笑顔。仕草。
あの頃のままだったら良かったのに。

でも、もうあの頃と同じじゃいられない。

神殿から持ってきた書物を開き、この後の儀式の事を確認する。
少しでもルアの事を頭から排除しないと、過去に捕らわれてしま

って、未来を考えられなくなりそうな気がするから。

2DAY・8

神殿から持ってきた書物を読んでいると、いつのまにか日がうっすらと傾きだしていた。

今日の儀式の大半は、水竜の大祭の前夜祭にあわせて行われるので、夕方から行われるものが多い。

日中は村長と神官が行う儀式があるけれど、それには出席しなくても良かったみたい。

てっきり全部に出ないといけないのかと思っていたので、こんなにゆっくりする時間があるなんて思っていなかった。

ゆっくりどころか、昼寝が出来そうなくらい、長い時間があった。

その間、ウィズと話すことも出来たし、いろいろ考える時間もあったので、バタバタと追われているよりも良かったのかもしれない。

きっともうすぐお祭りが始まる頃だから、誰かが呼びにくるだろう。

日が暮れたら、それが水竜の大祭が始まる合図。

しばらく窓からの景色を眺めていると、お昼に食事を持ってきてくれた使用人が「祭宮様がお呼びです」とドアを叩いた。

ゆっくりと窓を閉め、使用人と共にウィズのいる部屋へと向かった。

ウィズのいる部屋の傍の廊下には、恐らく朝の儀式の時にもいた兵士だろう、数人の兵士が立っており、近づくとゆっくりと頭を下げる。

部屋の前につくと使用人は「こちらです」と言い残し、元来た廊

下を戻っていった。
ドアの脇に立っていた、一際立派な剣を腰に帯びた兵士が「どうぞ」とドアを開けてくれる。
ちょうどウィズが上着の袖のカフスボタンを留めているところだった。
どうしようかと思っていると、背後でドアが閉まる音がして、あの兵士も外に出たようだった。

ウィズは一日に何回着替えるんだろう。
今日は見ているだけで、四着目。
朝と、儀式のときと、昼間に話していた時と、それから今。

「この格好、何か変か？」
ついつい豪華な服装に見惚れていると、いぶかしむような声で聞かれるので、慌てて目線をウィズの顔に移す。
「そんなこと無いよ」
「そうか？　ササが凝視してるから、どこかおかしいのかと思った」
「ごめん、本当に大丈夫だから。」
真剣に心配しているウィズに、思わず噴き出しそうになるのを堪える。
「笑うなよ」
むくれたような顔をするので、ますますおかしくなる。
「本当にごめん。それよりウィズ、どうしたの？」
一生懸命こみ上げてくる笑いを堪えて、ウィズに呼び出した理由を尋ねる。
それでも気になるようで、服のあちこちを見回している。

一通り自分なりの点検が終わったようで、何事もなかったかのような表情で話し掛けてくる。
「そろそろ大祭が始まるから、一緒に行こうかと思ってさ。俺と一

緒にいれば、警備の面では問題ないからな。それに余計なことに気を使わなくて済むだろ」
ウィズなりに気をつかってくれているんだろうけれど、周りに兵士がいたら、違う意味気をつかいそう。
確かに人に囲まれたりはしなくって済みそうだから、そういう意味では気をつかわなくて済むかもしれないけれど。
「そうだね」
屈強な兵士に囲まれている姿を想像すると、ちょっとそれはそれで恐縮してしまうんだけれど表立っては言えず、了承したことを伝える。
「まだちょっと時間があるから、その辺座れよ」
その辺と言われたソファに座ると、ウィズは壁際の椅子に腰掛ける。

ウィズがやると、村では見られないような豪華な服を着ているせいかもしれないけれど、どんな動作も無駄が無く、綺麗に見えるから不思議。
そのウィズと一緒にいるには、自分の服装があまりにも普段着すぎて、人前に出るのは躊躇われる。
「ねえ、ウィズ。私普段着なんだけれど、いいのかな」
一緒にいるのは似つかわしくない、というのを暗に含めて伝える。

まじまじと見つめてから、ウィズは腕を組んで考え込む。
ウィズから見ると、そんなにおかしい服装をしているのかしら。
そんなに悩むなんて。
「気になるなら何か持ってこさせるけれど、俺としてはあんまり特別な格好をして欲しくないんだよな」
「特別な格好って？」
別にウィズが着ているみたいなすごい服が着てみたいわけじゃないのに。

「ササが巫女候補だって特定出来るような格好ってこと。この大祭には他の村の人も来ているし、俺の部下もいるからな」
一人で納得しているので、さっぱり何のことかわからない。

村の誰もが知っているのに、どうして今更隠すようなことをしないといけないんだろう。
お祭りの手伝いに来ている他の村の人だって、きっと知っていると思うのに。
さっきドアの外にいた兵士たちだって、ご神託を聴く儀式にいたのだから、みんな知っていると思うのに。
不思議そうな顔をしていたのがわかったらしく、ウィズが小さく息を吐く。
溜息というより、一呼吸入れたかのような。

「ササはさ、歴代の巫女の名前や出身って知ってる？」
突然話が飛ぶのには慣れてきた。
今巫女様のお名前、本当のお名前はなんとおっしゃるのだろう。
神殿ではみんな巫女様としかお呼びしないし、ウィズに聞かなければ王家の出身だとも知らなかった。
そういえば、今巫女様はいつから巫女になられたのだろう。
よく考えたら、それすら知らない。
その前の巫女様は、もっとわからない。
知っているのは、今巫女様の前にはやはり巫女様がいらっしゃって、ずっとずっと「水竜の巫女」が存在していることだけ。
「わからない。今巫女様のお名前も、いつから巫女でいらっしゃるのかも。今巫女様のことさえ知らないのに、その前の巫女様たちのことなんて、もっとわからない」
「どうしてだと思う？」
なぜ知らないのだろう。
水竜という、この国を守る神にお仕えする巫女のこと。

ただ身近に巫女になった人がいないから知らないだけなのだろうか。
神殿にいて、今巫女様とお話する機会もあったというのに。
いくら考えても答えが出そうにはないので、ウィズの質問に、首を横に振って、わからないという意思表示をする。

「巫女の神秘性を守るため。もしも、どこどこの生まれのなんていう名前で、なんて誰もが知っていたら、水竜の声を唯一人聴けるっていうのに、普通の人のような気がしてこない？」
「そう言われると、そんな気もする。巫女がどんな人なのか知らないから、ものすごく特別な人だと思ってた」
巫女にしかない能力があると、思っていた。今巫女様が説明してくださるまで。
「ウィズはさ、私が迷っているって言ってたでしょ。それはね、巫女には特別な何かがあるって思っていたからなの。今でも少し思ってる。だって巫女は、人じゃない水竜の声が聴けるんだよ。特別な何かがなければ、巫女に選ばれるはずがないじゃない」
「そうだな。そう思うのが普通だな。そう思わせる為に、王家が巫女の全てを隠しているんだから」

王家が、隠している。
巫女が特別な存在なんだと思わせるために。
だから私は、ううん、国中の人が巫女のことを知らない。

「巫女が祭宮にだけ水竜のご神託を告げるのも、全て王家の為さ。誰もが巫女と会うことが出来たら、別に王家なんて無くったって国が成り立つことになる。だから、隠しとおさなくてはならない」
足を組みなおし、ウィズが椅子にもたれ掛る。
「水竜の声を聴くことが出来る、特別な存在の巫女がご神託を託すのが王家だけなら、王家もまたこの国にとって特別な存在だという

ことになるだろう」
同意を求めるような言葉に、頷くことしか出来ない。
王家がどうだとかっていうことは抜きにしても、巫女が特別だと国中に思わせなくてはいけない。
その為に私が次代の巫女候補だということを、隠しとおさなくてはいけないのだろう。
「だから、側近は別にして、この村に連れてきた大半の兵士は、俺がここにきたのは、この村の水竜の大祭の視察の為だと思っている。王都に戻って余計なことを言ってまわられても困るからな」
「じゃあ、私がウィズと一緒にいたらおかしくないの？」
「いや、ササは大祭の前夜祭で水竜に祈る係ってことになってるから。どっちにしても儀式上、水竜の祠で祈りの言葉をあげてもらわなきゃならないから、丁度いいだろ」
根回しも、全部終わっているわけなんだ。

改めてウィズってすごいなと思う。
そんなこと考えもしなかったから。
水竜の大祭の前夜祭には、去年一年の水と大地の恵みに感謝し、村の代表が水竜の祠で水竜に感謝の言葉を述べるというのがある。
そして水竜の巫女になる儀式の中にも、水竜の祠で水竜の神殿に行くために身を清めるという儀式があって、その時に水竜にお祈りをしなくてはいけない。
必死で覚えた、巫女になる儀式のためだけの、祈りの言葉を。
きっと、どこの村でも街でも同じような儀式があるだろうから、そう言われれば周りは納得するかもしれない。
「ササには水竜への祈りをあげることと、この村で行われる水竜の大祭について、祭宮に説明するという役割があることになっているから、特に心配ないよ。でもそうか、儀式上はどんな格好でも構わないんだけれど、大祭の祈り役となると、そういう訳にはいかない

か」
そう言われると、やっぱり普段着じゃいけない気がしてくる。
普段は村長が水竜にお祈りをするので、あんまり気にも留めていなかったけれど。
着ている服を見てから、ウィズに目でどうしようと訴える。
「部下に用意させる。ちょっと待って」
椅子から立ち上がりドアを少し開けて、聞こえない声でドアの向こうの兵士と話している。
なんだか着々と巫女になるための儀式が進んでいく。
まだ一言も巫女になるとも言っていないのに。
ウィズはどんな答えを出してもいいって言ったけれど、これじゃあ巫女になるのが当然みたい。
不意に頭の中で、今巫女様の声がする。
――迷うこともあるでしょう。でも私はあなたがここに戻ってくると信じています。
迷っているから、巫女になるために進んでいく全てに、いらいらしてしまうのでしょうか。
――もしも迷うことがあれば、あなたの思うとおり、気持ちに正直に生きなさい。
でも今巫女様。私には私の気持ちがわからないのです。
ウィズの言うとおり、巫女になろうと思えばいいのかもしれないです。
なのに、私は自分が巫女になりたいのか、それとも巫女になりたくないのかがわからないのです。

――もし巫女以外の道を選びたいと思ったならば、あなたの思うとおりになさい。誰に言われたからというのではなく、あなた自身が悩み、選び、自分自身の道を切り開きなさい。
巫女以外の道、その選択肢が一体どういうものなのかもわかりません。
私にはわからないことばかりです。
もう、時間はあと少ししかないのに、私には決断できるのでしょうか。
巫女になるのが必然だと思っていた私に。
誰かが教えてくれたら、どんなに楽なことでしょう。

――　一度しかないあなた自身の人生なのだから。
きっと、水竜は全てご存知だったのですね。
私の悩みも不安も、そして決断することが出来ず、誰かに答えを求めてしまうことも。
それでも全てを決めるのは自分自身なのだと、あの時教えてくださっていたんですね。

心の中で、巫女様へ語りかける。
記憶の中の巫女様は笑って、また会えるのを楽しみにしているわ、とだけおっしゃられる。
水竜の言葉の真意などはお教え下さらない。
巫女様は特別な存在ではないとおっしゃられたけれど、やはり私には水竜の巫女は特別で、自分がその特別な存在になれると言われても、なかなか受け入れ難い。
巫女らしくないからではなく、巫女になるための努力すればいいと教えてくれたウィズ。でも王家にとっても大事な、水竜の巫女の存在を否定してしまう可能性すらあるかもしれず、軽々しくは考えられない。
まだ、考える時間が必要なのかもしれない。

大事なことを見据えるために。

2DAY・9

自分の考えに没頭してしまって、すっかりウィズの存在を忘れていたので、ドアのほうを振り返ると、まだ兵士と話していたのでほっとする。

考え込んでいる姿を見られなくて良かった。

ウィズが見たら、また何を考えていたのかと詮索されそうで、それもちょっと嫌だから。

本当は自分で決めないといけないのに、ウィズに頼ってしまいそうだし。

目の先にある窓のカーテンは閉められていて、外の様子はうかがうことが出来ない。

もうそろそろお祭りは始まる頃だろうか。

カーテンに遮られているものの、空が真っ赤に色付いている。この部屋に呼ばれた時には、まだ陽が傾きはじめたばかりだったのに。

もしかしたら随分長い間、物思いに耽ってしまっていたのかもしれない。

あの陽がもう一度昇るとき、ちゃんと選べているのかな。

「殿下、大変お待たせ致しました」

感傷に浸っていると、現実に戻す声が聞こえてくる。

その声は間違いなく、今一番会いたくない人の声。

全身に緊張が走り、体中の血が引いていく感覚がする。心臓の鼓動が早くなり、ドアを振り返ることすら怖い。

確かめられない。もしも振り返って、本当にそうだったら、嫌だ。

「遅いぞ」
太い声が響き、体がびくっと飛び跳ねる。
ドアを開けてくれたあの兵士の声だろう。
「ギー。急に頼んだのだから仕方がない、そう言うな」
「は。殿下」
意識が背中に集中して、一言一句漏らさず聞こうと、そしてここにいるのがわからないようにと、息を潜めてしまう。
「それを中に。ギー、引き続き頼むぞ」
「はっ。殿下」
中に、入れ？
ドアの金具の軋む音がして、更にドアが開けられたのだとわかる。
人が入る気配もする。
足音が近づいてくる。
近づいてくる足音は一つ。
ウィズだけが部屋の中に入ってきたようだ。
俯いていた顔を少し上げると、ウィズが目の前のソファに座る。
「そんなに緊張しなくたって大丈夫だって」
「う、うん」
口の中が妙に乾いて、それ以上言葉が出てこない。
一度、唾を飲み込みウィズの顔を見ると不思議そうに首をかしげる。
「俺と二人でいるときは、そんなに緊張しないのに、変なヤツ」
そういって苦笑するので笑い返そうとするけれど、顔が引きつっ

てうまく笑えない。目をあわせることも出来ない。
「どうした？　体調が悪いのか？」
真剣に心配をしてくれているらしく、ウィズの手が額に触れる。
ウィズの手が額に触れた瞬間、体が強張る。
巫女候補だから、儀式をこなせなくなることに心配しているんだろうけれど、でも祭宮のウィズに触れられているのかと思うと、どうしても緊張してしまう。
ひんやりと冷たいウィズの手。
でもそれよりももっと、体中が震えて冷たくなっている気がする。
「大丈夫。色々考えてただけだから。心配しないで、ウィズ。大丈夫だから」
間近に見るウィズの瞳が、本当に不安そうな色だったので、余計な心配をかけたくなかった。
まして、理由が理由だから。
それに、いつまでも至近距離でいられるのも、どうしたらいいかわからなくなって困る。
「本当に無理しなくていいからな」
手を離し、ウィズはゆっくりとソファに座りなおす。
「ササの体調が悪いんだったら、無理はさせたくないんだけれど、大祭には出てもらわないといけないんだ。なるべく早めに戻るようにしよう」
「ありがとう、ウィズ。でも、ちゃんとできるから大丈夫だよ」
「ああ、そうだな。きっとササなら出来る。でも終わり次第戻るようにしよう」
本当に心配してくれているんだなって、ちょっと申し訳ない気持ちになる。
体調が悪いわけじゃないのに。
勇気付けるように言ってくれた「ササなら出来る」って言葉が、

ものすごく嬉しい。
嬉しくて思わず微笑むと、やっと安心したようにウィズがホッとした顔をし、おもむろに立ち上がる。
立ち上がるウィズの表情を伺うと、目線がドアのほうに向けられるので、着替えがあるんだろうと思って振り返る。
鼓動が一段と早くなる。
両方の掌で横長の箱を持っているルアの顔もまた、強張っている。
てっきり、この部屋にはいないと思っていたのに、なぜ。

「紹介しよう。今日の大祭で、水竜に祈りを捧げてくれるサーシャだ。お前もこの村の出身だと聞いたから、知っているかもしれないが」
我に返った表情で、ルアがウィズに一礼をする。
「はい、殿下。よく存じております」
背筋を伸ばしたまま、ウィズに向かって話すルアはまるで別人のよう。
いっそ別人ならどんなにいいか。
「そうか。年も同じくらいだろうから、きっと知っているだろうとは思ったがな」
「……幼馴染です。まさか殿下とお知りあいだとは思いも致しませんでした」
「知り合い、ではないな」

そう言うウィズがこっちに目をやるので、なんて答えようか迷う。
祭宮と次代の巫女候補として今日会いましたなんて、さっきのウィズの話からも言う訳にはいかない。
私が巫女候補だって事、誰にも言っちゃいけないんだから。
どうしようと目線でウィズに訴えるものの、ウィズは何も言わな

い。

「ウィズラール殿下と、今朝たまたまお会いしたの。今日はじめてお会いしたわ」

声が震えそうになるのを抑えて、話しても問題ない部分だけ、掻い摘んで話す。

絶対に納得していないだろうけれど。

ウィズしかいないと思っていたから、ウィズが望むように普通に話していたのに。まさかルアがいるなんて。

異様な光景だったと思う。王都で自分の仕えている王子が、生まれ故郷の村の幼馴染と談笑しているなんて、何かあると思うのが普通だと思う。

おかしい。そう思うのが普通だ。

次代の巫女候補を心配する祭宮と、次代の巫女の会話だと説明したら納得したかしら。

でもさすがに祭宮殿下の前なので、問い詰めるようなことはしてこない。

「まあ、そういうことだ」

その一言で、ウィズが全てを片付ける。

それ以上詮索するのを許さないかのように。

「そういえば、昨日酔っ払って話していた、幼馴染へのプロポーズは済んだのか？　ササも幼馴染なら、ササにもきちんと話したらどうだ」

絶句した。

ウィズにまでそんなことを言っていたの。

眩暈がして、倒れそうになる。

本当に倒れるんじゃないかと思うくらい、目の前が回ってくらくらしてくる。
ウィズもなぜ、突然そんなことを言い出すの。
これが悪い夢ならいいのに。

「大丈夫です。ササにはきちんと言いました」
少し考えるような間を置いて、さらにルアは口を開く。

「結婚して、一緒に王都に行って欲しいと」

目の前が真っ白になった。
意識が遠のくというのはこういう事を言うんだなというのを、身をもって体験した。
すぅっと体が軽くなって、思わずソファにもたれかかる。
視界が暗くなって、思わず頭を手で押さえる。
「……そうか」
驚きを隠せない声で、ウィズが呟く。
もう考えることを放棄したい。
出来るなら会わずにうやむやにしてしまいたいとさえ思っていたのに、これじゃあ何の意味も無い。
頭が痛い。

「それで色よい返事は貰えたのか？」
ウィズにまで何を言い出すのよ。
やめてよ。そんなこと、どうだっていいじゃない。
「いいえ。明日の朝まで考えて欲しいと言いました。返事はまだ」
「そうか、立ち入った事を聞いてすまなかったな」
「いえ」

この話は終わりにしようという感じでウィズが謝罪したので、ほっとした。
出来るなら、ウィズには知られたくなかったのに。
きっと私が悩んでいるのはルアのせいだって思われた。
そんな事で悩んでいるなんてバカバカしいと思われたに違いない。
情けないよ。
俯いていると、じわっと涙が浮かんでくる。
永遠とさえ思えるほど、長い沈黙が続く。

「少し席を外そうか。あまり時間は無いが」
その言葉に頭よりも先に体が反応し、咄嗟にウィズの腕を掴む。
仰ぎ見たウィズは、まるで珍しいものを見たかのように驚いた表情をしている。
でもそんなことは構わない。

「お願い！　行かないで！」
絞り出した声は自分でも驚くほど大きな声で、部屋に響き渡る。
その声にはっとし、我に返る。
「ごめんなさい」
なんて事をしてしまったのだろう。焦ってウィズの腕を放す。
ウィズの目を見ると、戸惑いの色が浮かんでいる。
その瞳が責めるようで、いたたまれなくて、また視線を下に戻す。
ウィズの顔は見られるのに、ルアの顔を見ることは出来ないでいる。
ルアを見るのが怖い。
ルアが怖い。
何もかもを揺るがしてしまいそうな、ルアが怖い。
心の中にある、巫女になりたいというほんの小さなカケラが、砕

けてどこかに消えてなくなっちゃう。
「祭宮様、日が暮れると大祭が始まってしまいます」
ルアと二人で話をするのなんて、絶対にイヤ。
それに、これ以上ウィズの前でこの話をしたくない。

水竜の大祭の視察という名目で来ている以上、ウィズが遅れることは出来ないはず。
それに水竜の巫女の儀式を行うためにも、大祭には遅れられないはず。
そういった口実があれば、これ以上この状況の中にいることを回避できるかもしれない。
「ああ。そうだな」
思惑を知ってか知らずか、ウィズはあっさり了承する。

「サーシャ、服を置いておくから、すぐに着替えなさい。私たちは外にいるから」
「はい。祭宮様」

2DAY・10

ウィズの姿が視界から消えて、足音が二つ、ドアの向こうに遠ざかる。
気持ちと同じくらい重たくなっている頭を上げ、ドアの傍に置いてある箱を見る。
これを持っていたルアはどんな気持ちだったんだろう。

傷つけたくは無いのに、きっと傷つけてしまった。
二人で話す機会も拒否してしまった。
まるでルアの全てを拒否するかのように、顔を見ようともしなかった。
ルアが持っていた箱を手にとると、不思議と涙が出てくる。

ごめんね。本当にごめんね。

いくら拭っても、涙が止め処なく落ちてくる。
これを着るという事は、水竜の巫女にまた一歩近づくこと。
巫女になれば、ルアには会えない。
巫女にならなくても、この村にいる限りは、もうルアに会えない。

子供の頃からずっと一緒だった。
あの日、ルアが村を出るまでずっと。
短気で、単細胞で、人の気持ちなんて全然わかってくれないけれど、でもいつも一番傍にいてくれたのはルアだった。
涙は止まらないし、箱を開ける勇気がなかなか出てこない。
胸の中は後悔でいっぱいで、もう前になんか進めない。
箱の上には涙の跡が点々とついていく。

どうしたらいいの。
この箱を開けて、巫女になるための儀式をすればいいの。
それともこの箱を開けずに、今巫女になることを辞めるの。

どっちも選べない。
私にはどちらも選べないよ。
教えて。誰か教えて欲しい。

涙を堪えようとすればするほど、涙が大粒になり、嗚咽を押さえることすらできない。
声が聞こえたら、きっと外の兵士に気付かれてしまう。
床に座り込み、両手で顔を覆い、声が漏れないようにする。
それでも、どうしても涙が止められない。
押し殺している声が、自然と指の間から漏れていく。
気付かれないようにしなきゃ。
こんな風に泣いているなんて、みっともないよ。
でも、でも……。

カチャっと、ドアノブを捻る音がする。
ノックもしないで、人が入ってくる。
もしも着替え中だったらどうするのよ。
そんな責めるような言葉が浮かんできて、ドアのほうを睨みつける。
睨みつけたのはドアじゃなくてウィズで、ウィズは静かにドアを閉める。
「ササ、こっち」
手を引かれ、ソファに座らされる。
何も言わず、ウィズは黙って横に座っている。
涙が引くのを待つかのように。

ウィズはどう思っているんだろう。
私のこと、情けないって思っているかな。くだらない事で悩んでって。
ウィズにはこんな姿、見られたくなかったのに。
必死に顔を袖でこすり、無理やり涙を止めようとしてみる。

「辛いよな」

ウィズの優しい言葉に、また涙が溢れてくる。
短い言葉なのに、全部わかっているよって言われたみたいで、声を上げて泣きそうになる。
でもそんな、みっともないこと出来ないから、天を仰ぎ両手で顔を覆う。
どんなに歯を食いしばって我慢しても、涙が止まらない。

「辞めるか」

静かにウィズが呟く。
辞められたら、どんなに楽だろう。
でも辞めることも選べない。
ぐしゃぐしゃの顔のまま、顔を横に振る。
「お願い。水竜の巫女になれって言ってよ」
涙声で訴えると、ウィズは苦しそうな顔をする。
「言えるわけないだろう。俺は、全てを見守るために来たって言っただろう」
瞬きをすると、涙がまた落ちる。
ポタン、とウィズの手の上に。
「ササ、お前にしか選べないんだよ。巫女になるか、ならないかは」
うんうんと、首を縦に振る。

「見ているだけっていうのも辛いもんだな。他人の一言でササの意思が変わらないように、その為に人を遠ざけたのに、俺が余計なことを言いそうだ」
「余計なことって……？」
問い掛けた声が鼻声になって、うまく喋れない。
「余計なことは、余計なことだよ」

苦笑し、ゆっくりとウィズはソファから立ち上がる。
そして窓際に立ち、カーテンを少し開け、外の様子を伺う。
もうすぐ、月の支配する時間がくる。
水竜の大祭が始まる時間が、迫っている。
「今選ばなくていい。水竜の神殿に着く、その時まで」
カーテンを閉め、ウィズが振り返る。
「辞めることも選べないなら、儀式に出な。後で巫女になりたかったって後悔しないように」

ドアの傍まで歩いて、ルアが置いていった服の箱を手に取る。
箱を持って目の前に立ち、すっと目の前に箱を差し出す。
無表情なウィズの顔からは、何を考えているのか、さっぱり読み取れない。
目線を箱に移し、大きく息を吐いてから、箱を受け取る。
「外で待っている」
ウィズはそれ以上何も言おうとはせず、くるりと背を向けてドアの向こうに消えていった。

手渡された箱の中に入っていたのは、おそらく神殿で用意してくれたものだろう。
幾度と無く見たことがある、巫女様がお召しになっているものと

よく似ている服だった。
これを着ることに躊躇いがないわけじゃない。
でも巫女にならないことを選べない今、これを着なければ、後悔するかもしれない。
まだ決められないなら、ぎりぎりまで悩んでもいいのなら、今は着よう。
そして儀式に出よう。

2DAY・11

目の前では、喧騒と秩序の中、水竜の大祭が進んでいく。
祭りが始まってすぐ、あまり人が多くない頃に儀式を済ませてしまったので、目の前で行われる水竜の大祭をぼんやり眺めている。
思いのほかあっさりと儀式が終わってしまったので、本当にあとは前夜祭が終わるまでここに座りつづけなくてはいけないらしい。
それはそれでちょっとした拷問のような気分。

ウィズと村長様との間で何らかの話し合いがあったんだろうけれど、本来なら一番最後に行う、水竜の祠の前に作られた小さな祭壇に村の代表が供物を捧げるという儀式を、村人の誰よりも先に行って、その時に水竜の巫女になるための儀式も済ませてしまった。
だから実際に二つの儀式を行うことに違和感を感じさせる間もないまま、ごく普通に水竜の大祭の前夜祭が進んでいく。
それぞれ手には供物を持って、この広場に集まってくる。
今朝、水竜の祠に行った時には全く人影がなかったというのに、今は沢山の人で溢れている。

いつもと違うのは、これが水竜の巫女の誕生の儀式も含まれていること。
そして祭事を司る祭宮が列席していること。
ウィズ、祭宮が視察にくるということが事前に知らされていたせいだろうか、いつもの年よりも知らない顔が多い。
それは祭宮をお迎えするために相応しい祭りにする為に、巫女誕生の儀式を行うのに滞りがないように、近隣の村から人が手伝いに来ているせいもあるし、一目祭宮を見ようと来た人たちがいるせいかもしれない。

年に一度のこのお祭りは、村が一番活気付く時でもある。
既にお酒の入った顔の人たちの姿も多く、そこら中で歓声が上がったり、笑い声が聞こえてくる。
水竜に今年一年の豊年を願うということよりも、純粋に楽しんでいる雰囲気が伝わってくる。
本当なら、あの中で一緒に騒いでいたのかもしれない。
あの騒ぎを遠巻きにするしかなく、据えられた席でおとなしく見守っているしかない。
カラとルアと三人、いつも馬鹿みたいに大騒ぎをしていたというのに。
人の人生なんてどこで変わるかなんてわからない。

ふう。
目の前で広がる楽しげな光景を見ながら、溜息をつく。
祭壇がよく見えるように、高台の上に据えられた席から見ていると、本当に別世界の出来事のようにすら見えてくる。

周りを取り囲むように立っている兵士たち。
額の汗を拭いながら、笑顔を作り続ける村長。
ひな壇の中央で涼しい顔で、時折笑顔を見せる祭宮。
表情一つ変えず、黙って座っている神官。
そして、私。

みんなチラチラとこっちを見るけれども、遠巻きにしているだけで、誰も近付いてこない。
はあ。
気が重いなあ。
巫女になる為の儀式をしているのに、私の心の中には巫女になろうっていう明確な意思は見えてこない。

ルアはどうしているんだろう。
目に付くところにはいないけど、こうやって座っている姿をどこからか見ているんだろうな。
私、逃げてばっかりだ。
巫女からも。ルアからも。
もしもウィズが水竜の神殿に着くまでは決めなくていいって言ってくれなかったら、儀式にすら出ようとしなかったかもしれない。
背を押してくれなかったら、私はあの場所から立ち上がることすら出来なかったと思う。
隣に座るウィズに目を向けると、にこっと笑いかけてくる。
ドキっと心臓が音を立てる。
あんまりにも優しい笑みで、そんな風に微笑まれるなんて予想すらしていなかったから。
ドキドキドキと鳴り響く音には気付かないフリをして笑い返し、また祭壇のほうを見る。

「ササ」
ウィズがそっと声をかけてくる。人に気付かれないような小さな声で。
横目で見るけれど、ウィズの顔は祭壇に向けられたままで、祭宮の顔を崩してはいない。
「俺がササに何かを言うのもこれで最後にする」
かがり火の明かりに照らされたウィズと同じように、目線を祭壇とその奥にある水竜の祠に戻し、聞き逃さないように耳を澄ます。
「どんな決断をしようとも、人の世では何も出来ない水竜に代わり、俺がお前を守るよ」
小さく呟くような声が、祭りの騒ぎにかき消されそうになる。

それでもはっきりと耳に届く。
ウィズの確固たる意思が。

祭宮として言っているのか、それともウィズ個人として言っているのか、わからない。
きっと聞いても教えてくれないだろう。
涙腺が弱くなっているのか、視界が涙でぼやけてくる。
どんな道を選ぼうとも、きっと居たたまれない気持ちになることがウィズにはわかっているのかもしれない。
「手伝うって言ったのに、何もしてやれなくてごめん」
また泣きそうになっていることを気がつかれないように、髪を掻き揚げる素振りをして涙を拭う。
「そんなこと無いよ。ウィズが祭宮様でよかったと思っているよ」
心の底からそう思う。

不安を見抜き、迷いに気付かせ、巫女になるのは必然ではないことを教えてくれた。
そして、忘れたふりをしていた感情を呼び起こした。

「泣かせて、ごめんな」
思わず苦笑してしまう。
「ウィズのせいじゃないから、謝らないで」
本当に、ウィズのせいじゃない。
見ないように、考えないようにしていた事に直面して、どうしようもなかった。
ルアのことから逃げて、その結果があんな泣き方をすることになってしまった。
それをウィズに見られたことも恥ずかしい。
ウィズには、なんだか今日一日、みっともないところばかり見せている気がする。

「色々聞いてくれて、話してくれてありがとう」
返答がないので、ウィズはもう話すつもりはないのだろう。
もう、次に話すときには祭宮のカイ・ウィズラール殿下になっているんだろう。
本当に、誰にも頼らずに、自分だけで全てを決めなきゃ

「祭宮様。もしよろしければお召し上がりになりますか？」
聞き覚えのある声に振り返ると、カラがウィズにむかって話し掛けているところだった。
そっとカラに目配せをするけれど、全然気が付く気配が無い。

「これは？」
「この村で取れた物で作ったお酒です。祭りの時には必ず振舞われるんです」
「そうですか。ありがとう」
にっこりと、いかにも人のよさそうな顔でウィズが笑って、カラの持っているお盆からグラスを受け取る。横目でその動作を見ていると、ウィズと目が合う。
「サーシャ殿も飲みますか？」
サーシャ殿って……。本当にすっかり祭宮モードに入っているみたい。この人の切り替えの早さは、本当にすごいなと思う。
「ササの分もあるよ」
カラが緊張で引きつった顔をしながら、グラスを差し出してくれる。
「ありがとう。カラ」
カラの手からグラスを受け取ると、その手が少し震えているのがわかる。

祭宮のウィズに対する緊張からなんだろう。でも、今までどおりササって呼んでくれるのが嬉しい。

「カラ、あのね……」

カラと少し話をしたくて話し掛けたものの、カラは村長のほうに行ってしまって、声は届かないみたいだった。

なんとなく行き場が無くなった気持ちをもてあましながら、グラスのお酒に口をつける。

村で取れた葡萄から作られたお酒は、甘くって美味しい。

その甘さがふんわりと体の中に広がる感じがしてくる。

カラが村長にグラスを渡して、祭りの喧騒の中に消えていくのを、ついつい目で追ってしまう。

別に何か話したいことがあったわけじゃないけれど、なんとなくカラと話したかった。

「先ほどの方に何かお話があったのですか？」

ホント、あんた一体何者なの？　って素で聞き返したくなるくらいの切り替え具合で、不愉快さすら感じる。昼間のほうが異常だったんだけれど、距離を取ろうとしているかのように感じる。

「いいえ、祭宮様。特にはありません」

極力感情を殺して、淡々と話すように心がける。

そうだ、相手は祭宮様なのだから。

何でも話せる相手なんかじゃない。この人は最初から遠いところにいる人なのに、錯覚していただけで、こうやって距離感を保って話すのが普通なんだ。

それなのに、どうしてこんなに不愉快な気分になるんだろう。

突き放されたような、壁を意図的に作られたような感じがして、それがたまらなくもどかしい。

「そうですか。もしも何かあるのでしたら、彼女のところに行っても構いませんよ」
「え？」
ウィズのほうに顔を向けると、顔が笑っているようにも見える。
「前夜祭のほうも大体説明して頂きましたし、あなたの儀式も終わりましたから、祭りを楽しんできて下さい」
「え？」
思いがけない言葉に、相手が祭宮様ということも忘れ、素で聞き返してしまう。

だって、誰にも会っちゃいけないし、話したりしたらいけないはずなのに。
そんな疑問を知ってか知らずか、ウィズに持っていたグラスを取り上げられる。
何で。とか、どうしてって言葉が頭の中に浮かぶけれど、それをうまく伝える言葉がわからない。
何て伝えたら失礼にならないんだろう。
「気分転換も必要でしょう」
そう言うと、ウィズは祭宮の笑顔を浮かべる。
その笑顔に後押しされるように、椅子から立ち上がり、カラの後を追う。

背中にウィズの視線を感じる。
ウィズと村長が話す声が聞こえるけれど、内容まではわからない。
長い裾を持ち上げながら、カラが歩いていった方向へ走り出す。
こんな動きにくい服装じゃなかったら、もっと早く追いつけるのに。

2DAY・12

「カラ！　カラ！！」

後姿が見えたので大声で呼び止めると、ビックリした顔でカラが振り返る。

気が付くと周りにはポッカリと空間が空いたようになり、少し距離を置くようにして人垣ができている。

「あんた何やってんのよ」

人波を掻き分けて、カラが呆れた顔でやってくる。

「何って」

「ホント世話が焼けるんだから。こっち」

伸ばされた手を握ると、ぐいぐいと人垣を掻き分けて喧騒から離れていく。

黙々と歩き続けるカラの後ろ姿を見ていたら、なんだか子供の頃を思い出して頬が緩んでくる。

昔っから、カラってこうやってお姉ちゃんみたいだった。

変わらない日常が、ここにはある。

カラの手から伝わってくる温度に、心の中の凝り固まった気持ちがゆっくりと解けていく。

祭りの喧騒がだいぶ遠くに聞こえるようになり、村と街道との境くらいまでくると、カラが立ち止まって手を離す。

「あんた、本当に何やってるの。バカじゃないの」

キョロキョロと周りを見回し、声を潜めて小さな声で囁く。

「次代の巫女だってわかってる？」

巫女ってところで、声が一段と小さくなる。やっぱり巫女のことについては緘口令が引かれているみたい。

ウィズの徹底ぶりを改めて感じる。
「わかってるけど、カラと話したかったから」
はあっと大きく溜息をつき、カラが頭を抱える。
「だって、カラとゆっくり話すことなんて、もう無いかもしれないから」
巫女になったら、カラとこうしてもう一度話せるようになるのは、きっと何年も先になってしまう。
仮にルアについていったら、村にはもう戻ってこないかもしれない。
それに、こんなに盛大にお祭りをして儀式をしているのに、巫女にならないなんて言ったら、村の恥にもなるし、この村にはもういられなくなる。
私、どっちにしても、この村にはもういられない。
もう日常なんて戻ってこない。
そう思ったら気持ちが沈みこんできて、とても口を開く気にはなれなかった。
何か考え込むように、カラは口を閉ざして立ち尽くしている。

その長い沈黙を破るように、突然笑い声が聞こえてくる。
祭りの中心、水竜の祠の方から何人かが歩いてくるみたい。多分、他の村の人だろう。
「ササ。こっち」
カラに促され、水竜の祠があるほうに繋がっているのとは別の、水竜の祠を見下ろす高台に繋がる道に歩き出す。

「ねえ、神殿でどんなことしてたの？」
興味津々といった感じだけれど、別に嫌な感じはしない。
昨日同じように村の人たちに「巫女様。巫女様」と言われながら聞かれた時には、すごく嫌な気持ちになったのに。
村を出る前と同じように、ごく普通に話しかけてくれるからかも

しれない。

「うーん。行儀作法ばっかりだよ。話し方とか歩き方とか、そういうのばっかりだったな」

「そうなんだ。なんかもっとすごいことしてるのかと思ってた」

「すごいことって？」

すごいことっていうのが、どんなことなのかがわからない。

修行に近いような気はするけれど。

朝は陽が昇る前の起きてお祈りして、食事が終わったら神官長様から行儀作法についてだとか、儀式のこととかをお昼頃まで教えていただいて、午後はずっと神殿の掃除で、夜はまたお祈り。

その繰り返しで随分朝には強くなったし、体力は付いた気がする。

「だって巫女になるんだよ。ほら、水竜の声の聴き方とかさ、そういうのを巫女様から習ったりしてないの？」

「カラが言うような事は教えてはくれなかったな。いかにして巫女らしくなるかしか習ってないよ。あと掃除三昧」

いっそ、どうやったら水竜の声が聴こえるか教えてくれたらよかったのに。

そういうことは誰も、巫女様も神官長様もお教えくださらなかった。

「掃除三昧って？　あんた巫女になりにいったんじゃなくて、掃除しにいったの？」

驚いた顔で、カラの足が止まる。

「ある意味そうかもしれない。腕、たくましくなってない？」

袖を捲り上げ、右腕に力瘤を作って見せると、カラが声を出して笑う。

「あはははは。ホントだ。筋肉ついてる、ついてる」

二の腕とその上についている筋肉を指でつついて、カラはおなかを抱えて笑う。それにつられて、一緒になって大声で笑った。
こんな風に心の底から笑ったの、本当に久しぶり。なんかやっと村に帰ってきたんだなって気がする。
笑いが収まると、息が苦しい。

二人して肩で息をしながら、丘の頂上に登った。
上から見ると、広場に焚かれている火も小さくて、喧騒も随分遠くに聞こえてくる。
「座ろうよ。笑いすぎて疲れちゃった」
草の上に座り込んで、隣に座るようにカラに促す。
「神殿で鍛えてきたくせに、よく言うよ」
笑いながら、カラも草の上に腰を降ろす。足を伸ばして、腕を背中の後ろについて体を伸ばす。
夜の、少し冷たくなった空気が気持ちいい。

「ところで、もう話せなくなるってどういう意味。全然わかんないんだけど」
祭りのほうに気を取られていると、突然そんなことを切り出される。
何て答えるのがいいのかわからない。言った時には、そんな深い意味があって言った訳じゃない。
巫女にならなかったとしたら、村中の人が巫女に選ばれたって知っているのに、辞退してのうのうとこの村で暮らしていくなんてきっと出来ないって言えばいいんだろうか。それとも巫女になったら、巫女の血を欲しいという誰かに嫁ぐことになって、この村には帰ってこられなくなるって言えばいいんだろうか。
そのどちらも違う気がする。
「あんたが巫女になるからなの？」

ついさっきまで笑っていたのに、カラの声からは、苛立ちが手にとるようにわかる。
「そうじゃない」
「じゃあなんだって言うの。あんたもルアみたいに、この村にはもう帰ってこないって言うんじゃないの？」
その言葉にはっとする。
「……聞いた、の？」
「聞いたよ。近衛として、一生王宮に仕えることにしたから、もう村には戻ってこないってね」
聞いたのはそれだけなんだと、ほっとする。
足元の草をぶちぶちと抜きながら、カラは祭りのほうに目をやる。
草を抜く手を止め、手を払い、それから月を見上げカラがまた溜息をつく。
「あんたに結婚して欲しいって言ったこともね」
あの、おしゃべりめ。
なんで、誰それ構わず話すんだろう。
自然と溜息が漏れる。いてもいなくても、どうして人の気持ちを引っ掻き回すんだろう。
「そんなことはとりあえずどうでもいいから。あんたと話せなくなるってどういうことか教えてよ」
「どうでもいいって」
「今はルアの事を話してるんじゃない。あたしとあんたのことを話してるんだから」
ルアの事をどうするかとか、どう思っているのかとか、わざと聞かないようにしてくれているのかもしれない。
それに、今はカラとちゃんと話さなきゃ。

「巫女になるとね、私は私じゃなくなるんだって」
「何それ」
ササはササでしょ、と苦笑する。
「うん。そうなんだけれど。周りはそうは見てくれなくなるんだって」
「それは、なんとなくわかる気がするけれど、別にあんたが変わるわけじゃないでしょ」
何も変わらないけれど、価値が変わるってウィズは言っていた。
「巫女の血が欲しいって言う人は、沢山いるんだって。だから、もしかしたらこの村に帰ってこないで、王妃にでもなるかもしれない」

きょとんとした顔をして、それからカラは声を出して笑う。
何がおかしかったのかわからないけれど、カラは笑い続ける。

「ちょっと、何でそんなに笑うのよ。真剣に話してるんだから」
「だ…、だって、ササが王妃だよ。王宮でパン焼くってんだったら、納得するけれど……王妃っ」
身を捩って、さらに大きな声でカラが笑い出す。
「カラ、笑いすぎだよ。もう」
真剣に話して損した。王妃になるっていうのは大げさだけれど、本当に、本当にもうこの村に帰ってこられなくなるかもしれないのに。
笑っているカラを横目で見ながら、何でこんなこと話しちゃったんだろって、馬鹿馬鹿しい気分になってくる。カラに話すんじゃなかった。

「そんなむくれないでよ、ササ。ごめんごめん」
笑いながら言うので、更に気分は最悪になってきた。
ホント、わざわざカラ捕まえて、何を話したかったんだろう。

もうなんか、どうでもよくなってきた。

「ササー。そんなに怒んないでよ」
「怒ってないよ」
別に怒ってなんかないのに、もう。
「怒ってる。だって眉間に力入って、皺出来てる」
言われておでこを触ってみると、くっきり縦に皺が入っている。
「あ」
「ササ、巫女になるんだから、その短気は直しなよ」
諭すように言われるのが、また勘に触る。
「短気じゃないよ。別に」
語気が強くなるのは、相手がカラだからに決まってる。

「そうやって強がったりするの、損するよ」
普段しないような真面目な顔をするので、イライラしていた気持ちがどこかにいってしまった。

2DAY・13

つられて眼下の水竜の祠のほうを見ると、祭りのために焚かれた火が、鮮やかに見える。

「ルアが王都に行った時、確かに引き止めても無駄だったかもしれないけれど、それでも言うことがあったんじゃないかな」

「何で、そんなこと急に……」

ルアが村を出てから、一度もそんなこと話したことなかったのに。

「あんた人前じゃ絶対泣かないし、あたしにもあんまり自分のことは話したがらないからよくわからないけど、でも後悔したんじゃないのかなと思ってたんだ」

後悔、か。

この三年間のルアに対しての想いとかが、じわじわと湧き上がってくる。

待っていたのに。どうして戻ってこなかったの。

もうどうでもいい。

嘘つき。

もしもあの時に、色んな事を話していたら。

そんな風に考えた事もあったけれど、あの時はそう言うしかなかったと思う。今でも。

「ちゃんと話せば、ルアだってムキになることなかったのに」

どういう意味なのか、さっぱりわからない。

私の知らないことを、何かカラは知っているの？

「あんたに認められたくって、立身するまでは連絡しないなんて決めちゃって、ルアも強情っていうか馬鹿っていうか」

「何それ。何でそんなこと、カラが知ってんの？」

口元を歪め、笑ったのか判断がつかないような顔をし、カラは溜息をつく。
「相談係だから」
呟くように、消え去るような声で、祭りの喧騒にかき消されそうなくらい小さな声だった。
カラは目線をあげることなく、ずっと祭りのほうを見ていて、決して顔を見て話そうとはしない。どんな表情をしているのか全くわからない。

「もしもちゃんと連絡取ってて、近衛兵に選ばれた時に王都に来て欲しいって言っていたら、きっとササを水竜にとられずに済んだんだろうね」
まるで独り言のように、もしくはここにいないルアに話し掛けているかのような話し方をする。
「……でも、私まだ何も決めてないよ」
「巫女になるんでしょ」
まるで念を押すように言う。目線はずっと祭りのほうから離さないままで、カラはこっちを見ようとはしない。

「ううん、巫女になるか決めてない。」

「巫女になる儀式だってしてるのに、何言ってんの？」
驚いたような顔で振り返り、カラが身を乗り出して聞き返す。
「カラ、呆れるとは思うけれど、聞いてくれるかな」
真剣そのものの表情で、カラがうなずいた。

「あのね。どうしたらいいのか、わからないの」
「巫女を？　それともルアの事を言ってんの？」
間髪いれずに聞いてくるカラに、思わず溜息をついた。
「両方」

「両方？　ちょっと待って。一つだけ確認させて。あんた、今でもルアのこと好きなの？」
返す言葉が浮かばない。
好きだとも言えない。でも嫌いだとも言えない。言葉が喉に張り付いたまま、何も言えずにカラを見つめ返す。
でも、ルアの声を聞くと胸が締め付けられる。
この気持ちは何て言ったらいいのか、私には上手い言葉を見つけられない。
カラが聞こえよがしな溜息をつく。
はあっと大きな声で。
「じゃあ、好きじゃないのね」
呆れたように言うカラを見て、力一杯首を横に振る。
そうじゃない。
「わからないの。自分の気持ちが」
「何で？　好きか、そうじゃないか。単純な事じゃない」
イライラした様子で、カラが言い捨てる。
「そんな簡単な事じゃないよ。ルアの為に巫女を捨てられないよ」
「何でよ。好きならそれでいいじゃない。世界中を敵に回したって、好きなら一緒にいればいいじゃない」
怒鳴るカラに、同じように怒鳴り返す。
「捨てられないよ！　生まれて初めて、やってみたい事が見つかったのに」
「それなら、なればいいじゃない、巫女に。捨てなきゃいいじゃない。それだけの事じゃない！」
カラのその言葉に、勢いを失って俯く。
私が今どれだけ情けない事を言ったのか、そして自分勝手なことを言ったのか。カラの言葉が痛いくらい胸に突き刺さった。
「何でならないのよ、巫女に」
「自信がないから」
それを言うのすら、とても情けないような気がしたけれど、言わ

ずにはいられなかった。
「自信なんて関係ないじゃん。巫女なんて、誰でもなれるわけじゃないんだよ」
信じられないようなものを見るような顔をする。
「それは、そうなんだけれど」

「じゃあ、何。自信がないから巫女から逃げて、ルアと結婚するとでもいう気？　あんたって最低」
「何でそうなるの。それにカラに何がわかるのよ」
二人ともどんどん声が大きくなっていって、明らかにお互いが怒っているのが伝わる。でも何で最低だなんて言われなきゃいけないの。
そんなことカラに言われる筋合いじゃない。
「わかんないわよ！　だけど、あんたがしようとしてることは最低だよ。好きで、好きで諦められないからルアと結婚するっていうんだったらわかるけれど、あんたは巫女になるのが怖いからルアに逃げようとしてるんじゃない」
「だから！　ルアと結婚するなんて一言も言ってないじゃない！　何でそうなるのよ。いつ、私がルアと結婚するなんて言ったのよ。それに私は、約束も守らないような人とは結婚なんてしたくない」

どんっとカラが地面を叩く。
「手紙の一通も書かないで放っておいたくせに、何言ってんのよ。あんたが変な意地張るからいけないんでしょ。バカじゃないの」
ふんっと鼻を鳴らし、カラはそっぽを向く。
「馬鹿って何よ！　カラに何がわかんのよ」

イライラはどんどん募ってくるし、売り言葉に買い言葉で、どんどん声が大きくなっていく。
ホントに、何でカラにいちいちこんなこと言われなきゃいけない

の。
大体、いつ誰が意地張ったって言うのよ。手紙を書きもしなかったのはルアのほうじゃない。
「もう一度聞くけど、あんたは今も好きなの？　ルアのこと」
まるで叫び声のような怒鳴り声を上げる。
「私は、私は……」
咄嗟に言葉が出てこない。
言葉に詰まっていると、カラが見下すような顔をする。
「ほら、何も言い返せないじゃない。ルアの事を言い訳にして巫女辞めるなんて言ったら、あたしが許さないからね」
「だから、わ……」

「ルアが、可哀想だよ。あんたのこと本当に好きなのに」
私はルアのことを言い訳にしようなんて思ってないって言おうとしたのに、カラは聞く素振りも見せず、さっきまでの怒りがどこに行ったのか、淡々と話し出す。
「あんたは、私が望んでも手に入れられない色んなものが手に入るのに、そのどれもが気に入らないなんて、むかつくわ」
カラは手元の草を抜いて、丘の下のほうに投げる。

「いいじゃない。水竜の巫女。何が不満なわけ？」
「不満なんてないよ。本当に、自信がないだけなんだって」
ふーんと、納得いかないような顔をして、カラはまた草を抜き始める。
「だって、水竜の声なんて、聴こえないんだよ、私には。明日になったら水竜の声が聴こえるようになりますって言われて、信じられる？」
「水竜がそう言うなら、そうなんでしょ」

興味がなくなったようで、手元の草をバラバラと足元に落とし、カラは膝を抱える。

「王子様は、何だって」
「王子様？　ウィズのこと？」
「そういう名前なの？　知らないけれど、あの祭宮」
ウィズに言われたことを思い出す。
巫女になるのは、必然ではない事。
女の子はみんな巫女に憧れるんじゃないのかって聞かれたこと。
俺は向いていると思う、と言ってくれた事。
どんな道を選んでも、守ってくれると言ったこと。
「自分で選べって」
「で、ササは迷っている最中なわけね」
興味なさそうにカラが呟く。

「突然あなたは特別だって言われて、信じられる？　私は信じられない」
「何で？」
「だって私には特別なものは何も無いんだよ」
カラは膝の上に乗せた顔を、こっちに向け、困ったような顔をする。
「これだけは言っておくよ、ササ」
眼下に松明の灯りの列が登ってくるのが見える。
誰かが来るのかもしれない。
身構えるようにカラが立ち上がり、振り返りもせずに呟いた。
「ちょっとでもなりたい気持ちがあるなら、巫女になんなよ」
カラの言葉の意味を聞き返そうと立ち上がると、恐らくウィズが連れてきた近衛兵と思われる兵士の姿が目に留まる。
思いのほかその距離が近いので、カラに問い返す事はできなかった。

「サーシャ様。こちらにいらっしゃいましたか」
確かギーと呼ばれていたウィズの部屋の前にいた兵士が、松明を掲げて近づいてくる。
その後ろに何人かの兵士がいて、その中にはルアの姿もある。
咄嗟にルアから目を逸らし、先頭の兵士だけを見るようにする。

「お姿が見えないので、祭宮殿下がご心配しておいでです。我々とお戻り下さい」
仰々しく頭を下げる動作は無駄が無い。
祭宮の名前を出されたら、断ることも出来ない。それにあまりこうやって迷惑をかけるのも、好ましくないだろう。
「わかりました。みなさんにもご迷惑をおかけし、申し訳ありません。すぐに戻ります」
「いえ。何かあるといけません。我々と共においで下さい」
もう少し話をしていたいから、というのは到底聞いてもらえなそう。
気が付かれないように溜息をついて、カラのほうを振り返る。

「話、途中になっちゃった。ごめんね。戻ろう」
カラは何も言わず、ただ頷く。その遣り取りの一部始終を見ていた兵士が、手を元来た道のほうへ指し示す。
「足元が暗くなっています。お気をつけ下さい」
兵士の松明を頼りに丘を降り、水竜の祠のほうへと向かう。
歩いている間中、誰も口を開こうとしないので、草を踏む足音だけが耳に入ってきた。

「サーシャ殿、ご無事で良かった」

兵士と共に、祭りの真っ最中の広場に行くと、ウィズが小走りに近づいてくる。
本当に、ほっとしたような顔をする。
「ご心配をおかけして申し訳ございません」

ウィズの顔を見てたら、本当に申し訳ないような気がしてきて、神殿で習ったように丁寧に頭を下げる。ウィズに心配をかけて、兵士の人たちにも迷惑をかけて、本当にごめんなさいって思ったから。
「そんなに気にしなくていいですよ。ただ気が付いた時にお姿が見えなかったもので、驚いてしまっただけですから」
「いいえ。私の思慮が足りませんでした。殿下にも兵士の方にもご迷惑をおかけし、申し訳ございませんでした」
水竜の巫女候補が、突然祭りの最中に姿を消したらどういうことになるか、ちょっと考えればわかることだったのに。それなのに、黙っていなくなって、自分のことしか考えていない証拠だ。
もう一度、気持ちを込めてウィズと兵士たちに頭を下げる。

「あなたがそんな風に恐縮すると、お友達はもっと困ってしまいますよ」
ウィズのその言葉で振り返ると、カラの顔は真っ青に蒼ざめている。
「あなたのせいではありませんから。サーシャ殿にあなたを追うように言ったのは私です。どうかお気になさらないように」
「ごめん、なさい」
消え去りそうなくらい小さな声で、カラがウィズに謝罪する。

深々と頭を下げる姿は、見ていて辛い。それに、本当にカラのせいじゃないのに。
どうやったらわかってもらえるんだろう、カラに。このまま、カラに罪悪感を抱かせたままになるのは嫌。

「祭宮殿下。すぐに参りますので、あと少しだけお時間をいただけますか」
ウィズは全てを理解してくれたような顔をして頷く。
「私は戻っていますから、ゆっくりとお話しされて構いませんよ。ただ、兵士を何人かつけますがよろしいですか」
「はい。大丈夫です。ありがとうございます」
返答を聞くと手早く兵士たちに指示を出し、数人の兵士を引き連れてウィズは人波の中に消えていく。
何人かつける、と言った兵士もすっと人波の中に紛れてしまって、どこにいるのかはわからなくなってしまう。

ウィズの姿が見えなくなり、兵士たちの姿も見えなくなると、やっとカラの表情が和らいでくる。強張っていた肩の力も抜け、ほっとした顔をする。
次代の水竜の巫女の姿が見えなくなったら、周りがどんな風に思うのか、そんな簡単なことにすら気が付かないほど、自分のことばっかり考えていた。

「迷惑かけてごめんね」
「迷惑なんて思ってない。あたしがササと話したかっただけだもん。あやまんないでよ」
「でも……」
「いいんだって。早く行きなよ。それじゃーね」
片手を挙げて、ウィズが消えたのと逆の方向に背を向けて、カラは走り出す。
何か言う間もくれないで、カラの背中は雑踏の中に紛れていく。
「言い忘れた。あんたは十分特別だよ、ササ。自信を持って！」

「ありがとう」
笑顔で手を振るカラに、その言葉は届いただろうか。
精一杯の笑顔で、カラに手を振り返した。

3DAY・1

3DAY

「サーシャ。準備は出来たかい」
村長の部屋に行くと、村長は緊張した面持ちで椅子から立ち上がる。
昨夜の喧騒が嘘のように村は静まり返っていて、村長様の後ろの窓には鮮やかな朝焼けの空が広がっている。
「はい」
「そうか。では行こうか」
部屋を出る村長の後についていく。
半年前に村を出たときと同じような服装だけれど、その時よりもずっと落ち着いている。

トクン、トクンという心臓の音はあの時と同じように早く、手にはやっぱり汗をかいているけれど、今は全てを受け入れられている自分がいる。

巫女に選ばれたこと。
ルアに結婚して欲しいと言われたこと。
決して不安や迷いが消えたわけじゃないけれど、今は自分が自分でいられる気がする。

今巫女様が、ウィズが、ルアが、カラが教えてくれた。

その全てを考えて、たった一つの結論を自分なりに出せたからかもしれない。

屋敷の玄関に出ると、敷地の外に王都からきたウィズと兵士たち、そして神殿からきた神官が出発の準備をして待っている。
「ありがとうございました」
これでこの村にはもう帰ってこないかもしれない。そういう感傷がないわけではないけれど、振り切るように村長に挨拶をする。
「待ちなさい」
お辞儀をし、神殿へと向かう人たちに近づこうとすると、後ろから静かに村長様が語りかけてくる。
「きちんと別れの挨拶をしなさい。今度いつこの村に帰ってくるのかわからないのだから」
村長への挨拶の仕方が悪かったのかと思って振り返ると、ママとカラが玄関か出てくるところだった。

「ママ。カラ」

涙を浮かべ、それでも笑顔で立っているママに駆け寄って抱きつく。
背中に回された手が、トントンとあやすように背中を叩く。
「行っておいで、ササ」
「一人にしてごめんね。パパが死んでからずっと、育ててくれてありがとう」

もっと言いたいことがあるのに、涙が止まらなくて、それ以上言葉にならない。こんな風にママに抱かれたのは何年ぶりなんだろう。あったかくて、余計に涙が出てくる。
一緒にいるときに、もっともっと色んな話をしたり、色んなことをしてあげればよかった。
「泣くんじゃないよ。一生の別れじゃないんだから」
ママの肩に頭を擦りつけるようにしながら頷く。

明るく振舞おうとするママの声も震えていて、耳元で鼻をすする音がする。それが余計に辛くて涙が出る。
「ほーら。ササ。あんまり泣くとみっともない顔になるよ」
体を離し、ママが手で涙を拭ってくれる。ママの目が真っ赤になっている。
溢れ出る涙は、拭っても拭っても零れ落ちていく一方で、パチンと軽く頬を叩かれる。

「パパが死んだ時に約束しただろ？　強い子になるって」
体の奥からどんどん涙が出てくるけれど、歯を食いしばって、目に力を入れて、涙が出てくるのをなんとか止めようとしてみる。
「うん。……約束し、た」
「じゃあ、行っておいで」
今出来る精一杯の笑顔でママに笑いかけると、ママも泣くのを堪えたくしゃくしゃの顔で笑う。
「行ってきます」

下を向いて、服の裾で涙を拭いて、カラの前に立つ。
カラもやっぱり泣いている。

「あたしには、手紙くらい書きなさいよ」
「当たり前じゃない」
抱き合って、お互いの髪に顔を埋める。
これが一生の別れになるかもしれない。もう会えないかもしれない。お互いにそれはわかっているけれど口には出さない。それを言ったら余計に辛くなる。
「どこに行っても、カラは一番の友達だよ」
「当たり前でしょ」
カラの背中に回す手に力を込めて、それからゆっくりと体を離す。互いの肩に乗せられた手を離しがたくて、でも何も言うことが見つ

からなくて、立ち尽くす。
しばらくして、カラの手が体を押すようにして遠ざかる。
「祭宮様が待ってるよ」
「うん」
唇を噛みしめ、袖で涙を拭い、カラとママにゆっくりと頭を下げる。
「ありがとう。行ってきます」
二人に背を向けて、努めて綺麗に歩くことだけを心がけて、一歩一歩遠ざかる。
振り返っちゃいけない。
別にこれは悲しいことじゃない。
「よろしいですか」
ウィズの傍に近づくと、静かな声で聞かれる。
「はい」
見上げたウィズの瞳の表情は読み取ることが出来ない。
もう何も言わない、と言ってからは何も聞いてこなかったし、核心に触れるようなことは何も言ってこなかった。
きっと本当は色々言いたいこともあるんだろうけれど、祭宮の仮面を被って、表情の全てを押し隠してしまっている。最初から最後までこういう顔をしていたら、近寄り難い人としか思わなかっただろう。
ウィズが手に持っていた薄い布を、突然頭の上から掛けられる。目の前が見えなくなるわけじゃないけれど、視界がうっすらと遮られる。
「これで顔を隠してな。そうすれば、泣いていても他の奴に気が付

かれないから」
布を整えてくれながら、他の人には聞かれないような小さな声で囁く。
ウィズの優しさに、また涙が出てくる。
「神官殿。サーシャ殿をお願い致します」
通る声で、傍にいた神官に告げる。
「こちらへ」
神官に促されて兵士たちの脇を抜け、村長の屋敷から遠ざかる。
一度振り返ってみたけれど、兵士の姿で隠されて、村長もママもカラも見つけられない。
半年前とは違う。
本当にもう帰ってこられないかもしれないという切なさで、胸が締め付けられる。
別にこの村が好きだったとか、そういう気持ちがあったわけじゃないのに、全てを目に焼き付けておきたいと思う。
忘れないように。全てを思い出せるように。

神殿に向かう道中、一緒にいる神官は一言も口を開かず、何時間も黙っていて睡魔に負けそうになっていると、やっと見慣れた水竜の神殿が見えてくる。
この国を縦断する大河の、ちょうど水源地あたりにある湖のほとりに建てられた水竜の祠は、まるで水に浮いているお城のようにも見える。

遠くから見ると、ちょこんと小さく見える水竜の神殿も、その中に入ると入り組んだ迷路のようになっていて、決して外部の人間が水竜の座す「奥殿」には近づけないようになっている。
その奥殿に入ることが許された、たった一人の人間が水竜の巫女。
そういえば奥殿も広そうだけれど、巫女が一人で掃除しているんだろうか。それはまた大変な重労働なんだろうな。

なんだか昨日の夜から、そんなことばっかり考えている。
どうでもいいようなことばっかり真剣に考えていて、でも結論を出すわけでもなく、ただなんとなく考えている。
昨日の夜は、どうして王家からしか祭宮を選ばないのかってことを考えていた。
ウィズが言うとおり、王家が国を統治する正当性の為に、祭宮は王家の人間からって決まっているとしても、それは王家側の言い分でしかない。
本当のところ、水竜はどうして祭宮を王家から選ぶんだろう。
水竜からしてみれば、別に巫女みたいに誰がなってもいいはずなのに。
王家と水竜の間に密約でもあるんじゃないかってところで、考えが行き詰まった。
元々答えなんかわからないことだし、教えてくれる人もいないんだから、どうやったって結論が出るわけがない。

考えても答えが出ないことばっかりが、目の前に並んでいる。
本当に考えなきゃいけないことも、結局は答えなんて出せそうにない。
お祭りが終わった後、ウィズや村長様と一緒に村長様のお屋敷に戻り、自分の与えられた部屋に戻ると、ほとんど崩れ落ちるようにベッドに横になり、天井を眺めながらそんなことを考えていて、気が付いたら眠りについていた。

水竜の巫女になろうとすればいいって言っていたウィズ。
確かに一理あるなって思う。
外側の見せ掛けからだけでも巫女らしくなれば、自然と自分が巫女として扱われることに慣れてくるのかもしれない。
考えてみれば、村で人前に出ている時は、いかにして巫女候補らしく振舞うかってことをまず念頭においていたような気がする。
だから、その延長で巫女「らしく」なることは可能のような気がするし、いつの間にか巫女が板につくのかもしれない。
巫女は水竜が選ぶけれど、巫女を作るのは水竜じゃなくて、周りの人なのかもしれない。

結婚して欲しいと言ったルア。

ここ半年の間、ルアのことなんて思い出しもしなかった。
でもその前、ルアがいなくなる前、ルアの事どう思っていたんだろうって考えると、出る答えは「好き」
ずっと忘れようと思っていた。忘れたら楽になれると思っていた。
なのに、忘れることなんて出来ないでいた。
三年という月日は、一人の人を待つには長すぎたけれど、気持ちを忘れるには短かったのかもしれない。

そこまで考えたら、考えることすら嫌になって、あとはどうでもいいことばっかり考えていた。
巫女になったってルアと結婚したって、どっちにしたって後悔する。

どっちにしたって後悔するなら、より後悔が少ないほうを選べばいいってことに決めた。
全ては神殿に着いたその時に決めればいい。その時が一番自分の気持ちがわかる時のような気がするから。
考えるのを放棄して、ずっとくだらない、どうでもいいことばっかり考えていた。

何もかも投げ出せたらどんなに楽なんだろう。
いっそどっちも選ばないっていう道もあるし。
巫女にもならない。ルアとも結婚しない。
全てを放棄して、そうやって生きていけたらどんなに楽なんだろう。

でもその両方を投げ出して、私はどうやって生きていればいいんだろう。
明確なビジョンなんてない。
もう村には中途半端な形では戻れない。
そうしたら、どこか違うところで生きていくしかないんだろうけれど、何をするとかっていう当てもない。一人で生きていくだけの、生活力もない。
ウィズがどうやって守ってくれるつもりか知らないけれど、誰かの庇護の下でしか生きていけない。
そんなみっともない生き方は嫌だ。
私は、私として、一人の自立した人間として生きていきたい。
そんな逃げるような事をするのは、きっとウィズの納得する答えなんかじゃないと思う。
別にウィズに納得してもらう為に答えを出すわけじゃないけれど、私は、ちゃんと自分で選び取っていきたい。自分の人生なのだから。

物思いに耽っていると、神殿との距離はどんどん近づいてきて、あっという間に神殿の入り口に着いてしまう。

神官に促され神殿の入り口に立つと、半年前、初めてここに来たときのことを思い出す。

ママと村長様と三人、初めてここに来たとき、足はすくんで震えていたし、緊張して声も出なかった。

それに何よりも、自分が水竜の巫女に選ばれたことを信じてはいなかった。

今は、なんとなく巫女に選ばれたことを受け入れている。

それは半年の見習期間のおかげなのか、それとも村で巫女候補として扱われているうちに、そう思えるようになったのか。

そのどちらも、巫女に選ばれたことを受け入れるために必要なことだったのかもしれない。

水竜の神殿を近くで見ると、白い神々しい光を放っているかのようにも見える。

この国を統べる、本当の支配者である水竜。

その威光をあらわしているかのように、入り口も荘厳な雰囲気がし、自然と気持ちが引きしまる。

ふと見回してみると、近くにウィズたちの姿はない。

先に神殿の中に入ったのか、それとも後からくるのかはわからないけれど、一昨日ここを出たときと同じように、神官と二人っきり。

横に立つ神官の表情を伺うと、神官は小さく頷く。

「次代様。神官長様がお待ちです」

「はい。私もご挨拶をしたいと思っておりますので、連れて行って頂けますか」

「かしこまりました」

これもまた、決められた儀式の中の一つ。

二人っきりで誰もいないのに、決められた言葉を決められた通りに言う姿をウィズが見たら、笑い飛ばすかもしれない。でもあの人なら笑わずに神妙な顔をして見ているかもしれない。

3DAY・2

神殿の敷地に入ろうとするところで、思わず足を止めてしまう。
神殿に入る時の気持ちでその先をどうするかを選ぼうと決めていた。
なのに、自分がどうしたいのかわからない。

水竜の巫女になる。
ルアと結婚する。
そのどちらも選ばない。

神殿の前に立ったときの気持ちで、どうするか決めようと思っていた。
水竜の傍に、神殿の前に立てば、おのずと自分の気持ちが見えてくると思っていた。
水竜の巫女になりたいのか、わかるような気がしていた。
なのに、今はもやもやした気持ちしかない。
今朝のすっきりしたような感覚はどこかへ消えてしまっている。
先をどうしたらいいのかわからない不安が、胸を締め付ける。

ううん、不安じゃない。
遂にこの時が来てしまったのだという、どうしようもない焦り。
自分の中に答えがあるような気がしていたのに、ただ神殿に行くまで考えるのやめようって逃げていただけでしかなかった。

私には「自分」がない。
空っぽだ。

不意に、そんな言葉が頭をよぎる。
水竜の巫女に「選ばれたから」巫女になるとか、ルアに結婚して欲しいって「言われたから」結婚するとか、そんなの自分がない。
まして、どちらも選ばないという選択だって、選べないから逃げているだけでしかない。
私がどうしたいのかが無い。
体中の血の気が失われ、寒気に襲われる。
崩れそうな崖の端に立っているかのような、恐怖さえ感じる。
わからない。
自分がどうしたいのか全然わからない。
ウィズが話してくれたことを聞いて、漠然と巫女になってもいいかもしれないって思ったり、ルアに結婚して欲しいって言われて悩んでいたけれど、結局のところちゃんと考えることをしなかったからだ。
どうしよう。
目の前にそびえる、白く輝く水竜の神殿に、その敷地に入ることを拒まれている気がする。
ちゃんとした答えを持っていない者が、入ることを水竜は許してくれない。
あの日、神殿を出る日、水竜は教えてくれていたのに。
悩むことがあっても、自分で道を選び取らなきゃいけないことを。

考えなきゃ。
自分が本当にどうしたいのか。

逃げたくない。
巫女からも、ルアからも、自分自身からも。　だから、決めなきゃ。
巫女になるのか、ルアを選ぶのか。

ふっと何かもやもやしたものが湧き上がってくる。
ルアを、選ぶ……。
「ルアを選ぶ？」
口に出してみて、胸の中に何かひっかかるような違和感に気がつく。
ちくり、と刺が刺さった時のような感じ。
大きなケガじゃないんだけれど、気になってしょうがないような。
何かを見落としている。
何を？
わからない。何が引っかかっているのかもわからない。
一度違和感に気がつくと、頭の中に、ぐるぐると同じ言葉が回り続ける。
違う。
違う。
違う。
小さいけれど、確かな声が、違うと言い続ける。
何が違うのかわからないけれど、その言葉に心さえも支配される。
「次代様？」
はっとして声のするほうを見ると、伺うような顔で、神殿の敷地から神官が声をかける。
連れて入っていくはずの私が神殿の前に立ち尽くしているのを見て、怪訝そうに戻ってくる。
「どうかなさいましたか。神官長様がお待ちですので、どうぞお早く」

促すように言われるけれど、まだここには入れない。どうしたらいい。
だって、まだ決めていないもの。
巫女になるかどうかを。

怪訝そうな顔をする神官に、首を横に振る。
それだけで意図するところを察したのか、さーっと神官の顔は蒼ざめていく。
「何があったというのです。つい先程、神官長にお会いになられるとおっしゃられたのに」
言おうかどうか一瞬躊躇うものの、でもどんなに非難されても、神殿には入れないことを伝えなくては。
「まだ決めていないんです。だから入れません」
「決めていらっしゃらなくても結構ですから、お姿を見られる前に神殿にお入り下さい」
決めてなくても構わないという神官の言葉にひっかかる。
「いいえ。神殿が、水竜が拒んでいるんです。ここに入ることを」
「それは次代様の思い過ごしです。水竜様はあなたをお選びになられました。それを疑うのは水竜様を疑うことになります」
叱責するかのような言葉に、神官の強い信仰心が伺い知れた。
水竜に対しての信仰心がないわけではない、むしろ逆に決めていない中途半端な状態で神殿に入ることのほうが、水竜に対し、申し訳ないと思う。
「申し訳ございません。言葉が過ぎました」
困ったような顔をしていたのだろうか、神官が頭を下げる。

こんな風に気を使われるのに相応しい人間じゃないのに。なのに、こういう風に接しられることに慣れてきている自分がいる。

そんな自分がとても嫌だ。
目の前の神官を含め、神官たちは次代の巫女に選ばれたからという理由で、敬意を払ってくれているのに、自分自身が特別なんじゃないかとさえ錯覚してしまう。
「そんな風に頭をさげないで下さい。私はまだ巫女じゃありません」
「次代様……」
困惑の表情で、神官が立ち尽くす。
真実を表しているけれど、きっと神官の期待を裏切るような事を言ってしまったんじゃないかと思う。
これじゃ、まるで巫女になることを拒絶しているように見えるかもしれない。
でもなんて伝えればわかってもらえるのか、どうしたらいいのかわからなくて、神官と同じように立ち尽くすしかない。

どのくらいそうしていたのかわからない、元来た道のほうから砂煙があがるのが視界に入る。
「次代様、お願いです。どうか中にお入り下さい」
慌てた声で、神官が懇願する。
「お姿を見られてはなりません。どうか中へ」
「どうして、どうして姿を見られてはいけないの？」
「次代様は今日より巫女となられるお方です。神殿の者以外にそのお姿を見られてはなりません」
その言葉に反射的に怒鳴り返す。
「だから、私はまだ決められないから入れないのよ！　どうしてわかってくれないの」
哀しげな顔をし、神官が頭を下げる。
それを見て、怒りに任せて怒鳴ってしまったことを後悔する。
「決めていらっしゃらなくても構いません。もし神殿の建物に入るのがお嫌でしたら、入ってすぐ左に小さな広場がございます。そち

らなら誰にもお姿を見られることはございません。どうか、どうかお願い致します」
その切羽詰った、哀願するような声が申し訳なくて、小さく頷く。
目の前の神官にとっては、とにかく姿を見られない事が大事で、巫女になるかどうか悩んでいる気持ちなんてどうでもいいみたい。
神官も村の人と変わらない。
サーシャという入れ物を通して、水竜を見ている。
誰もちゃんと私のことなんて見てくれない。私の気持ちなんてどうでもいいことなんだ。
そんなこと、わかっていたことなのに、どうしてこんなに傷つくんだろう。
最初から神官はずっと「次代様」としか呼んでくれなかった。
なのに何を期待していたんだろう。

「急いで下さい」
神官の焦る姿が、余計に心を冷やしていく。

例え巫女になる意思がなくても、神官には次代の巫女にしか見えないんだろう。
それでも私は、自分の気持ちを大事にしたい。
自分が水竜の巫女になりたいと思えない限り、巫女になりたくない。
それは我儘なことなのかもしれないけれど、でもそれが私の望むことだから。
今巫女様を通して水竜が教えて下さった事を、気がつくのは遅すぎたかもしれないけれど、きちんと大事にしたい。
私が私の意思で、巫女になるのかを選ぶ。

――意思無き者がその敷地に入ることをお許し下さい。

神殿の敷地に入るとき、水竜にそっと小さく呟く。

神官は気がつかなかったようで「お早く」と言うと、神殿の前殿へと繋がる並木道の三本目と四本目の木の間に姿を消す。

そこに通路があるなんて、今日初めて知った。

ありとあらゆるところが迷路のようになっていて、外部の者が奥殿に辿り着くのを拒んでいると、昔神官長様に習ったことを実感する。

前殿に入っても、神官長様が外部の方とお会いになる時にお使いになる「謁見の間」以外、部屋らしい部屋は見つけられないようになっているし。

それで引き返した侵入者が、奥殿へと繋がる道を探したときに迷い込ませるように、こういった仕掛けが色々施されているのかもしれない。

並木道の木々の間に入ると、左右に雑然と木々が並んでいる。

それが意図して作られたものなのか、それとも自然のまま手付かずなのかはわからないけれど、もう外の様子は伺い知ることが出来ない。

しばらく歩くと行き止まりに辿り着き、そこだけ切り取られたように木が植えられてなく、小さな空き地のような広場になる。

振り返ると細く続く道があるだけで、入り口のほうの様子は伺うことは出来ない。

ここなら、ゆっくりと誰にも邪魔をされずに結論を出すことが出来る。

「次代様。後程お迎えに参ります。それでよろしいでしょうか」

気持ちを何となくは汲み取ってくれたらしく、神官が提案してくれる。

「はい、ありがとうございます」

綺麗なお辞儀をして神官が背を向け、元の並木道へ戻ろうとする。
「待ってください」
咄嗟に声を掛けると、表情を変えずに神官が振り返る。
「我儘を聞いてくださってありがとうございます」
その言葉を聞き、ふっと神官の顔がほころぶ。
「いいえ。私は次代様の望むことをしたまでです」
さっき酷いことを言ってしまったのに、そうやって言ってくれるのが嬉しい。
例え、私の先にいる水竜を見ているのだとしても。

「もう一つだけ、我儘を言ってもいいでしょうか」
眉根を少し歪め、でも顔色を変えずに何でしょう、と神官が問い掛けてくる。
「祭宮様にお会いしたいんです」
少し考えるような仕草をしてから「わかりました」と言い残し、神官は木々の間に消えていく。

どうしてウィズに会いたいと思ったのかわからない。
ただ、次代の巫女としてではなく、ちゃんとササとして見てくれる人がウィズしかいないように思って、咄嗟にウィズの名前を出してしまった。
迷っています、なんてとても神官長様には言うことが出来ない。
神官長様にお会いするのは、ちゃんと結論を出してからじゃないと。
でも、一人じゃうまく気持ちがまとめられない気がして、誰かに話を聞いて欲しい。
もしも村にいる時に、ちゃんと真剣に考えて悩んだのなら、カラに相談できたのに。
こんなところまで来て、まだ答えが出せないって言ったら、ウィ

ズは呆れるだろうか。
立っていることに疲れて草の上に座り込み、木に切り取られた空を見上げる。

そうだ、ルアのことを考えていたんだ。
「ルアを選ぶ」
さっき引っかかった言葉をもう一度口に出して言ってみる。
やっぱり同じように、心のどこかが引っかかる。
最初にルアに結婚して欲しいって言われた時、巫女になるから結婚出来ないとは、どうしても言えなかった。
巫女になるって言ったら、自分の気持ちに嘘をつくことになるから、あの時言えなかったんじゃないかなって今は思う。

巫女にならないことは、ルアと結婚するっていうことと同じことじゃない。
ルアの顔を見た時、三年前にルアが村を出たときの気持ちを思い出した。
でもカラが言うような後悔とはちょっと違って、行き場のなくなった気持ちがふわりふわりと漂っているような感じがした。
生まれたときから一緒だったから、いなくなるってことが心に穴がぽっかり空いてしまったようで、物足りないような気持ちだったと思う。
今思うと、自分の一部を切り取られたような喪失感に近いもので、恋焦がれるとかそういう気持ちじゃなかったようにも思える。
それでも幾度となく夢にその姿を見たし、会いたいと何度も思ったのも事実だけれど、今はルアを選ぶということに躊躇いを感じる。
それは、離れていた時間のせいなのかもしれない。

ルアの事が嫌いなわけじゃない。嫌いって言ったら嘘になる。
好きかってカラに聞かれた時、咄嗟に言葉が出てこなかったのは

どうしてなんだろう。
好きだと思う。うん、好きなんだと思うんだけれど。
でも、そう思った次の瞬間に、また胸がちくんと痛む。
そうじゃないって、心が反乱を起こす。
ルアを好きってことにさえ、違うって心が警報を鳴らす。
顔を見たら、絶対に気持ちが揺らぐのにどうして。
ルアと祭りの前に会った時あんなにも動揺したのに、みっともない泣き方するくらい辛かったのに、どうしてこんな風な違和感を感じるんだろう。
あの時の気持ちと今の気持ちが違うっていうんだろうか。
本当は自分の中に答えがあるはずなのに、まだ、うまく形にならない。
言葉にすればするほど、自分に言い訳しているような気がしてくるのはなぜだろう。
考えることに煮詰まって立ち上がり、一度深呼吸する。
はーっと大きく息を吐き、頭と気持ちに風を吸い込む。
巫女になりたいのかどうか。
ルアのことよりもまず、それを今すぐ決めなきゃいけない。
神官長様も、今頃神官からの報告を聞き、重たい溜息をついているかもしれない。
巫女になりたいの？
それとも巫女になりたくないの？
自分自身に問いただすけれど、答えが出てこない。
心の中にその答えはあるはずなのに、どうしても躊躇いばかりが出てきてしまう。

本当に私でいいのかな。
でも、村の水竜の祠で水竜に問い掛けたとき、気持ちが軽くなったんだから、水竜が「いいんだよ」って伝えてくれたのだと信じたい。
本当に水竜の声が聴こえるようになるのかな。
もしも巫女になっても水竜の声が聴こえなかったら、その時はどうしたらいいんだろう。
巫女に相応しい振る舞いが出来るようになるのかな。
さっき、あんな風に神官にあたってしまった私が、誰もが認める巫女になれるとは到底思えない。

その短気は直しなよ。強がってばかりいると損するよ。
そう言っていたカラの言葉を思い出す。
カラに言われたように、自分の感情に走り、神官の事も考えず、どうしてわかってくれないのかと腹を立ててしまった私は、やっぱり巫女には相応しくないのかもしれない。
なりたいとか、なりたくないとかじゃなくて、自分のダメなところばかりが目に付く。

教えて、誰か教えて。
本当に私でいいのか、教えて。
ああ、ダメだ。
誰かに頼ったりしないで、自分で考えてちゃんと答えを出さなきゃ。
なのに焦りがどんどん芽生えてきて、どうにも落ち着かなくて、うろうろと、決して広いとは言い難い広場を歩き回る。
歩いていたからって何も変わらないんだけれど、立ち止まってじっとしているのは到底無理で、こうやって動いていないと気持ちが押し潰されそうになる。

3DAY・3

カサっという草を踏む音がした気がして、音のした方向に目を向ける。
神官が呼びにきたんだろうか、それともウィズがきたのだろうか。
なんにしても、こんな情けない顔はしてられない。
「次代様、お呼びですか」
木の間の細い小道からウィズが現れる。
誰が来るんだろうと身構えた体から力が抜ける。
豪華な、恐らく巫女になるための儀式に出席するための服に身を包んで、祭宮の作り物みたいな笑顔を浮かべる。
心の中には色んなことが渦巻いているのかもしれないけれど、この人は絶対にそういうところを見せない。
今も、ここが水竜の神殿だからなのか、きっちりと祭宮を演じている。
そうやって壁を作っているのに、それでもウィズの顔を見るとほっとする。

会いたかった。

ほんの数時間前にも顔を見たし、一言二言会話もしたのに、そんなに長いこと会っていなかったわけでもないのに、何故かとても会いたかったと思う。
視界が次第にぼやけてきて、ウィズの顔が歪んでいく。
歪んだ視界の中のウィズが、苦笑いを浮かべたように見える。

「何で俺の顔見て泣くんだよ」
祭宮じゃないウィズが、困ったような顔をする。
「泣いてる？」

指で目を押さえると涙が零れてきて、初めて泣いていることに気がつく。
自分でもわからない。けれど、涙がぽろぽろと溢れ出す。
人に泣いているところを見られるのは、自分の弱さを見せるような気がして、誰の前でも泣かないようにって子供の頃から思っていたのに。
だから、ルアの前でもカラの前でも、絶対に泣かないようにしてきたのに。
それなのに、ウィズの前で泣くのはこれで三度目。
たった二日間で三回も泣いているところを見られるなんて、涙腺が壊れているのかな。

ぐしゃぐしゃっと袖口で涙を拭いて、ウィズの顔をもう一度見る。
今度はウィズの顔がはっきりと見える。
「どうしたんだよ。何かあったのか」
ウィズの瞳には心配の色が浮かんでいる。
神殿まで来て突然中に入ろうとしないで、こんなところで泣いてるんだから、祭宮のウィズが心配しないわけないのに、心配してくれてるんだっていう事が、なんとなく嬉しい。
「……何もないよ」
何があったかって聞かれても、何か事件があったわけじゃないからそう告げたのに、ウィズは不満たっぷりな顔をする。
「何も無いのに泣くわけないだろ」
ぐっと言葉に詰まる。
ウィズから見たら、何か辛いことあったようにしか見えないのかもしれない。
涙は止まってはくれなくて、何度も何度も袖で拭う。
拭ってもなかなか止まってくれない涙の理由はわからない。
けれども、どうして神官長様に会わずにここにいるのか、ウィズに説明しないといけない。

でも、何もなくって、本当に自分の中に何も無いから、どう説明すればうまく伝わるのかわからない。

「うまくまとめられないんだけれど」
鼻をすする音が言葉の間に紛れ込む。
「いいよ。聞くよ」
別になんてことないといったような、飄々とした顔をして、ウィズが即答する。
「もう一度だけ、同じ高さで話、聞いてくれる？」
それが甘えだという事は十分にわかっている。
「いいよ」
あっさりとしたその言葉に、ほっとする。

深呼吸して、涙を拭いて、出来るだけ鼻声にならないように気をつける。
さっきまで止め処なく流れていた涙は、もう落ち着いてきて殆ど出なくなっている。
「あのね、ちゃんと考えて結論出さないといけないって、ウィズ言ってたじゃない」
「ああ、言ったね」

豪華な服が汚れるのも気にせず、ウィズが草の上に座り込む。
ポンポンと右手で草の上を叩くので、ここに座れって事なのかなと思って、横に座る。
生い茂る木々に小さく切り取られた空の下、葉が風に揺られる音と、小鳥のさえずりだけが耳に届く。
まるで外の喧騒や、どろどろとした醜い気持ちから切り離された、別世界のような錯覚にさえ捕らわれる。
ここでなら、誰にも言えなかった事さえ言えるような気がしてくる。

それはこの場所が醸し出す雰囲気のせいなのか、それともウィズの揺るぎない穏やかさのせいなのかは、判断がつかない。
何を話そうとか考えるより先に、言葉が湧き上がってくる。

「神殿の前に立った時に決めようと思ってたの」
相槌を打つだけで、ウィズは口を挟もうとしない。
「ここにくれば、水竜の巫女になりたいかわかると思ってたから。なのにね、なりたいのか、なりたくないのか、わからないの」
顔色一つ変えず、ウィズは頷くだけ。
「なるのが当たり前だと思ってたから、考えたこともなかったの。自分で選ぶなんて。だからどうしたらいいのか、全然わからない」

「幼馴染に求婚されたからじゃなくて、か」
ぽつりとウィズが呟く。

ルアのことを切り出され、はっとしてウィズの顔を伺うけれど、相変わらず表情の読めない顔をしている。
「それも、あるかもしれないけれど、でもそうじゃないの。私がどうしたいかが、わからないの。巫女になりたいのか、なりたくないのか。ルアと結婚したいのか、したくないのか」
話始めたら、勢いが止まらなくなってくる。

ルアのことが一つの引き金になったかもしれない。でも、そうじゃない。ルアがどうこうじゃなくって、もっと根本的なところで、ずっとずっと悩んでいた。

「私、巫女に相応しいとはどうしても思えない。だって、私には何にも無くって、巫女らしく振舞うことも出来なくって、なりたいっていう強い気持ちもないんだもの。こんな私が巫女になってもいいの？」

「ササ……」
「何にもないの。空っぽなの。自分で選びたいのに、選べないの。いっそ全部ゼロに出来たらいいのにって思うのに、それも怖くて選べないの。ねえ、ウィズどうしたらいいの。私、どうしたらいいの？」

問い掛けると、ウィズの眉根が歪む。
「ササ、俺は傍観者でしかないんだよ」
淡々と、でも昨日聞いたときと同じような苦しげな顔をする。
ウィズを困らせているのが、その顔からはっきりとわかる。
「……うん。わかってる。ごめんなさい」
「いや、いい」

口元を押さえて、大きな溜息をついてウィズが言葉を選ぶように考え込む。
その大きな溜息が、心に痛い。
本当はちゃんと自分だけで答えを出して、ウィズが納得するような答えを見つけたって胸を張って言いたかったのに。
結論を自分だけで出せなかったことが情けなくなってくる。
でも誰かが背を押してくれないと、前に進むことが出来ない。
本当は、そんな自分が一番嫌い。

「ササはさ、すごく美味しいお菓子を貰ったのに、食べたら勿体無いかもしれないとか、本当は苦いんじゃないかとか考えてみたり、どうぞ食べて下さいって言われているのに、自分が食べちゃいけないんじゃないかとか思って入る間に、結局お菓子を腐らせて食べられなくしてるんだよ」
言いたいことがわからなくて、ウィズの顔を見てみるけれど、その顔は真剣そのものだ。

「お菓子？」
「そう。お菓子。ササはね、一生に一度しか貰えない、とびっきり美味しいお菓子を貰ったんだ。でもそれがあんまりにも立派なお菓子で、手を伸ばすのを怖がってる」
もしかして巫女のことを言っているのかな。
そうなのかな。
ウィズの顔を見ると小さく頷くので、それが巫女に選ばれたことを言っているのだということがわかる。
「腐ってからじゃ、もう二度と食べられないよ」
さらりと言った一言が、ぐさりと胸に刺さる。
二度と食べられない。
後悔したときには、もう二度と巫女にはなれない。
それでもいいのかって聞かれている。
今、この時を逃したら、もう二度と巫女になれない。
私が巫女になる、一生に一度のチャンス。
本当に、手放してもいいの？
巫女にならなくてもいいの？
もしも巫女にならなかったら、後悔しないって言い切れない。ううん、絶対後悔する。
あの時巫女になればよかったのにって絶対思う気がする。
後悔だけはしないようにって、昨日決めたじゃない。
巫女にならなかったら、じゃあ何をするの。何になるの。
なりたいものも、したい事も、何一つ見つけられないのに。
なりたい、もの……。

とくん、と胸の奥が鳴る。

3DAY・4

「腐らせたくない」
胸の奥に眠っていた小さな欠片が目を覚ます。

「私は、巫女になりたい」

驚くほど自然にその言葉が出る。
でも一度言葉にしてしまうと、ずっと自分がそれを望んできたような気がしてくる。
今しか選べない、たった一度の美味しいお菓子。
腐ってから食べなかった事を後悔したくない。
後悔したくないから食べてみようっていう選び方でいいのかはわからないけれど、それでもいい。
ずっと誰かに巫女になってもいいんだよって、言って欲しかっただけなのかもしれない。
「そっか。頑張れよ」
ウィズが優しい顔で笑う。
その笑顔が、背中を押してくれている。

きっとウィズがいなかったら、私はずっと迷ったままで、何も選べないでいたままだったと思う。
それでも流されるままに巫女になって、不満なまま数年をこの神殿で過ごすことになっていたかもしれない。
もしくは重圧に耐え切れなくて、楽なほうへと、ルアに依存して

生きていこうとしたかもしれない。

でも、私は自分の足で歩く。

ちゃんと今は自分で選んだって言えるから、だから背筋を伸ばして自信をもって巫女になろう。

水竜に選ばれたから、なんだけれど、今は自分で選んで巫女になったって胸を張って言えるから。

ウィズに笑い返すと、ウィズが目の前に手を差し出す。

その手を取って握手をする。

手のひらから伝わる体温が心の中にも伝わって、満ち足りた気持ちが広がっていく。

これで良かったんだって、ウィズの笑顔が教えてくれる。

「これからよろしくお願いします。祭宮様」

「こちらこそお願いします。水竜の巫女様」

半ば冗談、半ば本気で切り出すと、ウィズも芝居がかった仕草で一礼する。

その仕草がおかしくって声を出して笑うと、つられるようにウィズも笑い出す。

心の中の枷が外れたみたいで、笑い声と共に、どんどん気持ちが軽くなっていく。

こんな風に笑ったの、いつ以来なんだろう。

「今度会う時は、巫女様だな」

笑いが収まると、感慨深げにウィズが呟く。

「そっか。そうなんだね。そうしたら、こうやって話したりするのも最後だね」

「ま、一応そういうことになるな。二人きりで話している時はとも

かく」
二人きりという単語に鼓動が早くなって、顔が熱くなっていく。
それで初めて気がついた。
いつの間にか、ウィズが心の隙間に入り込んでいたことを。
まるで今全ての事がわかったかのように、心の中の霧が晴れて、色んなことが見えてくる。
だからルアを選ぶって口に出した時に、違うって警鐘が鳴ったのかもしれない。
巫女になりたいっていう気持ちが眠っていたせいかもしれないけれど。
ふいに、今までしてきたことが恥ずかしくなる。
情けないところばっかり見せていた。

「なんでそこで止まるわけ」
見透かされたような気がしてはっとする。
絶対にこの気持ちに気付かれないようにしないと、ダメ。
だって、昨日会ったばっかりなのに、おかしいもの。
ウィズだっておかしいと思うに決まってる。
とにかく、わからないように誤魔化さないと。
「ううん。二人で話すことなんてあるのかなって思っていたの。だって、ご神託をウィズに伝える時だって、誰かしらは同席しているわけでしょう」
「まあな。でもそれはお前次第じゃないのか、巫女なんだし」
ご神託を伝える時に、誰も同席させなくっても良いって事なのかな。
イマイチ言っている意味がよくわからない。
頭悪いのかな、私。
「だから、お前が望めばいつでもこうやって会えるってことだよ」

ドキっと鼓動が高鳴る。
一度自覚すると、意識しないで言っているのかもしれないけれど、どんなことにも反応するようになって困る。
「あ、うん」
それだけで精一杯。
なんかこれ以上喋ろうとすると、ボロが出そう。
「あ、うんじゃなくって、どうせまた悩んだりするんだろうから、その時にはいつでもこうやって話聞くからって言ってんの」
ポンポンと頭を叩かれる。
やっぱりダメな奴なんだって思われてるんだなってその仕草で思う。
きっと妹姫に接するのと同じように接してるんだろうけれど、でもこうやって何気なく触れられることが嬉しい。

「その時は呼びつけるから、覚悟しておいてね」
心の中を見せないように、冗談で交わして笑う。
そうやって笑えば、きっと自然に出てしまう笑みも隠せるから。
「おー。いつでも呼べよ」
服の汚れを軽く払いながら、ウィズが立ち上がる。

裾をぱっと皺を伸ばす程度にはたき、何も無かったかのような顔で、目の前に手を差し出す。
服の汚れなんて大した事じゃないように振舞うのは、やっぱり育ちの良さなんだろうかとか、くだらないことを考える。
そういうことを考えていないと、ウィズの動作に見惚れかねない。
「ありがとう」
手を取り立ち上がり、裾の皺を伸ばし、服の汚れを払う。
これから神殿に入るんだから、草や土で汚れたような服で入るわけにはいかない。
入念に確認して、失礼が無いように、草一本でも服に付いていな

いようにする。
元々粗い生地で出来ているから、どうしても細かい草が取りにくい。
一つ一つ丁寧に取って、それから顔をあげるとウィズが真顔で立っている。

「成長して戻ってこいよ」

まるで別れの言葉みたい。
たまたまウィズは祭宮様だから顔を合わすことはあるけれど、そこで会うのは「巫女」と「祭宮」なんだから、「ササ」と「ウィズ」はもう当分、もしくはもう二度と会うことはないかもしれないから、別れといえば別れになるかもしれない。

もう「ササ」が「ウィズ」に会う最後かもしれない。

「戻ってこないかもしれないよ」
ふっとウィズが笑う。
たった一言で、全てがわかったかのように。
「戻ってきたくなったら、いつでも戻ってこいよ」
「うん、でも頑張るよ。成長したでしょって胸張って言えるように」

またウィズに会う日がくるのだろうか。
でもその時にはちゃんと、今よりももっと成長していないといけない。
くじけそうになったら、その言葉がきっと助けてくれる。
なんとなくそんな予感がする。
この先の道は決して平坦ではないだろうと思う。
何年後までこの神殿で巫女を務めるのかは、全て水竜の御心次第。
その間、一度も悩まないなんてことありえないし、逃げたくなる

ときもくるかもしれない。
その時ウィズと約束した「成長して戻る」っていう言葉がきっと、自分を奮い立たせる源になる。

「じゃあ、俺は行くよ。またな、ササ」
「ありがとう。ウィズ」

本当に感謝している。
ありがとうなんて言葉では言い尽くせないほど。
もしウィズがいなかったら、眠っていた自分の気持ちにさえ気がつかずにいたような気がする。
そして、ウィズがいなかったら自主的に巫女になろうなんて思えなかったと思う。
今、こんな風に清々しい気持ちでいられるのは、ウィズがいたからこそ。
そういった感謝の気持ちを、うまく言葉にする術がない。
だから、精一杯の笑顔をウィズに向ける。
安心したような顔をして、神殿の入り口に繋がる小道へとウィズが歩き出す。

「最後に一つ聞いてもいいか」
小道へ歩き出してから、思い出したようにウィズが振り返る。
「お前の幼馴染に、俺はなんて伝えたらいい」
ルアに、伝える言葉。
本当は今日の朝までという期限付きで返事をするはずだったのに、結局返事もしないままになってしまった。
なんて伝えたらいいんだろう。

でもちゃんと伝えなきゃいけないことがある。
「ルアは、私が水竜の巫女に選ばれたことは知っているの？」
「さあな。俺は言わなかったけれど、感付いているだろうな」
きっと知っているってことだろう。
村にいる間に、同じ村出身のルアには誰かしら伝えたかもしれないし、直接聞かなくても漏れ聞いたかもしれない。

ルアはどう思ったのだろう。
そして、今、何を思っているのだろう。
でもルアがどう思っているかを知る術はもうない。
一方的に伝えることしか出来ない。

「待たないでと。それだけ伝えて」
「それはどういう意味？」
言葉を選ぶように、ゆっくりと落ち着いてウィズの顔を見つめる。
それから一度息を大きく吐いて、空を見上げる。

空は、村を出たときにはまだ薄闇の中だったのに、今は抜けるような青空の中に、夕暮れの足音が近づいてきている。

どんな努力をしても、ルアに会うべきだったのだろうか。
本来ならルアに伝えなくてはいけなかったことなのに、こうやって人を介してしか伝えられない。
ウィズに「ルアに会わせて」って言えば、会わせてくれたかもしれない。
もしかしたらウィズは許してくれても、次代の巫女候補としての立場が、それを許さなかったかもしれない。
ごめんなさいっていう気持ちと、しょうがないっていう気持ちが入り混じる。

「私は、ルアが村を出る時に言った、二年経ったら迎えに来るっていう言葉を信じ続けた。でも約束の日が過ぎて、忘れよう忘れようとしているうちに巫女に選ばれた」
待っていたあの日々の思いが、胸の中に蘇る。

今日帰ってくるかもしれないと思い続けた朝。そして明日はきっと戻ってくると思いながら床についた夜。
言葉に出さなくても、ずっと帰ってくる日を待ち焦がれていた日々。
そして、約束の日が過ぎた後の落胆。
ルアの事を考えれば考えるほど、苛立たしさが募っていき、忘れようと努力をしていたこと。

「平気なフリをしていても、待ち続けるのは辛かったの。だから、そういう思いはさせたくない」
「あいつ自身が、待ちたいって言ってもか」
ウィズの言葉に頷く。
本当にそう思ってくれる訳が無い。
仮にそう思ってくれていたとしても、決して待たせる事は出来ない。

「うん。人は変わるものだから、先の見えない約束なんてしたくない。そんなもので束縛したくない。それに巫女の任期は期限付きって言っても、明確な期限はわからないでしょ」
「まあ、そうだな」
「きっと、巫女として過ごす数年間で、価値観や考え方も変わると思う。三年前の私と今の私が違うように、巫女の任期を終えた後の私も違う」
数度頷き、ウィズは納得したように「わかった」と言う。

三年前の私は、ずっとずっと子供で、勝気で意地っ張りで、ルアのことが好きだった。

一年前の私は、ルアが約束の日を過ぎても帰ってこないこと、連絡もしてこないことに腹を立て、そして忘れられてしまったのだと悲観していた。

半年前の私は、水竜の巫女に選ばれたことに驚き、ただ神殿での暮らしに馴染めるように努力して、挫折して、日々に終われていた。

今の私は、与えられたチャンスを生かそうと、ウィズに道筋を作ってもらったけれど、巫女になろうと選んでいる。そしてほんの少しだけ、ウィズのことが気になりだしている。

三年前、水竜の巫女に自分が選ばれるなんて考えてもいなかった。半年前ですら、こんな風に自分から望んで水竜の巫女になるなんて考えてもいかなった。

ほんの数日前だって、誰かが新しく心の中に住むなんて、考えられないことだった。

巫女を終えた時、何がどう変わっているかとか、どんな未来が訪れるかなんてわからない。

待っていてというのは簡単なことかもしれないけれど、その時に必ず戻るって言い切れないなら、中途半端な約束はしないほうがいい。

もしもウィズの事が今だけの熱病みたいなもので、巫女を辞めた時にまだルアの事が好きだったら、今度は自分から捕まえにいけばいい。

もしも巫女を辞めた時にウィズが好きなら、それはその時考えればいい。

先の事ばかり考えすぎると、ここから一歩も動けなくなる。

「じゃあ、俺は行くよ」
「ありがとう、ウィズ」
ウィズをウィズと呼ぶのも、きっとこれが最後。

手を伸ばせば届くところにいるけれど、絶対に手は伸ばさない。
元々生まれも育ちも違う雲の上の存在なんだし、優しくしてくれたのは次代の巫女だからであって、勘違いしちゃいけない。
それに今手を伸ばしたって、それは自己満足にしか過ぎないから。
でも、こうやって話すことが出来なくなるのかと思うと、淋しい気持ちでいっぱいになる。

それでも笑う。泣いた顔だけ覚えられるのは嫌だから。
後悔しないと伝えるためにも。
「頑張れよ」
出来る限りの笑顔をウィズに返す。
ウィズも同じように微笑み、そして木の間に姿を消す。

徐々に、落ち葉を踏む音が遠ざかっていく。
遠ざかっていく足音と共に、ササが消えていく。
ササが消えて、ウィズが消えて、次代の巫女だけが残る。

本当にこれでよかったのかな。
巫女にならなかったら、絶対に後悔するって思ったから巫女になるって決めたけれど、なんだか一人になると頼りなくって言いようのない不安が湧き上がってくる。
広い世界に取り残されたみたいに。
巫女になるよってウィズに言えたのが嘘みたいに。

だけれど、不思議と後戻りしようという気持ちにはならない。
成長して戻って来いっていうウィズの言葉が、巫女になろうという気持ちを支えてくれている。
その約束を果たせるようになりたいから、凛として前を向いていこう。
今巫女様のようには、なれないかもしれない。
それでもほんの少しずつでも巫女らしくなれるように頑張ろう。
私が、私自身で決めた道なんだから。

「次代様」
小さな声で、木立の間から神官の呼ぶ声が聞こえる。
程なく、ウィズと入れ替わりで、使者役の神官が姿を現す。
「神官長様がお待ちです」
余計なことは一切言わない聞かないという姿勢が、その言葉から窺い知れる。
やはり心を開いて話せる相手では無かったのだと、改めて強く認識させられる。
「わかりました」
ホッとしたような表情を一瞬浮かべ、それからまた無表情に戻ると神官が一礼する。
「こちらへ」
促されるように、木立の間の道へと足を進める。
数歩歩いてから、一度広場の方を振り返るけれど、もう視界に捕らえることは出来ない。
まるでその場所は存在しない場所だったかのように。
ウィズと話した時間さえ、幻の時間だったかのように。
切り取られた日常は、非日常へと変わっていく。

もう一度ササに戻るその時、ここに足を運んでみようと思う。
そして、もう一度日常に戻ろう。

3DAY・5

――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

真新しい巫女の正装に身を包むと、自然と背筋が伸びる。

水竜を表す、空のような泉のような色の正装を着ることによって、巫女になるんだっていうのを改めて実感する。

これから始まる水竜の巫女になるための儀式の為、生まれて初めて袖を通した巫女の正装は、思っていたよりもずっと軽くって着心地がいい。

気恥ずかしい気持ちと、誇らしい気持ちが入り混じって、まるでお祭りの前の夜のようにドキドキする。

神殿に来た時に与えられた部屋で、村から着てきた服から着替え、今はその時を待っている。

巫女になる時。

それが今目前に近づいているのに、まるで現実感が無い。

窓を開け、水竜の座す奥殿を見ても、今はまだ水竜の声が聴こえない。

この後の儀式が終われば、水竜の声が聴こえるようになるっていうのも、頭ではわかっていても感覚的には理解できない。

今巫女様が、巫女になった時に理解できるとおっしゃっていた、誰でも巫女になれるわけではないということも、あの奥殿に踏み入れた時に理解できるのだろうか。

陽がゆっくりと傾き始めている。

月明かりが支配する前に全ての儀式を済ませなくてはいけないので、巫女になる時は、もう目の前に迫っている。

二日前この部屋を出た時、どうして巫女に選ばれたのかわからない不安で胸がいっぱいだった。

今も、巫女に選ばれた理由がわからない。

水竜の声が聴こえたら、まず聞いてみよう。

「頑張らなきゃ」

自分自身を鼓舞するように呟いて、部屋のドアに手を掛ける。

カチャリという音と共にドアが開くと、決して広くはない廊下の両側に、神官たちが一列に並んでいる。

「どうされたんですか」

確か儀式について書かれていた書物には、こんなこと書いていなかったはず。

圧倒されるような光景に、思わず一番手前にいる神官に問い掛ける。

「我々は儀式に立ち会うことは出来ませんが、儀式へお送りする事は出来ます。次代様が巫女になるその瞬間に立ち会えない代わりに、こうやってお送りさせて頂きたいのです」

その言葉に胸が詰まる。

こんなにも望まれているのに、どうして巫女を投げ捨てようなんて思えたのだろう。

巫女にならないって言わなくて良かった、本当に。

「ありがとうございます」

半年前に、村にご神託を携えてきた神官の一人、一番年配の神官が一歩前に踏み出す。
あの頃と変わらず落ち着いた雰囲気で、そして微笑んでくれる。
「次代様。奥殿へご案内致します」
「はい」

その神官の後について歩き出すと、通路の両側に立つ神官たちが一斉に頭を下げる。
まだ慣れないけれど、こうやって接しられることに相応しい巫女になろう。
一歩一歩、巫女へと続く道を歩き出す。

歩いていく途中に、村へ一緒に行った、使者役の神官の姿がある。
今言わなくてもいいんだけれど、どうしても言いたい事がある。
頭を下げる神官の前で立ち止まると、驚いたような表情で顔をあげる。

「ありがとうございました」
あの時、ウィズに会いたいという我儘をこの神官が聞いてくれなかったら、今こうしていなかったと思う。
その我儘を通すために、きっと神官長様を始め、沢山の人を説得してくれたはず。
それはものすごい努力だったかもしれない。
「わたくしは次代様の望まれた通りにしたまでです」
何もなかったかのように深く頭を下げるので、いつかちゃんとお礼をしようと決め、歩き出す。

足音だけが廊下に響き、他には一切の音が無い。
その緊張感が、厳粛な儀式が待っていることを予感させ、心臓の

音は否が応でも高まる。
ひらひらとまとわりつく巫女の正装に足を取られて転んだりしないようにと細心の注意を払って、一歩一歩歩いていく。

いくつかの角を曲がり、前殿の突き当たりで奥殿へと続く渡り廊下のところまでくると、前を歩く神官が振り返る。
「わたくしがご一緒できるのは、ここまでございます」
渡り廊下のほうへと促すように、神官が手を差し出す。
この先に足を踏み入れられるのは巫女だけなんだと、立ち止まる神官の態度からもわかる。

木々が生い茂り、奥殿の入り口は見る事が出来ない。
ここに来たのも初めてで、この先にどんなことが待ち受けているのかもわからない。
低い木立が渡り廊下の両側を埋め、奥殿に近づくに連れ、その緑のアーチは高くなっていく。
まるで木のトンネルのように。
高ぶる気持ちを押さえるように、深呼吸をする。
木々の清涼な空気が、体中に広がり、現世の穢れが払われたように感じる。

――ここに入ってもいいですか。

心の中で水竜に問い掛けてみる。
しばらく返答がないかどうか、耳を澄ませてみるけれど、当然答えは聴こえない。
代わりに一陣の風が頬を撫でる。
不思議と暖かく感じたその風が、水竜の返答のように思える。

「ありがとうございます」

神官に一礼して、渡り廊下に一歩踏み出す。

一度足を踏み入れてしまうと、誰かに背中を押されているように、少しでも早く奥殿に近づきたくてしょうがなくなる。

でも、巫女らしく振舞わなきゃ。

しばらく歩いてから振り返ると、神官の姿は木々に隠されて、もう見えない。

神官が見ている時には、落ち着いて歩こうと思っていたけれど、どうしても小走りになってしまう。

この先に水竜が待っている。

意外に長い木々のアーチの間を行くと、だんだん奥殿が見えてくる。

半年前から、窓の外に見えた奥殿が今は手に届きそうなところにある。

少しずつ大きくなってくる奥殿に近づくごとに、胸の奥の高鳴りが一段と強くなる。

呼んでいる。

呼ばれている。

もう駆け出さずにはいられない。

早く、早くあそこに行かなきゃ。

水竜が呼んでいるんだから。

聴こえるはずの無い声が聴こえてくる気がする。

五感の全てが、奥殿へ行きたいと叫んでいる。

「サーシャ。走りましたね。マイナス十点」

渡り廊下を抜けたところで、神官長様が静かに佇んでいる。
巫女以外入る事は許されていないはずなのに、なぜ神官長様がここにいらっしゃるのだろう。
お行儀の悪さを指摘された事よりも、神官長様がここにいらっしゃるという事実に驚いて、目を見開いて、食い入るように見つめてしまう。

幻を見ているのかと思ったけれど、間違いなくここにいるのは、神官長様だ。
なぜという言葉が頭の中を占めているけれど、驚きのあまり言葉に出来ない。

「巫女が誕生するその時だけ、神官長は奥殿に入ることを許されているのですよ」
問い掛ける前に、ここにいる理由を神官長様が告げる。
それでやっと、頭の中の混乱が収まる。
半年間神殿にいても、知らないことの方が多いみたい。
老婆と言っても過言のないような年齢なのに、神官長様は綺麗に背筋を伸ばして立っている。

そして、まるでママのような瞳をする。
ずっと怖くてしょうがなかったけれど、本当はお優しい方なのかもしれない。
怒られるのが怖くて、呆れられるのが嫌で、どうしても近寄り難い方だと思っていたけれど。

「こちらにいらっしゃい、サーシャ」
着いてくるように促され、神官長様の後に続く。

目の前に広がる、湖の水を引いた人工的な水辺の中に、奥殿の建

物が浮いている。
本当に浮かんでいるわけじゃないとは思うけれど、外から見ると浮いているようにしか見えない。
知識としては知っているけれど、本当に奥殿は水に囲まれているのを、初めて間近で見る。
そして思っていたよりもずっと大きな建物で、圧倒される。

ここに水竜がいる。
この奥で今巫女様が待っていらっしゃる。

儀式を終えたら、自分が今巫女と呼ばれるようになる。
今ここにいても、その事が信じ難い。
巫女はずっと、今巫女様のような気がするから。

奥殿の建物を回りこむようにして渡り廊下とは反対側に着くと、奥殿の入り口が見える。
入る事を阻むように広がる水辺の向こうに奥殿の入り口があり、その入り口に向かって伸びるように橋が掛けられている。
その橋の手前で、神官長様が立ち止まる。
巫女になる瞬間が近い事が、神官長さまは何もおっしゃらないけれど、横顔の険しさから感じ取ることが出来る。

巫女が巫女で無くなる時と、人が巫女になる時が近付いている。

神官長様の横に立ち、その時が来るのを息を詰めて待っている。
この世に、水竜の声を聴けるのは唯一人。
私が巫女になるということは、今巫女様が巫女じゃなくなるということで、そしてこの先必ず自分にも「その時」は訪れる。
巫女を辞める時、どんな事を考えるのだろう。
今はまだ想像すら出来ないけれど、その時も、こうやって神官長

様が見守ってくださるのだろう。
そう思うと、ほんの少しだけ気持ちが軽くなる。
その時までには、減点されないで満点で毎日を過ごせるようになろう。

巫女になろうという小さな決意が、今は色んなことを前向きに考えられるようにしてくれる。
ほんのちょっと考え方を変えるだけで、人はこんなにも変われるものなんだと、身をもって実感している。
前は怒られると、最初から何でも出来る人なんていないのにとか、育ってきた環境が違うんだからしょうがないとか、そういう言い訳がいっぱい出てきたのに。

儀式の書物に書かれていたとおりに、今巫女様が奥殿から出てくるのを、じっと立って待っている。
巫女になる儀式は、この橋の前で行なわれる。
きっと今頃国中の村で、水竜の大祭が行なわれている。
今日、新しい巫女が誕生するなんて、祭りを楽しむ人たちは知らないに違いない。
今巫女様が巫女になった日を、私が知らないように。

今巫女様が、奥殿から姿を表すのが見えると、鼓動は最高潮に達する。
そのお姿からは目を離すことが出来ない。
振り返らずに奥殿に背を向け、ゆっくりと、でも確実に一歩ずつ奥殿から遠ざかる。
細い橋に足を掛けたところで、ふっと立ち止まり、口元が歪む。
それが笑みのようにも見えるし、痛みを堪えているようにも見え

る。
それは本当に一瞬のことで、注視していなかったら気が付かなかったかもしれない。
何もなかったように、一歩一歩、決して長くはない橋を渡り、今巫女様が目の前に立つ。
手には小さな水差しを持っている。
その水が意味するものを私は知っている。
儀式に使われる、水竜の涙と呼ばれる水が入っている。
その水は、奥殿で今巫女様が巫女で無くなる為に、巫女の力を水竜に返す儀式に使われたもの。
水竜の涙で身を清めた時、巫女としての力を得る事が出来ると、何度も読み直した書物に書かれていた。
水竜の涙。
巫女と別れる時に、水竜が流した一筋の涙がそこにはある。
唯一人声を聴き、理解してくれる存在を失う水竜が流した涙は、次の巫女を誕生させる力を持つ。
「次代の巫女、水竜様がお待ちです」
その言葉と同時に、水差しの中の水が頭から掛けられる。
冷たい水を想像していたのに、不思議とその水は冷たくなく、体の中に全て吸い込まれていく。
一滴たりとも、巫女の正装も、髪の毛一本さえ濡らすことない。
唖然として今巫女様を見ると、まるで泣いているみたいな笑顔で、奥殿を指差す。

水竜の座す奥殿を仰ぎ見る。

その刹那、体中の血が沸き立つ。

体という枷が無くなって、感覚が皮膚を越え、空中に広がっていく。

全身が粟立ち、自分の体を抱きしめていないと、どこか遠くに引っ張られていってしまいそうになる。

解き放たれた神経が、どこまでも広がっていく。

広がっていく意識が、呼ぶ声を捕らえる。

ずっと呼んでいた声。

今まで聴こえなかったけれど感じていた声。

「待っていたよ。ボクの巫女。」

そして、誰も知らない新しい物語が始まる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8898e/

３ＤＡＹＳ

2010年10月8日12時52分発行